

見八犬傳  
拾五編  
卷三

特別  
A13  
4304  
16



里見八犬傳

4304  
16



曲亭翁編演

第九輯 帳下中 之武

王蘭齋貞秀畫

江戸書林文溪堂精刊



南總里見八犬傳第九輯卷之三十三簡端附録作者惣自評  
 稗官野史の言風を捕り影と逐ふ架空を根何せ世の人神益ある其要の只  
 春の日獨坐の睡魔と破るべく秋の夕寂寥の樹影闇と騒ぎ不足るの是を  
 漢土の齊諧異苑の二書あり國朝の浦嶋子傳續浦嶋子傳あり便是和漢小  
 説の鼻祖戲墨の嚆矢といふべし是より以降彼も我も其才小匿しつゝ宇都保  
 源氏物語の艶あり且世に多かる水滸西遊記の奇くて且巧き其文絶妙句句錦  
 繡宜定是稗史の大筆和文の師表多めり只其足る所を源語の事皆  
 淫娃小過て反々勸懲の詳るを水滸の勸懲懲微ありてよく是と悟る者なり  
 見の強人の義俠小過然る是も亦惜ひ其大柢を知るも知ざるも又善讀の身も  
 讀みざるも南倍氏戲墨と事とせざる已が如く曲學者流の皆其類不倣ま欲  
 して糟を舐ら垢脂を拈る和漢今昔幾人を其才ある骨を換胎と奪奪之傑

八犬傳心解卷之三

文溪堂藏

出る。大筆殆世不世也。其骨と振胎と奪と。國圖吞るに似て非る者武を接ぐ。今に至りて衰へむ。蓋其筆の遠祖傳へ禪史物の本。其聖る所以ありとせや。抑古昔れ文人才子の禪史物の本を作り設る。必古人の姓名を借用して胡意其事を異しを。譬源氏物語の光君竹採物語の赫赤姫と。多美世三人あり。詳のこり。五放言不載。見ず。水滸傳の宋江等二十六人及彼晁蓋高俅等西遊記の三藏法師。曲曲のこり。足る者の意匠めて作り設て。要充り未生の人も亦。多。水滸傳の地煞七十二人。西遊記の孫悟空。諸悟能。沙悟淨。及諸魔鬼君の如毛。奉るの違を。又憶ふ。禪史の胡意。其歲月を具せ。是將作者の用心。少く正史と同じか。示せ然。本傳小名と出。北條長氏あり。思へ。彼長氏の伊豆より起りて。小田原より大森実頼を伐。走らして其城を據り。明應二年の事也。本傳の所云。文明十五年より。一元十二箇年後。然り。本傳の當時の

事。とも。況安房の里見氏の山内。扇谷の両管領と兵を構。一事も。あ。わ。か。事。猶。猶。本傳の正史の合ふ外。ゆ。作。り。設。け。條。中。年。號。を。あ。る。本。意。不。違。や。似。れ。る。も。只。看。官。の。與。ふ。其。事。の。某。の。年。よ。其。の。年。と。意。識。の。稗。史。做。る。に。然。る。と。柱。の。膠。する。者。の。虚。實。の。間。小。遊。ぶ。を。知。て。世。と。誣。ひ。俗。を。惑。ひ。そ。憎。論。を。府。爛。庶。庶。へ。毛。鶴。山。が。琵琶記の評。其。傳。奇。を。茶。茶。茶。評。あ。て。其。茶。茶。茶。の。後。漢。の。茶。茶。茶。と。後。漢。の。茶。茶。茶。と。は。別。人。と。名。べ。い。の。婦。幼。の。疑。ひ。を。解。く。足。る。老。實。者。の。言。の。似。たり。只。琵琶記の茶。茶。茶。の。ら。西。廂。記。の。鳳。鳴。の。類。傳。奇。も。も。古。人。の。姓。名。を。借。用。する。者。此。間。能。樂。降。りて。歌。舞。伎。淨。瑠。璃。本。の。如。く。看。官。誰。う。実。事。と。せ。や。明。の。謝。肇。淵。の。今。の。人。傳。史。小。説。を。見。て。其。年。紀。事。実。の。正。史。の。合。は。る。あ。れ。云。云。の。者。あ。か。の。如。く。ん。の。正。史。を。讀。み。不。如。其。事。の。実。の。過。だ。る。岡。卷。の。小。兒。を。悦。ぶ。の。と。士。君。子。を。爲。道。の。

足しむとの宣足不足危言にあらぬ近屬雄飛録の作者其書の中の本傳の  
 実録と年紀合さる外ありて甚しく誹りし予の鳥辭を思ひの齒を撰る不足  
 されは當時解嘲に及ざりし今思ひ出れば筆の次聊の然れば上解く如く本傳  
 る里見父子並八代氏で善士翁の昔の里見氏にして昔の里見氏を昔の里見氏  
 八代氏で昔の里見氏八代氏と云ふ且本傳の歲月も則昔の歲月也亦是昔の歲月  
 ると云ふのである如く空の言畢竟遊戯之味也毫も世の裨益を。這裨益を  
 此枝小幾春秋の意匠と俱のよく人工を費して老に至ると知るは本傳都て  
 百七十回杖あるる筆を只日暮春にけくと幾遍物をあても思ひ難く脚史の  
 山鶴の尾のあり尾のあり貌る長物語の鳥辭か。鳥辭の鳥辭の鳥辭  
 あるを欲するより善を勸悪を懲りし世間の教を重なる女子童蒙翁媪  
 達の迷津の一筏もそれかとの所為を戲筆を筆を把り初け吾少壯の昔上

て懐て久ある隨六史九經女教女訓の貴を多も觸れ聖教賢誨の  
 本を愛ふも知らぬ婦女の予が綴る物の本との好て讀と年來する隨小稍  
 仁義八行の人身在る道理も不義隱匿の身を以て所以をわづらふ辨知  
 近隣に人の女子輩を教ふる事ありて其教び人傳ふ云云とこれとありて  
 切りのまゝと本意を稱するや世の諺不云翹の頭も深信のよめるべし然ハ  
 是等の人の為猶諺反しく解くは天凡稗史物の本古人の姓名を借用ま  
 るの上ありて昔の孝子順孫忠臣貞女を誣て悪人を作り易く其  
 善悪を轉倒共縦新奇と云ふは勸懲不甚害あり譬本傳を金瓶八  
 郎孝吉の故君の為怨を復して且二君は仕む自殺する義烈の士又山林房八  
 身を殺して仁を為義侠の良民俱未生の人を是等と執虐空竊盜の大  
 悪人を作り易く予が甘せざる所稗史修奇の果敢るを見るは所を勸懲の

在の勸懲正しけれ誨淫道守慾の外中至或善人不幸やて悪人の惨毒死  
辱を曝さるるも作者宜く憚るべし勸懲不係れが因て意不和漢今世學  
奇才子の未君子の大道を以て聞る才子其才一是るれども其才一思  
遂の君子の大道を知りて勸懲正しるる最難しと云ふ故に予常  
公唐山老大筆多稗史の作者皆能學以て君子の大道を知るる余亦其  
稗史中淫奔猥褻の段間あり見て悟らざる者作者時好媚で這醜情を  
寫したると思ふ豈然らざるや其淫奔者若し残忍心兇惡の男女中善  
人ある事多し譬言水滸傳の武太郎の妻潘金蓮が西門啓と奸通の醜態を寫  
去又揚雄の妻潘巧雲が裴如海と奸通の事あり如這潘金蓮潘巧雲西門  
啓裴如海等の毒惡慘刺罪死と容ざる猥鴉虎狼の大惡人這其夫淫婦等  
分不義の淫慾不軌の事と看官羨考思ふ便是勸懲不係る所後の誨淫

戒る作者の隱微と精爽是よりして下冷山平燕を師とて才子佳人の奇遇を  
了設る者近日舶来の小説の特小多し好述物柳鶯轉の如く儂盡くも  
老孰も相似て時好媚するあり然も只其真情を寫して淫奔猥褻を筆と  
要せむ則是本傳多し信乃と濱路の情態を見て思ふ其情態不好人と多人の  
差別あり又本傳の龜山綠蓮と船虫と竹林巽と於免子の女皆是水滸  
潘金蓮西門啓等を作り設てり邪淫の戒あるあり心操同一況や美少年録  
る陶朱之助が荒淫の甚し記を予が筆尖似けると看官思ひ予が本意あり  
る那朱之助の後陶晴賢と成登るを戒逆の大惡人他が少年なり時淫  
奔るるを遂て誰か晴賢と云ふ願ふは是も亦勸懲不係るありあると思ふ只  
善人もある惡人もある貴人の公子園門の麗人及市井の男女の關係を鏡の相援  
に野合の淫樂の痴情を宗と寫る者誨淫道守慾するるといふべしそを予が

せざる所へ昔孔子の詩を削るや猶淫哇の詞を遺して其も盡さざるは後小戒を  
 垂るへ又心誅の文法を以て春秋を作るに及びて乱臣賊子の怖れと云果敢る  
 稗史物の本へも学問の餘力にして其の作者の心操を見てもありはるる  
 本傳多し定正顯定成氏の如く比肩暴惡暗愚の君なるも酷く敗して作り做  
 ると看官誅一く思ふもあべく彼定正顯定其先世末王君持氏を弑し且乱世  
 蔽不棄して京都將軍の命令として持氏の幼息春王安王を生拘り害て且故  
 君の職を横領するに不義逆惡の極あり定正顯定其兒孫を大職を兼續  
 せり徳を脩めて先世の罪を償ふく欲せし成成氏を攻伐走して君臣順逆の  
 義をええらるる刺肩谷定正の最後の仇の証言と信容れて持氏入道道權  
 誅あり兵權の衰へて子孫凋落せざることをなせり本傳敗れて  
 愚將と成成氏の如く冤家の為り立られり時教を知らぬ小憲忠と誅して録

倉と追出され游我の程りて其城をも顯定の攻破られて千世末小寓居あれども  
 仁義を以て家と自らせしむるを知り先父持氏の弑逆の逢るは乃祖尊氏の下剋上の餘  
 殃を悟らざりて不賢なるを以て敗るる意表の清の説田中女仙外史所謂  
 春秋心誅の筆小效ふとのいふ鳥游如きかたげれどもその餘も本傳小原衣敗ありを知る  
 人を知るべし又本傳小經文聖教と雜識あり人惑の誣咎めて物の本を以てあつてもあらず  
 かくる經文聖教の慢侮を學飲僻事とて唯小賢もあると云ふ志と異之本傳の新  
 奇の小説るれども其仁義を説き善惡を辨する小至りての虚実の二あるもあつても四  
 書五經の一言一句も學ぶべき婦幼も本傳を愛讀序小啟事て其經文聖語の尊尊を  
 知りありあり且感し且悟りて學ぶの道小志を人をもあれと思ひぬは只是老波深切の  
 言儒經小及びるるに聖語を慢侮せし用捨の看官の隨立意るべし  
 時己亥の秋采月著作堂の南窓小靜坐して本傳の作者みづる評



南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號中套編目錄

卷之五 第百五十四回

百中賣卜侶兩將  
風外風術招異

卷之五 第百五十五回

豐俊得時請恩赦  
妙真愁想入軍役

卷之五 第百五十六回

自行託與留釋子  
毛野明察免死囚

卷之五 第百五十七回

上總民孝義稟再恩  
安房侯仁心定軍令

卷之五 第百五十八回

瀧田三使獻生拘

四下 第百五十八回

扇谷間諜導假使

卷之五 第百五十九回

助友忠誠代父志  
信隆機變借族兵

卷之五 第百六十回

衛士相桃兩枝花  
名將許容內應質

卷之五 第百六十一回

重時逢異同兩生  
義任稟人先之勇

卷之五 第百六十二回

自是之下至第百七十回將結局云其後板者  
五冊近日又復續出焉則全璧大團圓

南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號編中套目錄終



友らみかたをいそぎめくぬる小田平  
わさりのあふのひよりさうき

武田左京亮信隆  
たけださけいりやうのぶ

磯崎増松  
いそきまげ

八犬傳七冊巻

七



賢童五里  
巷  
貝宮莫佳  
人



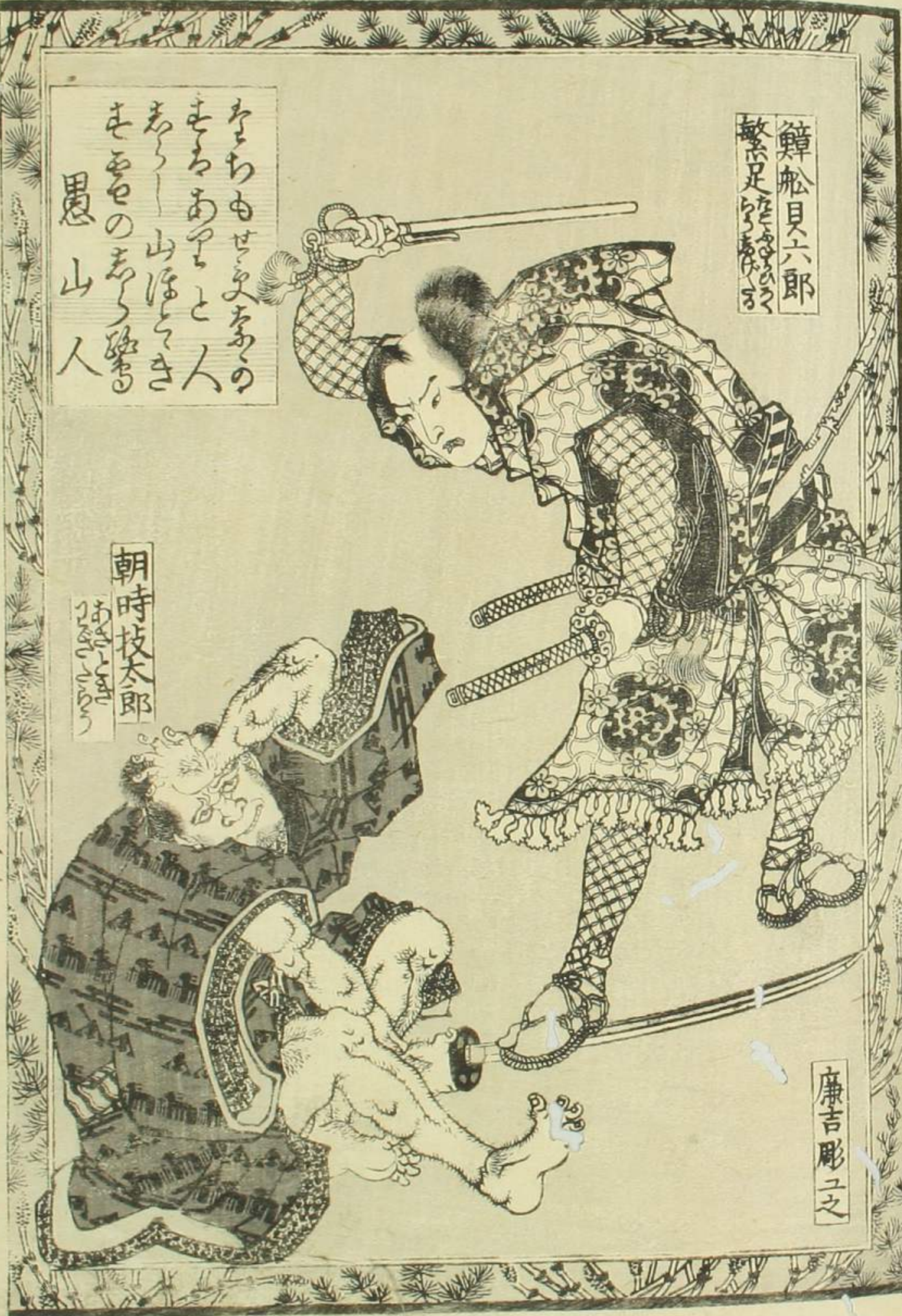
安西就八景重  
あにししゅうはつかげしげ

人魚  
にんぎょ

八犬傳七冊巻

七





をわいせえあいの  
まらあまると人  
あつし山ほろき  
まをのあつし人  
愚山人

鱧船貝六郎  
鱧船貝六郎

朝時技太郎  
朝時技太郎

廉吉彫二之  
廉吉彫二之

八犬傳七冊巻

全

八犬傳七冊巻



何待犬牙傷  
何待犬牙傷

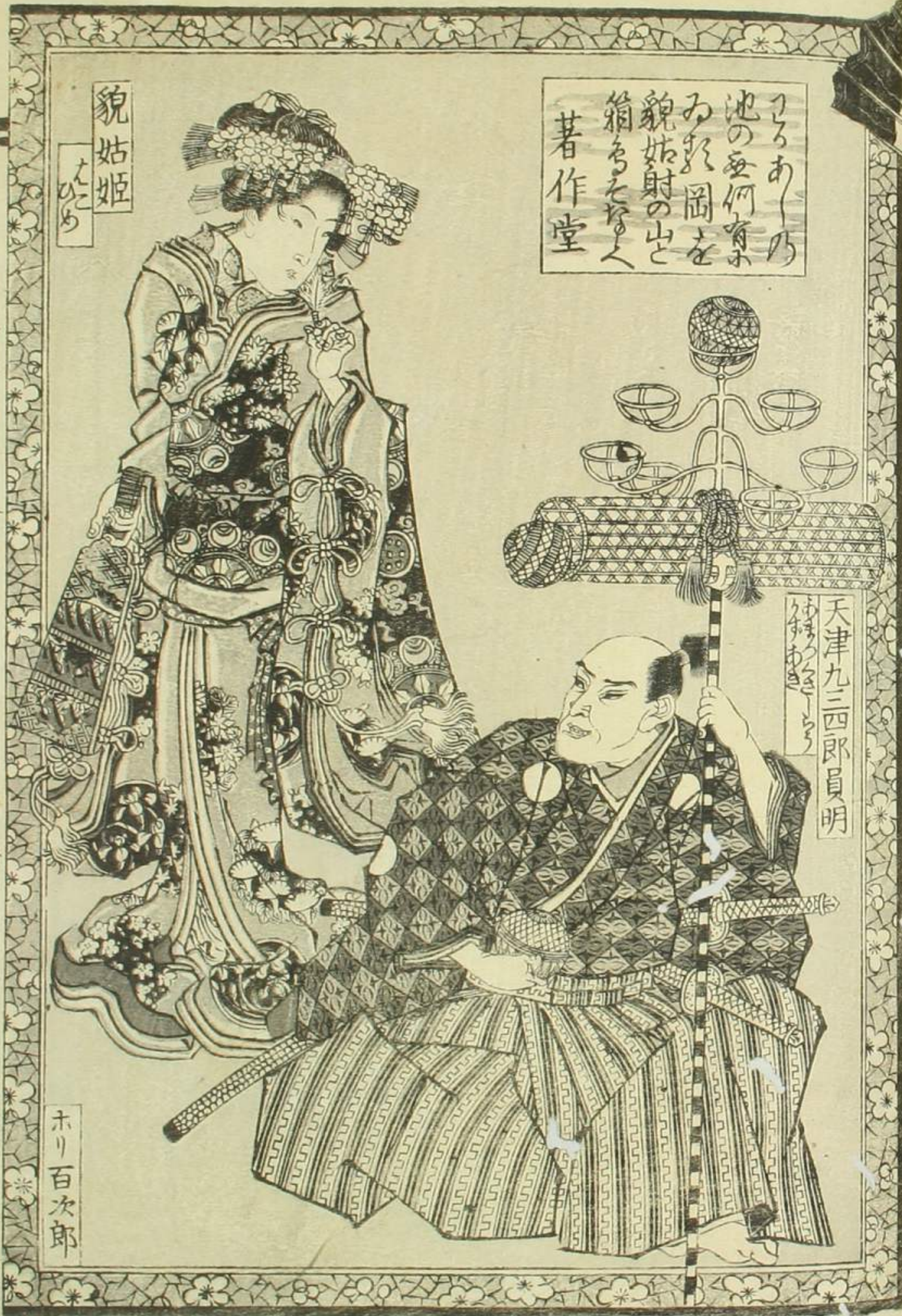
小湊目堅宗  
小湊目堅宗

東峰萌三春高  
東峰萌三春高

天岳餅九郎  
天岳餅九郎

八犬傳七冊巻

八犬傳七冊巻



貌姑姫

大いび

つるあし乃  
池の無何有  
み影岡を  
貌姑射の山  
箱もそぞろ  
著作堂

天津九三郎員明

ホリ百次郎

八天傳九郎卷二十一

八中



勁風盪艦  
甘雨洗干

土

祭

大石源左衛門尉  
憲儀

仁田山晋武佐

八天傳九郎卷二十一

八中

自評餘論

饗庭文庫

或云近曾文人の好事る。江戸を東都と書て是の國字を施す。アツ  
 マノミヤコと讀せざるあり。遮莫みやこ皇居の地をいへ。武藏の古皇  
 居の地をいへぬ。みやこと稱する。僻事と云。國學者流の辨論あり。そ  
 翁も知れるるべし。然るに翁の作る物の本毎に東都曲亭云々と録し  
 る。僻事といふ。と詰る。予答ていへ。然る皇居の地をみやこと稱  
 する。みやことこの畧。省之。是は都字を借用する。漢土にて天子の居  
 所を都といへ。かれば。都の字義は猶多し。正字通。天子所居  
 曰都。又十邑曰都。又邑都名相通。周禮。距國五百里爲  
 都。又總也。取也。皆也。歎美辭也。凡言俱者曰都。又麗也。  
 閑雅也。と注し。學者の知る所。れば。具はせ。只其要を摘む。是は

由てあれを觀れ。和漢其差あるあり。都の和訓みやこのを。そ。スベテと。いふ。用ひ  
 たり。志す。則都會の義。然る東都と書て。アツマミヤコと讀する。僻事とい  
 へ。これけ。已に東都を字音中。則是をトウトと讀。東の都會といふ。用ひ  
 る。あか。いへども。唐山の東都。西京の稱。呼あり。又。天朝。中葉より。南樂  
 南都といふ。東都を字音の隨。讀む。都をみやこの義。と思ふ。者あり  
 り。然るに都會の都。と。ま。は。り。牽強傳會。といふ。理論あり。然。知。る。其  
 頭の論義。の。物。は。抑。吾。作。れる。物。の本。は。皆。是。根。の。小説。を。面。正  
 く。も。る。は。技。を。れ。作者の本貫。を。録。する。胡。意。江。戸。と。い。は。し。て。則。東。都。と。稱。さ  
 たり。あ。の。故。の。名。號。も。曲。亭。王。人。と。自。稱。し。て。玄。同。頼。馬。家。扇。と。い。ふ。云。二。の。雅。號。を  
 り。著。さ。す。予。が。別。號。の。い。ふ。其。が。中。の。馬。琴。曲。亭。の。二。稱。を。始。より。あ  
 戲。墨。水。の。用。ひ。ま。れる。賤。號。の。名。號。を。ま。る。あ。の。用。心。あり。地名。の。亦。あ。の。心。あり

ん。ある人るどて精せざりける。予が編集を同放言の餘も真面目の隨筆  
必姓名を見りて。則江門と録し。敢請世間億兆の君子物よりて予が  
用意の差別あると思ふべし。吾少りし時。行心。只の二技。小西。馬。されより名  
利の奴より取れたる名。不可を今悔て及び。既中て痛く老る。大部かくの如た物の  
本。二。い。作り。か。る。あ。く。か。る。の。ゆ。え。も。今。あ。の。或。向。微。り。後。の。人。吾。用。意。を  
悟。て。必。論。ま。る。あ。ら。ん。と。思。ふ。を。り。の。自。評。と。俱。小。又。あ。の。編。を。附。記。し。て。後。の  
識。嘲。を。解。ま。る。多。辯。の。德。の。害。と。の。文。中。子。の。為。の。恥。べ。し。

○前板 第九輯卷の二十九 百四十六 五冊中の亦校訂の送漏あるべし。と思へ。今  
あ。の。五。冊。を。稿。下。果。る。ま。で。前。板。の。彫。畫。を。オ。の。二。冊。成。を。告。を。倉。卒。小  
披。閱。を。ぬ。ゆ。の。何。を。今。再。訂。小。由。あ。ら。ん。を。又。後。板。卷。の。三。十。六。第。百。六。十  
二。回。の。簡。端。小。録。を。べ。し。

自評餘論終

南總里見八犬傳第九輯卷之三十三

東都 曲亭主人編次



第百五十四回 百中賣下兩將を偈ふ



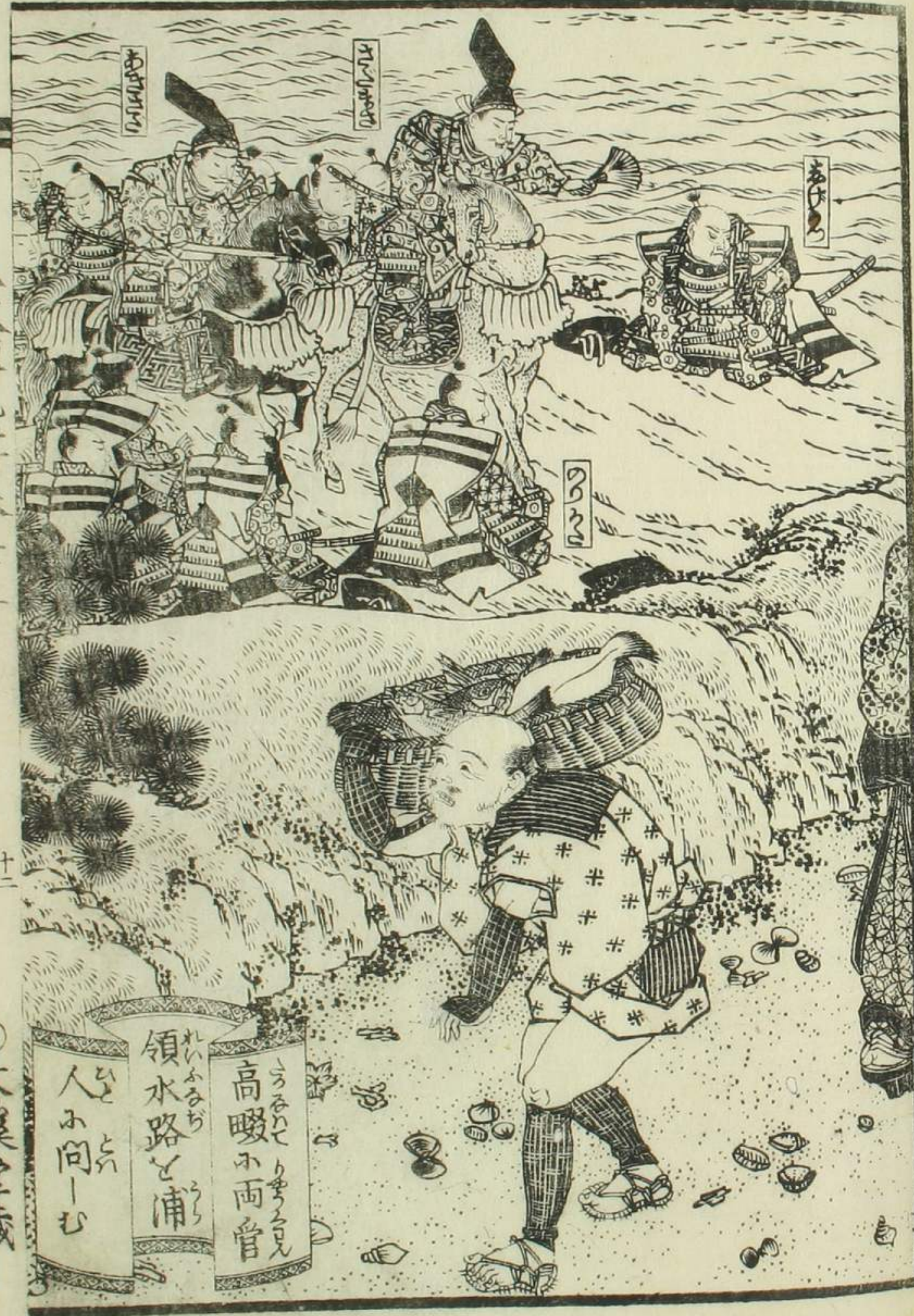
先説五十子の城内の既して十一月末二三日のり時侯より。約束の諸侯  
來會して。士卒第二郭を克満ら。中。小。管。領。兵。部。大。輔。山。内。頭。定。家。  
臣。齋。藤。兵。衛。佐。高。実。山。内。の。館。を。守。ら。る。婿。男。上。杉。五。郎。憲。房。と。共。小  
軍。兵。一。萬。餘。騎。を。従。へ。く。十。二。月。朔。日。の。録。倉。を。打。立。て。二。日。五。十。子。の。來。會。を。相  
從。ふ。兩。大。丈。白。石。城。介。重。勝。小。幡。木。三。頭。東。良。隊。兵。各。千。五。百。餘。騎。共。小  
萬。二。千。餘。騎。先。六。御。河。の。上。到。て。定。正。と。會。盟。あり。其。事。畢。て。五。子。の。城。へ。迎。へ。し。  
隊。の。軍。兵。と。入。る。不。堪。む。尚。大。森。小。陣。を。置。這。他。足。利。左。兵。衛。督。成。氏。二。千。餘。騎。

千葉新介自胤一千餘騎長尾判官景春二千餘騎龍大刀自の代軍稻戸津  
 衛由充千五百餘騎惣大将扇谷修理大夫定正七十餘騎定正の庶長子式  
 部少輔朝寧一千餘騎嫡子五郎朝良千五百餘騎大石見守憲重千二  
 百餘騎其子源左衛門尉憲儀五百餘騎又近國近郡の野武士們招るる集  
 來。頭定正の隊不附者殊不尠。都て五六萬騎及び偽  
 十萬餘騎と唱ふる内長尾景春の既出陣の報ありとのも胡意中途不  
 淹留といふ五十子の城不守。又將我の足利成氏。初大石憲儀。惣大将  
 仰んとい言の憑。且横堀在村不薦。ゆれて任。五十子の城。來會。定正  
 頭定の敢成氏を敬む。動もされが勢。不乘。一。舉動。成氏。あれを  
 憤りて。去。と思。又世の人の嘲諷の有。影護。獨安。を  
 押。默。然。として在。り。程。十二月。二日。至。定正頭定諸將を集合。水陸の

軍評定あり。登時定正謀りて。我意。今柴浦。安房上總。一。草  
 多く渡。然。順風。宜。日。大小の戦艦。一時。安房。推渡。ら  
 小。唾。義成。虜。易。敵。の士卒。分。陸。下。總。多。困  
 府臺。中川。行。德。津。二。大将。遣。下。總。上。總。到。我。陸。水。の  
 大兵。相。合。敵。前後。防。由。兜。を。脱。鉾。を。倒。皆。降。願。べ。の  
 議。什麼。と。勢。猛。令。如。說。示。頭。定。頭。を。掉。其。計。好。い  
 我。大。兵。江。を。渡。敵。亦。船。を。浮。めて。逆。防。戦。下。且。敵。海。邊。を。家。と  
 水。戦。不。熟。者。然。と。況。や。今。去。冬。の。真。中。寒。威。壯。折。る。士  
 卒。の。脚。龜。り。船。の。上。様。必。自。由。多。く。思。其。麼。と。難。大。石  
 憲。重。我。と。出。而。侯。の。御。宏。論。孰。も。是。の。理。あり。然。と。江。を。渡。敵。一時。の  
 亡。か。ら。と。憚。り。い。順。風。烈。折。待。風。上。火。を。放。敵。を。焼。く。

昔唐山三圍の時兵の周瑜が曹日操の大軍を克けるも只風と火の勢  
 助を据れり。その受を思へ召れどとをを頭定らむ。然らば火攻のふか。我亦始  
 思ひさる。あつねども二八月の時候。風烈は日の暮る。前月より今日まで  
 浦風暴来。日稀。備幸。二四日の内。烈火順風あり。我火を放。時及む。  
 其風猛可吹替。及て躬方の船を焼く。舟亦危殆。論て果む。ぐも  
 申され。定正。要時沈吟。大輔殿。頭定。の議論。遠慮。過。躬方武  
 運。稱。風。吹。替。替。明日。柴浦。立。出。那地。渡。遠。近。地方の  
 民。尋。向。必。便宜。と。あ。今。狐。疑。と。を。諾。一。座。の。諸。將  
 成。氏。自。胤。朝。寧。朝。良。憲。房。と。首。白。石。重。勝。小。幡。東。良。大。石。憲。重。並。憲  
 儀。稻。戸。津。衛。由。充。ま。大。家。の。議。従。い。け。信。而。其。次。の。日。定。正。頭。定。大。石。憲  
 儀。白。石。重。勝。以下。士卒。と。僅。百。名。許。を。従。て。俱。城。を。出。馬。を。找。柴。濱。高

暇の浦邊より眺望多。則浦人を召よせ。這里より安房上總へ渡る。水路の  
 遠近を問せ。浦人答。然。い。より上總の木更津まで。水路十六里。一里は  
 一。を。便。路。の。扁。舟。と。渡。る。も。一。夜。と。到。他。商。甘。前。面。高。く。峙。立  
 たる。安房の鋸山。その那山。邊。海濱。まで。八九里。い。れ。れ。も。横。走。る。船  
 持。の。危。者。を。渡。ま。者。い。れ。れ。洲。崎。ハ。猶。右。方。り。て。あ。り。斜。子。ハ。十。餘。里。許。も。あ  
 る。在。於。他。領。を。漁。網。も。那。浦。近。く。這。浦。より。船。を。寄。せ。む。詳。知。と。い  
 け。登。時。一。個。の。賣。卜。氏。の。編。笠。深。く。戴。る。身。の。涅。染。の。太。絹。の。故。る。小。袖。を  
 被。て。朱。鞆。の。一。刀。と。腰。子。跨。磯。馴。松。の。下。る。平。岳。小。丸。を。掛。て。小。机。の。上。易。經。と  
 卦。木。と。筭。子。立。る。筮。竹。也。又。紙。小。捻。り。裏。錢。二。四。あ。の。相。距。る。と。遠。と。い。今  
 浦。人。の。云。う。の。具。也。夢。え。け。忽。地。高。く。峻。た。て。當。卦。本。卦。吉。凶。悔。吝。方。位。宅。相  
 勝。敗。利。害。我。占。妙。々。百。筮。百。中。問。せ。あ。や。と。喚。る。聲。耳。不。定。正。驚。見。り。へ。頭



定ま正ちやう正ちやう人ひと疑ぎ必かならず惑まよ其その疑ぎ決けつ惑まよ鮮せん為な周しゅう易えき如ごと折せつ那な里り賣うトト見みのの召よびてて試し向むかととのの顯けん定ちやう異い議ぎのの近きん習じゆ分ぶん能よてて他たをを召よびとと召よびとと賣うトト氏し何なに容ゆる色いろ徐じゆ編へん笠かさをを脱だつ捨すつ年ねん尚なほ千せん小せう至し眉まゆ秀しゆ面めん白はく星せい眼がん高かう鼻び丹たん花かのの唇しん齒し並なら顔げん凡ぼん仁にのの像ざう耳みみ厚あつ長なが乃な似に相さう貌ぼう堂だう賤けん威い風ふう猛まう時とき大だい石せき悔くわい路ろ傍ぼうのの生せい活かつ見けん引けん引けん定ちやう正ちやう顯けん定ちやうのの馬ば前ぜん近きん求もとてて跪くわい時とき大だい石せき憲けん儀ぎ找たづ出で賣うトト見み汝に姓せい名な何なにとと生せいれるる這こ里こ小せう出で尋けん御ご大だい將しやう則すなは是こ是こ關かん東とうのの兩りやう管くわん領りやう御ご坐ざ目め今いま汝に小せう出で尋けん御ご大だい將しやう則すなは美み稟りん一いつねねのの欲よくとと宣のたま賣うトト氏し答こた仰おほ美みのの人ひと數かず在あ下かのの赤せき品ひん百ひやく中ちゆうとと喚わん做しやう浮う浪らう人にん生せい活かつのの為ため比ひ這こ頭こ旅りょ宿しゆく易えき好こうむむ所しよ年ねん來らい學がく得とく何なに判はん断たん仕しりりのの定ちやう正ちやう

定ま正ちやう正ちやう人ひと疑ぎ必かならず惑まよ其その疑ぎ決けつ惑まよ鮮せん為な周しゅう易えき如ごと折せつ那な里り賣うトト見みのの召よびてて試し向むかととのの顯けん定ちやう異い議ぎのの近きん習じゆ分ぶん能よてて他たをを召よびとと召よびとと賣うトト氏し何なに容ゆる色いろ徐じゆ編へん笠かさをを脱だつ捨すつ年ねん尚なほ千せん小せう至し眉まゆ秀しゆ面めん白はく星せい眼がん高かう鼻び丹たん花かのの唇しん齒し並なら顔げん凡ぼん仁にのの像ざう耳みみ厚あつ長なが乃な似に相さう貌ぼう堂だう賤けん威い風ふう猛まう時とき大だい石せき悔くわい路ろ傍ぼうのの生せい活かつ見けん引けん引けん定ちやう正ちやう顯けん定ちやうのの馬ば前ぜん近きん求もとてて跪くわい時とき大だい石せき憲けん儀ぎ找たづ出で賣うトト見み汝に姓せい名な何なにとと生せいれるる這こ里こ小せう出で尋けん御ご大だい將しやう則すなは是こ是こ關かん東とうのの兩りやう管くわん領りやう御ご坐ざ目め今いま汝に小せう出で尋けん御ご大だい將しやう則すなは美み稟りん一いつねねのの欲よくとと宣のたま賣うトト氏し答こた仰おほ美みのの人ひと數かず在あ下かのの赤せき品ひん百ひやく中ちゆうとと喚わん做しやう浮う浪らう人にん生せい活かつのの為ため比ひ這こ頭こ旅りょ宿しゆく易えき好こうむむ所しよ年ねん來らい學がく得とく何なに判はん断たん仕しりりのの定ちやう正ちやう

八代傳心拜卷三十一

十五

大徳寺藏



たる幸ひやてよ當の賞禄の必しと儘せん然りや欲き順風ありて其  
 風烈しうざれば謀る所をいざれば且其風の何時候吹くも吹く必列  
 辰の數の五之巳の數の即四より四五十日待たれりては願定歎  
 定正をなすて和殿の思ひぬる數萬の軍兵既集會ありて徒  
 日過き戰飯竭て叛く者あり然るに功多不便ありと嘆け定正亦  
 樂を俱ふ百中より向ひて百中は易小妙をたれば風を自由召ぶ術  
 中平金の數も助のりて懇勸請れて百中答るや御徒餘議  
 くのも在下の天地を動さすの術者あり師を以て風外道人ら其法術  
 中鬼神を役風を召雲を起雨を降き其妙其術古の役小角伯仲  
 然りければ道人の塵芥交り術を賣る年来遊姑峯山居く偶這  
 頭小隱遊びて今谷山に在るの師就て順風とてのをいりて御本意の

如くも言はるる議儘のえと在下御道と伴んと云言皆便宜され定正願  
 定歎い堪半の徑其師を訪ん却何を齎さる問を百中答るや師の  
 寡欲もも紙一枚でも報を受て請る者あり則沐浴有戒て仍これ對  
 面を饒されたり遮莫猛可の脚登山る御伴當代垢離と當りて那里へ  
 谷山來ると分付れ百中の退りて易經筮竹の餘の東西まで皆袂裏に懐  
 ち小机の脚を折柱て引提て歩程の雜兵仗を推ちりて定正願定  
 各馬より乗りて白石重勝大石憲儀以下の伴の士卒と皆從へて赤品百中を  
 先立りて早く谷山來りければ百中則相敬言めて定正願定下馬を  
 登ると饒さる又只重勝と憲儀と兩家の近習五名と從せ俱ふ山に登る

程不常葉樹の多ふ敏希の粒る。這山の平腹よ上古の穴居の迹夜とかが一箇の  
横穴ありける。洞内ふ花苴才一枚布て端然と結跏趺坐する。一個の衰法  
師居り形貌の瘦て千歳の松の如く。脚の細く蟠る竹根に似たり。髯の黒く又  
白くを既か二毛と見るとの元頭髪も亦伸る。身が故りる單の淨衣を被り海  
松の像く破れ撥垂る黒漆の麻の裳法衣を纏ひ。眼を閉て合掌する。开か身  
邊に髑髏の灰を装て香爐代へ焼る。林香の煙靡もや消し起り。當下  
赤出百中且正顯定主従を樹下立在せ。軍洞の内を我に向いて跪に  
報る。師父我百中が自今還りぬ。を風外ら望て。眼を睜に領に。百中飲爾  
る。今日むる。かきあぬ。この早る。やと問へ。百中。然し御宗高嶽を憶り。く  
扇谷山内の両管領の爲に一筆を布け。折言師父の上及び。憑る。美の。只得  
俱して参り。其故の箇様々々。修々ひも。今番正顯定和陸合體して。里見

亡まき欲する。自家の大軍水路を渡して。敵と火攻は做まらざる。其折自由  
ゆる。則列に順風。因り師父の風を求ると。其望の趣を告げ。風外頭を掉  
す。そち又要る。紹介。我術風を自由ある。人を害して土地を奪ふ。其悪  
強人は異る。然る殺伐を去る。去る。去る。と叱る。百中推返して。仰理の  
ひも。征伐闘戦の武の道。況他。逆。我の順。則我順をり。那逆を討て。八  
州。是も平治して。國民塗炭と免れ。枉て需を容れぬ。と口説けば。正顯定も  
共侶。洞門は我を寄り。揮て。道人。咱も。是。關東の両管領。とみ。ら。あ。願。回。へ。る。  
心の誠を照査。あ。願。ひ。を。慥。へ。ぬ。か。り。と。請。求。れ。ば。風。外。道。人。嘆。息。一。く。  
あ。ら。ん。非。是。非。及。び。我。の。風。を。起。し。せ。ん。故。き。方。の。西。飲。東。飲。本。月。幾。日。江。を  
渡。ま。と。問。れ。て。定。正。答。る。や。う。風。の。乾。を。順。風。と。名。列。し。て。願。へ。る。酷。く。猛。烈。に。る。は  
自家の船を覆え。然る疾く。を。緩。く。程。々。吹。て。変。る。と。始。終。乾。を。大。利。と

正頭定也亦公等。諸方の軍兵催促に従はる者あるを承れ成五十子元  
 満より多く出陣せむ欲を四五日以内吉日あると問へ風外指を折て今日十二  
 日四日今よりして四日後八日黄道大吉日乾よりして其不入の事を計ふ大  
 利あり本月八日の辰牌より。端の乾風を起して當晩亥中に至りて休むべしと云ら  
 るの猶疑なく心許る思れん先や試み我本事を示さむ。這方へ來ませと身を  
 起し洞門より立出く山の頂へ攀登れば正頭定以下の毎重勝憲儀儀兩  
 家の伴當百中と共侶相從ふて七階りける。登時風外道人の立る隨乾朝  
 ひく懐より細小る錦の裏物を合し出く。一霎時額不推當で眼を閉呪文を  
 唱へ。驚く件の裏物を合し直く招く程怪むべし。乾の方より疾風忽焉と音  
 來て砂礫を賜け樹を鳴らせ。定正頭定伴當們まで吹墜されしと石不推り  
 或の葛藤枯芒花の縹附て一霎時七在りけ久く堪はれ難くひるる定正

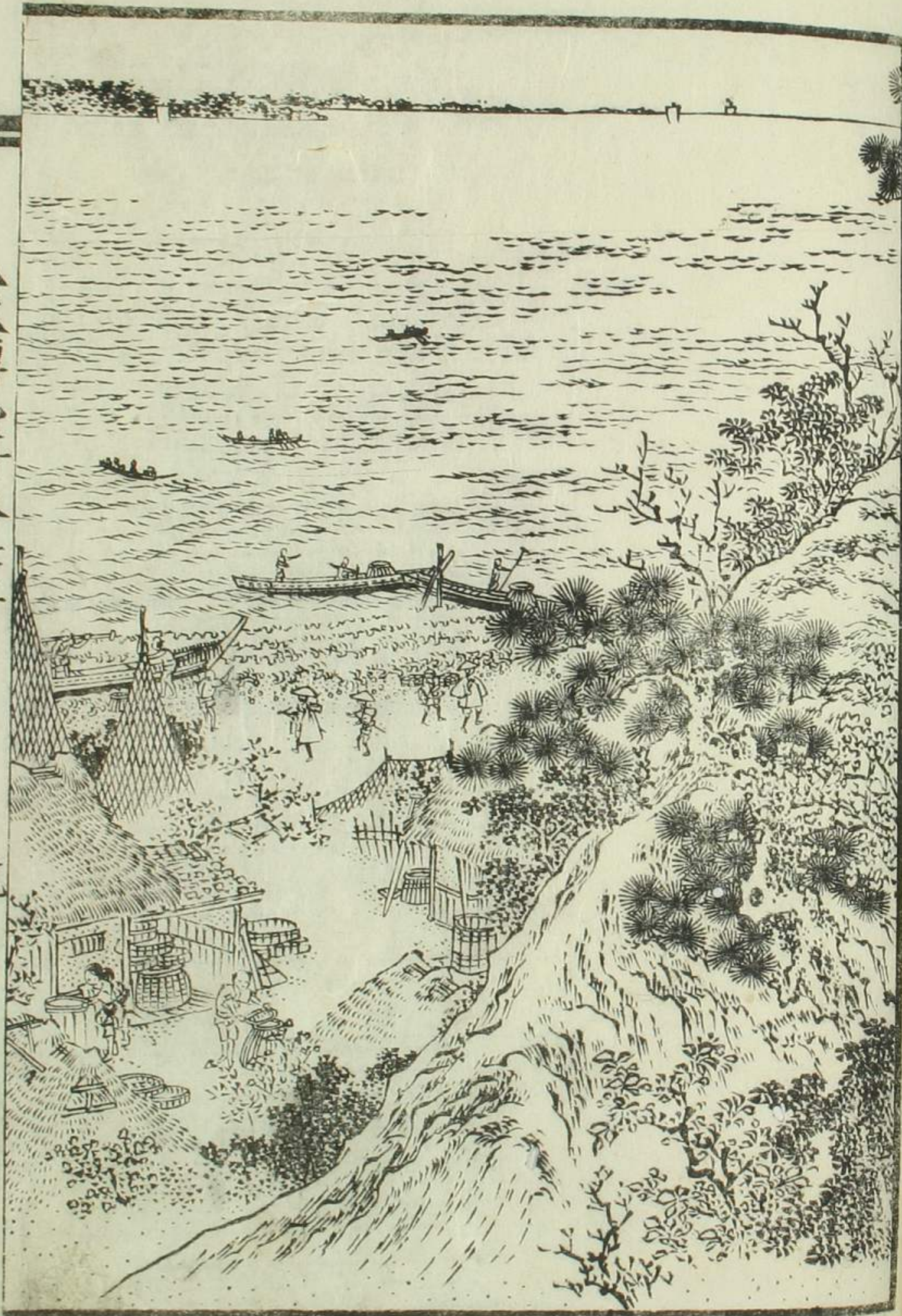
顯定整耳共侶の伴當道人本事の知りぬ願ふ風を歌ゆの聲よ納めてよと叫ぶ。風  
 外。然りと合笑り。更又呪文を唱く。裏表と懐來れぬ姑且て風歌を塵も動さ  
 らず。一々憲儀重勝以下の伴當まで駭は嘆して天より瞻定正頭定の共侶の貌を  
 更の塵も拂ひて。謹く風外は朝ひて飲びを陳てゆき。師の寔は神仙の既奇風の  
 幫助あれ敵と火攻の計成りて義成父子と虜の多る。憎しと思ふ悪八犬士昏  
 斃り。軍門より鼻入る。翌より四日外を出る。凱旋の折又ある来り。拜見し法  
 恩の報ひとをまけれとを風外。吹まき不口と。我人の為偶小術を施せむ。報  
 ひを思ふ者あるを然らば那風を起し。次の日あると立去りて。舊山へ還る。西公楯  
 念るまぬ。又對面折るる。只我弟子百中と權且兩公不從せん。他が親赤  
 岳其甲の伊豆の堀越の御所。政知の舊臣より。先君卒去の折伊勢新九  
 郎長氏の襲れて城地と失ひぬ。那身則退隱して相摸の武澤居り。主婦

ともうたふた。すでこれこゑん。その子首中孝順。且奇才あり我其孤を憐て  
 共小打續て既小是古人なるぬ其子首中孝順。且奇才あり我其孤を憐て  
 年来弟子小あて易を阻子せし既中々奥義をゆる倘疑はるあふ必他小問  
 受との暗譚の間定正顯定の心ともる共侶小澳の方を眺れば這前濱を科  
 草ら上總のち安房もも斜下と見えけり當下顯定生口ていさ。師  
 父の教誨幸ひ多る肝胆小銘して忘るへん就て又教を受て惑ひを解まふ  
 美あり御高嶽中々地方の浦人を口もせ安房へ渡るは水路の便宜を云を  
 尋ひ小其答詳るを船中安房へ赴く何の浦が近らや誨えぬと請問の  
 風外も亦海を眺め。現其謀も要緊るべし安房の洲崎を第一の港口とま  
 稲村の城へ近ければ。諸國の海船の都て洲崎へ入るる。約水路の洲  
 崎へ近ら相摸の三浦より。純六里も過さ相望む其浦も若屋も松も數  
 へ。然る兩公の戦艦八日の曉か早く高嶽の浦より漕出いて三浦の方へ推

遠り。乾の順風起る不及て甚奮直洲崎へ寄せ勢小車戦十倍。よく  
 防者る。又安房の洲崎より尉崎へ水路八里之他富士の西と成の間の  
 見也。遊姑峯も亦成女小見也。又檜嶋の成の方。假奈澤の女子の方。伊豆の西之  
 浦の成女の方小當れり。おち皆安房の洲崎より。眺望の方位へ有恁れ相摸の三  
 浦より。洲崎小船を寄する時乾をり順風とま。又大磯の成の方雨降。山嶽も成の  
 方之崎の成女の方と知るべし。然る五十子の城より出船り。里見と伐んとる。安房の  
 迂遠中々。水路及て近ら。鹿山を目標中々。上總の浦へ寄るも。倒小便路を  
 せ。かれも徑小稲村の城を攻落さす欲り。非如迂遠くも我風濤の帮助  
 あれ。速中て障りる。必勿狐疑あひそとの不定正顯定の。感服。く  
 欽びの。俱小一唱之。歎いて。馮。思ひ。姑且。て。風外。又安房。方。と  
 うち眺め。登。百中。と。喚。汝。那。を。知。れ。り。や。の。遙。指。さ。せ。百。中。も。亦。ゆ。と

見。小子眼明るべし。見る所はを教ふと請問へ。風外又指示して。知ふ事。那  
 他を見よ。洲崎の方小隠々。一道の黒氣あり。是則那里。反忠の者ありて。  
 必。兩公の戦ひを次負ん。翌よりして三日の内。其吉左右と少く。とある。定。小珍重  
 珍重と祝まをうち。少く定。正。顯。定。い。欽。い。堪。され。の。憶。を。至。妙。々。と。稱。へ。意。  
 氣相共。小。揚。々。と。あ。れ。も。風。外。の。術。小。誇。れる。氣。色。も。定。正。と。顯。定。を。相。徹。め。  
 論。ま。や。兩。公。の。盛。德。吉。向。運。都。々。か。の。如。く。ま。れ。も。天。機。の。謹。て。漏。ま。か。ま。今。此。言。の。  
 戲。れ。の。功。人。も。知。せ。ぬ。を。今。り。も。時。移。ら。ぬ。猶。長。居。あ。ら。ぬ。上。卒。小。疑。ふ。者。あ。ら。  
 び。と。く。還。り。あ。か。と。さ。そ。が。立。れ。定。正。顯。定。是。然。と。心。の。俱。別。と。生。て。又。公。を。  
 師。父。の。德。義。忘。る。べ。か。ま。口。の。儘。小。相。別。れ。再。會。を。許。され。ぬ。特。小。送。憾。の。至。  
 へ。但。一。百。中。の。め。あ。ら。ぬ。軍。功。あ。ら。ぬ。重。く。用。ひ。俸。禄。思。ひ。の。隨。る。べ。し。と。公。を。風。外。  
 少。あ。へ。せ。不。言。と。他。の。亦。純。袴。の。為。小。西。韜。ま。れ。て。勢。利。の。奴。と。る。と。樂。に。權。且。麻。毛。

下。小。隨。ま。ら。ぬ。値。遇。の。奇。縁。と。果。せる。と。い。う。百。中。の。ち。向。ひ。小。子。と。勉。め。よ。今。  
 番。の。闘。戦。合。期。して。汝。兩。侯。の。與。小。微。功。あ。ら。ぬ。速。小。辭。去。く。舊。山。小。遠。々。一。古。の。  
 人の。父。り。一。日。除。目。を。見。れ。二。年。道。心。を。損。ま。是。を。慎。め。慎。め。と。叮。寧。に。誠。れ。百。  
 中。唯。々。と。心。して。身。を。起。し。先。小。立。く。卒。と。下。山。を。い。せ。定。正。と。顯。定。の。則。伴。當。  
 從。へ。徐。々。山。を。下。る。程。小。風。外。も。亦。後。小。跟。々。洞。の。邊。ま。送。り。け。然。る。憲。儀。重。勝。  
 等。の。餘。あ。ま。從。ひ。來。ぬ。兩。家。腹。心。の。近。習。ま。俱。小。風。外。道。人。の。奇。風。の。術。と。目。  
 擊。せ。若。者。都。て。信。せ。ざる。い。く。信。異。人。の。資。助。あ。れ。今。番。の。征。伐。水。陸。共。大。勝。  
 大。利。疑。ひ。る。と。思。へ。漫。ふ。ち。笑。れ。て。俱。ま。あ。ら。ぬ。勇。ま。け。信。而。定。正。顯。定。の。山。を。  
 下。り。馬。小。跨。々。五。十。子。の。城。へ。還。る。小。御。高。小。代。垢。離。執。り。ける。近。習。等。あ。ら。ぬ。來。て。待。く。在。  
 也。這。餘。の。士。卒。も。比。自。從。て。馳。々。五。十。子。文。俱。一。の。信。而。定。正。の。五。十。子。の。城。へ。還。ゆ。と。  
 ぞ。儘。先。有。司。を。召。さ。せ。赤。岳。百。中。が。事。信。々。と。早。く。あ。ら。ぬ。信。ま。れ。有。司。則。奉。



十九

○文後天皇



谷山小風  
 外房總の  
 便路と指  
 南

○文後天皇

すく。猛可まゝ百中ひゃくちゆうが總所そうしよを準備じゆんびす。夕饌ゆふしん中酒ちゆうしゆを薦めすする。今程いまほど小定正せうていせい顯定けんていの日の在城にやうじやうの諸將しよしやうをも赤品あかひん百中ひゃくちゆうが事の顛末てんまつ其師そのし風外ふうがいが奇風きふうの支さまで。悄せうやう小告知せうこくちされ。大家だいに感かん下げ且かつ欽きんびく。憑たのく思おもひぬる。左右さうぶ程ほど小日の昔むかし昔むかしけれ。定正ていせい顯定けんてい同席どうしやくも憲重けんじゆう憲儀けんぎ東良とうりやう重勝じゆうせうも四個よつごの大夫おほつらうをの侍さむらいを。那風外なふうがいが教しゆ小せう搦なる水戦みづいくさの密議みひぎも。則すなはち赤品あかひん百中ひゃくちゆうを這席このしやくへ召寄めいよせ。猶なほ疑ぎふ。試こころる小百中せうひゃくちゆうは是これを辨わん。意表いひょう小ぬる。其言果そのことく又百中またひゃくちゆうが。數かずらねども我素われす生せいを衛まもふ師しの生せい言げん示しふ。小隱こいんまへうもひを就つく。又一また一いつ議ぎはり。愚父ぐふが故朋こへん輩はいる。其兵每そのへいの子弟しよていの武藝ぶぎ勇悍ゆうかん人小勝ひとせうれ。良主りやうしゆ小遇ぐ絲しが世よを托たくて皆野みな武士ぶし小る。今いまも親おやの由縁よしづと。在下そのと刎頸あしきりの交まり孰しやくも切せつる兵へい。每ごと甲かし。必慮かな百有餘ひゃくちゆう名な。魏ゑい姑こ峯かみ武澤ぶさくの間ま居いり。他ほかも伊豆いづの海うみ邊へ小生せい音ねく。皆水戦みなみづいくさ小孰しやくて。小在下その兩りやう百ひゃく身みの暇ひまを賜たまりて。夜よを目小接めせて。

那地そのち小到せうたうりて。皆薦みなすすめ。御方ごほう小俱ぐく。水戦みづいくさの時とき小臨りんと。必かなよく做なす。あす。千騎せんきの勇士ゆうし小勝せうるべし。と公こうを定正ていせいうちまて。そを西さい女によあると。既すで小出陣しでの日ひト下した定め。八日やちひ出程しでもあらず。其期そのき小合あん。欽きん甚しん麻まを。と向むかへ。百中ひゃくちゆう然ぜんは。在下その那死な友ゆう等らと伴ばんと。徑みち小相あひ摸もる。新井しんせいの城じやうへ赴おもて。船ふね二ふた三十さんじゆう艘さう借かりひ。必かな八日やちひの閉戦せいきせん小先せん駈かを仕つかへ。那里そのの城じやう王わう三浦さんぷ殿てんへ。其船そのふね每ごと小柴しばい船せん硝せう火か積つ入いれて。百中ひゃくちゆう小渡わと。仰遣おほせふ。と請こふを定正ていせい左右さうぶも。饒あさ。先まづ顯定けんていと商量じやうりやうして。且かつ憲重けんじゆう憲儀けんぎ儀ぎ重勝じゆうせう東良とうりやう等ら小意い見けんと。向むかふ。小四し老臣らうしんの別議べつぎ多く。皆便宜べんぎの事ことと。のけり。登時とつ顯定けんていの百中ひゃくちゆう向むかひく。目今いまの一いつ議ぎ定てい小宜いし。我軍われぐん兵へい多おほく。あとの小水戦みづいくさ小孰しやくる。稀まれと。熟じやくと。汝なんぢ們ら先鋒せんぽう小我われ屬ぞく城じやうも。那里そのの城じやう王わう三浦さんぷ陸奥りくお守しゆ義同ぎどう。汝なんぢが船ふねを借かりき。欲ほす。新井しんせいと我屬われぞく城じやうも。那里そのの城じやう王わう三浦さんぷ陸奥りくお守しゆ義同ぎどう。父ちち丁ていの世よ小知しれ。勇ゆう士し少すくく。水戦みづいくさ小孰しやくれ。必かな是これあるべし。明あ日にち使し者しやと。

遣し風謀合せを百中額衝に美く。あつらん左の事。御符  
 節を賜ふ。却航幡を借さる。付節をく。那里に。疑る。ゆひのむ。既  
 ち借り。船小標識。く。何をり。敵と御方。分別せん。のを。願ひ  
 と請へ。顕定點頭。現脱。落る。用心る。新井の城へ。豫。火急の  
 軍事と辨せん。為。付節。既。渡。與。と有り。汝。今宵。取せん。の。定正  
 も亦。早。我。諸。方。の。軍。兵。を。催。促。あ。折。々。く。大。小。の。船。と。駈。合。せ。水  
 戦の所用。小。做。武。藏。下。總。の。諸。川。に。思。ふ。も。似。ぞ。浅。船。の。稀。り。水。戦。や。巨  
 船。も。快。船。ど。り。便。利。と。さ。れ。早。く。敵。小。合。り。れ。汝。信。れ。航。幡。の。ヨ。ク。餘。り  
 あり。され。新。井。の。城。に。借。る。船。を。山。内。の。航。幡。と。用。る。と。好。と。せん。或。は。又。那。家。の  
 航。幡。を。借。さん。の。左。も。右。も。せ。と。諭。其。百。中。欽。ひ。美。て。然。在。下。明。日。の。曉  
 天。小。當。城。を。立。去。く。邈。姑。峯。路。へ。を。送。り。目。今。美。り。の。御。意。の。如。く。水。戦。や

巨船より。浅船が。進退自由。れども。我師の。奇風の。幫助。へ。巨船も。亦。走る。浅  
 船。も。快。船。ど。り。便。利。と。さ。れ。早。く。敵。小。合。り。れ。汝。信。れ。航。幡。の。ヨ。ク。餘。り  
 あり。され。新。井。の。城。に。借。る。船。を。山。内。の。航。幡。と。用。る。と。好。と。せん。或。は。又。那。家。の  
 航。幡。を。借。さん。の。左。も。右。も。せ。と。諭。其。百。中。欽。ひ。美。て。然。在。下。明。日。の。曉  
 天。小。當。城。を。立。去。く。邈。姑。峯。路。へ。を。送。り。目。今。美。り。の。御。意。の。如。く。水。戦。や  
 皆。焼。く。を。い。ひ。む。と。い。の。定。正。笑。け。然。也。々。と。領。之。密。議。へ。果。一。く。ら  
 顕。定。の。白。石。重。勝。も。今。宵。百。中。小。渡。與。と。付。節。の。事。航。幡。の。事。及。明。日  
 新。井。へ。使。者。を。立。し。義。同。謀。合。ま。百。中。が。事。恁。々。と。あ。る。ゆ。え。命。を  
 定。正。も。亦。大。石。憲。重。憲。儀。も。今。宵。百。中。小。取。も。他。が。路。費。の。事。又。戦  
 財。帛。を。乞。禀。さ。る。の。由。有。司。小。傳。へ。よ。と。を。百。中。推。辭。す。要。せ。在。下。只  
 身。單。少。く。二。十。里。有。餘。の。旅。る。路。費。を。賜。り。て。用。る。所。る。況。戦。財。帛  
 る。の。聊。も。望。し。か。ら。ざ。り。付。節。と。御。航。幡。を。預。り。ま。る。事。足。り。る。身。の  
 暇。を。賜。る。べ。し。と。い。の。定。正。顕。定。の。其。廉。直。を。感。し。強。む。憲。重。も。憲。儀。も  
 又。重。勝。も。東。良。も。這。取。買。才。を。ゆ。ひ。より。実。小。幸。甚。し。と。稱。え。く。疑。ふ。者



るるけり。恁而白石城介重勝ハ百中をわく退て隨即符節と航幡を  
 遞與まゝ百中をを受令り。辭しと懇所不退は。權且枕を就く  
 程不既は曉天より久。熟睡も治せ起出。隸僕が羞めぬ早飯を  
 喫果々。遽しく身装らふ符節を林定と懐不夾め。又袱不裏と。航  
 幡を背に駝め。則件の隸僕を。案内の者も。開城の角門より出  
 去り。鳥夜不乗。くいと。程不先谷山不赴は。洞門より喉内余風外ハ  
 既不起出。落葉を集めて。焼々居り。今百中が來ぬるを見。招入ま  
 首尾を問ふ。百中の。昨宵定正顯定は。説薦め。符節と航幡を  
 事の顛末を。其々報知ま。風外は。領を。開らんと。是梯は。我ハ再度の  
 使もあむ。その折まであ。不在ん。一。要時密談ありけり。這風外道人ハ百  
 中の。虚談。實。看官作者の。分解を。俟。各猜し。知れるるべし。

第百五十五回 豊俊時を得て恩赦と請ふ  
 妙真愁懇して軍役に入る

これ 是より先ハ大阪毛野流智ハ那夜艾、大法師と大村大角を。情地ハ快船あり  
 の 兼せ。武藏の柴濱へ遣は。詰朝單伴當を。從。稻村の城へ。去。隨御  
 義成王ハ見参して。昨日大角と共侶ハ、大法師ハ説薦め。件の僧侶を。投  
 方へ遣は。ける事の首尾を。詳。美我成王。致。あ。那八百八人の  
 筆計必是成るべし。と。毛野が。奇。感。當下毛野又。京。臣。既ハ  
 計る所ハ。僥幸と願ふ。似。必。何。大角則。那地ハ在り。賣  
 上。敵を。倡。欺。時。只。那城内の。每。便。欲。聞。戦の。折。餘日  
 尋。那城兵ハ。親愛せ。便。速。又。竟。遇。事  
 徒。前。知。所。却。危。義成王。領

其も理の言をり。那秋毎小禽を捉る者も見よ。必あへ友鳥の渡るべし。豫より相定ゆるわねども。媒鳥を出し措く。野の鳥早く其聲を。送る昔泰ひ来て。掛る羽籠不粘ぬ。況戰場の蒞む者。是存亡の境。然ハ那城内の士卒。大将品者。吉凶禍福を占問ん。必末々大角が。楯る四の吉貝ト。粘ぬ楯る者。已死ぬ。逆是は。思量り。所ゆるんを尚危し。卑下ある才の誇らぬ。萬一の小心。あらむむと。解れて千里の額を。御注疏の至當。妙る又高。良むの系。就て大角が。掃る所。既ぬ。情地。汪進仕。送る。約申洲崎の快船。那地。便宜の浦。留措く。該ぬ。船と。皆楫取の技。熟るを。從せ。情地。那地。遣。大角。敵と。欺る。

なとも。又是等の幫助を。折大角の幫助。兵頭。堀内。雜魚。太郎。貞住。七宜。折は。尤た。戦功あり。然れも。其武勇。誇る。都て。貞住の。指揮。據り。甘る。と。空。他。上。總。所。要。あり。推。津。の。城。在。留。素。ぬ。の。息。劇。を。知。り。必。急。然。り。其。見。參。の。折。情。地。命。せ。然。り。も。人。の。望。む。と。向。れ。毛。野。又。答。る。中。那。堀。内。貞。住。の。一。も。臣。等。傳。安。ぬ。も。實。一。人。當。千。此。勇士。多。う。豫。知。る。所。大。其。御。撰。擇。優。者。也。い。た。へ。義。成。主。合。合。天。就。て。亦。一。議。あり。素。藤。が。逆。徒。り。那。千。代。九。豐。俊。の。舅。小。貞。直。元。の。生。拘。ア。あ。ける。折。我。思。ふ。や。あれ。ぞ。儘。那。身。を。貞。直。小。関。け。置。れ。今。も。猶。圍。圍。中。の。在。り。今。も。不。豊。俊。先。非。と。悔。て。則。當。管。貞。直。父。子。小。就。て。只。管。不。恩。赦。願。へ。り。

其情願の趣ハ這回の役に従事。今も死刑を寛容の徳澤ヲ報ふ所死とて  
 甘んず欲むとの。其の昨日貞翁が信乃道節莊介小文吾現人等消息一々  
 貞住今上總在在。告訴甚不便。和殿宜く守え上げ。執成を憑むと云  
 野ハ秋ハ堪む。情地ハ答稟生事。臣等が豫計の所其一條ハあり。既ハ  
 稟上げ。如く敵地ハ向者不遣者。大師大角の事。猶足らざる。今  
 一人伴り。敵ハ降参去身者を作り。直事とせむ。士分とせむ。其降  
 人ハ真里谷氏狹然ゆづ。又千代九氏狹開ハ孰れ。一旦罪を被り。館と怨  
 病死の事あり。千代九氏ハ罪重り。久く圍圍ハ籠措る。真実歸服の心  
 あり。情由あり。者ハ必し。敵ハ信容せられ。然れども真里谷信昭主ハ前月

くハ饒して使せぬ。今も思難。言ハ出さむ。ハ人館の脚  
 仁政を深く感ず。今番の役ハ従事。命を涯ハ徳澤ハ答む。今を  
 願ハ稟上。是則御盛徳の致。所ハ所ハ。那罪を恩免あり。敵方ハ降人ハ  
 一役ハ使せぬ。臣等情地ハ那人ハ計畧を授け。敵の衆艦を焼せぬ。其  
 我をいそむあり。と請薦れ。義成主ハ然々々。又點頭。那豊俊ハ逆心ハ初  
 衍心。素藤が為ハ水人ハ做り。且那友。罪免れ。と思ハ。真里  
 谷信昭武田信隆等。俱ハ一旦籠城。ある。根柢ハ。謀叛ハ。且數  
 世。榎本の城主。我其刑戮を。時。他亦先非。悔ハ罪  
 謝。恩赦。願ハ。虚吹。実吹。汝藏人。宿所。勸。向。ハ。実情。ハ。其  
 我必。他。罪。を。饒。入。用。以。兵。の。黄。蓋。が。故。轍。を。踏。せ。敵。を。謀。り。功。あり。其  
 賞。と。て。榎。本。の。城。地。を。返。一。與。ふ。ハ。其。美。を。堀。内。藏。人。ハ。告。て。豊。俊。ハ。示。ハ。ね



知るやもなれ左右川の底の水屑おかりしは只この三子の... 種は道節毛野が復讐言と補助... 願まらぬ那五十子の討も待たず... 勇の母を討つて其一事をりて論... 一重毒時日陰にお立ちまゝ... 次困太の存亡の事又今... 眼を義兄弟等と共侶... 知るやもなれ左右川の底の水屑おかりしは只この三子の... 種は道節毛野が復讐言と補助... 願まらぬ那五十子の討も待たず... 勇の母を討つて其一事をりて論... 一重毒時日陰にお立ちまゝ... 次困太の存亡の事又今... 眼を義兄弟等と共侶...

老に諒言おひの言お出さざれば... 美お及びひれと... 老をうち紛ら... 爾も我薄徳お過... ざる造化の小児の配... 歎くもろと思ふ... 莫御盛徳お比... 思ひ孝嗣等の程... 是千代九氏の一... 然と応て开も... 進退の左も右も...

汝我這旨を傳へ。術よく隨意相計ひて。昨宵よりの疲労あり先退りひ  
 へと。權且暇を賜ひ。毛野の稍退れ。頃日當城内を賜り。僑居の耳房  
 かゝる。則信乃道節莊介。小文吾現八を與る。閑室不吸集て。昨宵、大  
 と大角を情地。武藏の柴濱へ遣りける。事の顛末又千代丸豊俊の事。就て  
 毛野が坐守策あり。と音音曳も單即節を。使ふ。われが先當城。召上  
 る。死意味の恁々。是より。館の仰箇様々々と。言送も。耳は生れ。五大  
 士の皆相歡びて。事の便宜を商量を。當下道節が。大阪は。是我黨第一  
 番の智囊。裏を然る。の計較の。做し易かる。却大角の思ふ倍。く  
 大師をよく。説果しける。其言を。今具ふ。蘇秦張儀を。學びて。妙  
 定。心々々と。言われ。莊介點頭。然る。那人の詞。寡く。いへ。必當。此の  
 事。這温順。見お。あ。敵地。造り。憶。馬脚。を露。失。開。揮。出

せ大阪の配りも亦妙なる哉と。俱稱。己が。現八も亦。やう。犬村の壁  
 返り。山猫を對治して。親の怨を復。後。日。覺。拵。を。あ  
 り。人。大。只。文。学。礼。讓。の。人。の。思。も。ヨ。う。然。る。を。這。回。大。戰。大。殺。義  
 兄弟。拔。萃。て。必。や。花。や。る。武。勇。の。奉。動。わ。ん。と。を。小。文。吾。推。林。が  
 那。美。の。大。師。犬。村。へ。必。成。を。事。を。其。頭。の。批。評。且。閣。て。當。要。を。音  
 音の媪を。召來。一。美。子。を。信。乃。の。諾。を。然。之。開。秘。事。を  
 且。館。の。仰。も。あ。只。消。息。を。亦。聞。き。奴。隸。使。を。所。詮。甲。乙。と。い。ん。よ  
 大。田。和。殿。と。咱。等。と。這。御。使。を。奉。り。今。日。龍。田。へ。赴。け。老。館。の。御。安。否。を  
 伺。ひ。な。り。且。那。媪。も。秘。策。を。示。し。て。俱。々。明。日。夙。か。り。來。て。い。へ。小。文。吾。介  
 且。父。も。毛。野。も。の。議。を。好。く。応。ず。兩。兄。那。里。へ。由。玉。の。事。の。捷。徑。の。上。り。前  
 月。水。陸。の。人。馬。調。煉。以。來。久。く。老。館。不。見。參。考。を。便。是。一。事。兩。用。之。宜。く

計ひぬねと。且勞ひ且急せ。道節廿廿介現八も俱ふ。の談不從ひて。大塚大田  
 が御用多。今より龍田へ赴く。と。兩家老東荒川小生んと。あめを毛野相  
 譚ふ程。信乃小文吾の邊へ。身壯衣ら。伴當を偱して。龍田へ赴けり。介程不  
 大塚信乃。大田小文吾の連り。路次をいそぐ。程近く。辛く。あの日晡  
 時の左側。龍田の城へ。其宿所へ。立寄り。隨即義実主の隠館不  
 參上り。馳て當番の近習小湊目。鱧船貝六郎等。不就。恁々と。上へ  
 義実主。欽ひて。健召と。對面。却宣。前月煉兵の事。あ。より  
 老。久く。汝等と。見。亦憶り。も。軍事起り。愈疎。洩。多。の。恙  
 も。あ。で。と。芽。や。さ。さ。這。回。八。州。の。兩。管。領。敵。を。せ。ら。れ。て。數。萬。の。大。兵  
 水陸。推。寄。せ。ま。る。と。公。風。聲。も。あ。る。美。の。量。表。安。房。殿。を。杉。倉  
 武者助。と。告。げ。て。其。大。略。と。知。り。其。事。愈。實。愈。然。と。向。き。信。乃。先

答る。豫敵地。當家の間諜の兵。毎。立。替。り。入。代。り。注。進。漸。々。其。事  
 多。く。あ。り。防。戰。の。御。准。備。も。小。文。吾。語。と。續。け。敵。の。大。軍。遠。く。日。推  
 寄。る。と。一。條。の。事。極。や。て。実。を。紛。れ。ぬ。も。い。ま。渡。其。館。の。御。雄。武。も。  
 一。戰。を。遂。ぬ。り。數。萬。の。大。敵。恙。る。船。と。返。り。稀。き。と。慰。め。直。展。を。義。実。主。に  
 ち。合。笑。く。否。と。勝。負。の。人。の。時。運。の。前。も。て。必。と。思。ひ。決。む。さ。あ。り。絲  
 毫。の。幸。や。て。我。子。の。愚。を。且。汝。等。の。羽。翼。も。て。毛。野。の。軍。師。の。任。不。當。り。又。汝。等  
 六。名。の。防。禦。使。て。敵。と。候。と。と。制。度。せ。れ。と。い。ふ。の。あ。も。多。く。執。り。思。ふ。我。風。く  
 家。督。と。義。成。の。渡。り。以。來。浮。世。の。事。不。懺。念。せ。ぬ。隱。逸。者。を。在。る。は。傳。り  
 折。中。も。安。然。と。の。さ。る。昔。も。る。樂。も。欲。り。せ。ぬ。軍。旅。の。事。不。耳。振。立。て。且。不。少。く  
 ぞ。の。思。ひ。も。但。大。江。親。兵。衛。の。竟。不。あ。の。期。の。遇。さ。る。遠。憾。の。涯。り。然。も。天。道。の  
 盈。と。虧。と。又。盈。し。他。の。程。歷。止。と。還。る。も。恙。る。何。う。あ。ん。今。や。不。又。思。ひ。益

る。汝等の夜とて日とて軍議の暇あらず。是れは信乃と連立て我を訪る故  
 の也。と回れて天士感謝不埒と姑且して信乃が答る事最辱に御懇命臣等  
 かり来りける然し。るのゆゑに館の毛野を薦めり。計策以て其を就て音音  
 乃御用あり臣等其御使を奉り。先折を以て先尊體の御安否を伺ひ。其  
 るを為し拜見を願ひ。そのゆゑに義実王點頭て開亦要ある事。んは掖留  
 安心に似たり。那音音目等。媳婦も。今おのゝ代四郎の信を待た。果敢るの  
 思ふ事。入何等の所要を知れ。代四郎の代り。一役中。本意不稱。又妙真も  
 親兵衛をいふ。と日毎待り。是も亦不便。は。宜く慰め。夕陽に既没。退  
 退り。所要を果。ねと只願ひ。そが。大士共。左も退  
 又小文五が答る事。否音音目等。密議の反て。暮る。好。時。早  
 明日の早天。他。俱。稲村へ。其折の。

い。饒。と。請。と。それ。好。と。心。猶。の。信。乃。小。文。五。の。歎。ひ。と。喜。
 あり。退。り。出。る。徑。の。妖。雪。の。宿。所。赴。く。程。點。燭。時。候。あり。けり。御。信。乃。
 小。文。五。の。伴。の。奴。隸。を。走。り。て。音。音。目。と。告。り。音。音。目。の。曳。の。單。即。ち。
 歎。ひ。共。侶。の。猛。々。の。儲。の。客。あり。と。妙。真。も。早。く。知。り。て。坐。す。
 入。相。の。鐘。鐃。々。と。响。く。時。候。常。より。早。に。燈。燭。の。花。の。散。る。奥。坐。席。掃。拂。ひ。ぬ。
 冬。の。日。不。開。の。稀。の。華。臥。坐。の。布。は。あ。り。ま。和。ら。ぬ。老。女。王。人。の。故。ら。御。漏。を。老
 實。の。隅。々。炭。斗。角。火。盤。茶。盆。添。一。對。の。茶。碗。不。見。錦。の。錦。不。あ。る。卷
 物。の。取。去。煎。餅。を。消。飲。の。執。も。具。ひ。て。待。つ。程。既。り。信。乃。小。文。五。の。伴。當。不
 呼。門。先。の。音。音。目。の。馳。々。出。迎。へ。先。這。方。へ。奥。在。る。儲。の。坐。席。を。請。され。て。曳。
 單。節。の。火。盤。を。薦。め。茶。を。看。め。云。云。と。他。一。句。我。一。句。迭。の。口。誼。言。訖。れ。妙
 真。も。音。音。目。就。て。席。不。連。り。て。信。乃。小。文。五。不。對。面。の。音。音。目。俱。不。あ。り。





八世傳七郎宗三

三

天保堂



信乃小文五口  
夜音音音と  
密談

おまへ

ひくて

ひとよ

おまへ

八世傳七郎宗三

天保堂

親兵衛代四郎が今番の役不立さるる時、憾の中方るを、両館の憐れ  
 ひて是より先おの早く、照文等と再度の使、京へ遣へ、其欵を諄復せ、感  
 涙果あさるる、信乃小文吾の慰めて、今も亦老節の御懇命、箇様々々と傳示し  
 却伴當と皆宿所へ遣へ、只二天まの儲の夕饌を受るるを、其後信乃小文吾の音  
 音等三人と妙真を招聚へて告る。今日我々が来身へ、但是軍議の密使を  
 毛野が館小産めり、等詩策あふらるる、其等詩策の箇様々々、如此々々の一、  
 千代九圖書助豊俊が先非と悔て、死刑寛裕の報恩、今番の役不立、欲  
 ちて連り赦免を願ふ事、あどと毛野が計る所、豊俊の計をゆいせ、敵小降  
 参り請る折、豊俊の使、刀自等三名と遣さるべし、あめ、今明日の事、あらむ  
 敵の大軍推寄あつた、一兩日以前を好と、あられも刀自等、豊俊と面善らむ、  
 那地にお到り、不使るべし、明日堀内貞仍許遣へて、豊俊の對面せよと、あは館の

御内意の如く、但、兩個の幼息を推し、死時宜るる、妙真大母園の權  
 且、膝下の類ひ、あめ、別談を折り、あふ、在せ、言、省れて、宜しと  
 小文五口是を説示せ、信乃の語を續、足らざるを補ふ、密談、蕭々、り、立、音  
 奥、單、節、も、額、を、哀、れ、果、て、且、然、と、大、く、言、を、頭、と、拾、げ、て、憶、ぶ、も、吻、と、息、つ  
 なる、天、士、小、向、ひ、て、共、侶、小、答、る、る、數、る、身、の、過、分、に、兩、館、の、御、決、恩、代、四、郎、の、三  
 奴、奴、奴、も、ま、御、杖、持、の、下、小、置、せ、あ、を、仰、せ、れ、れ、甄、形、の、照、る、日、小、存、り、な、り、又、其、御  
 慮、こ、の、か、ひ、も、く、憊、る、折、ら、代、四、郎、の、信、も、る、か、あ、も、來、せ、孰、の、日、あ、命、を、捨、て、御、恩、不  
 答、ま、る、る、也、と、思、へ、心、焦、燥、ら、ま、る、概、り、か、り、小、幸、あ、り、て、淡、死、婦、女、子、と、大、事、の、御、用、不  
 立、を、急、一、期、の、執、び、あ、上、や、侍、る、元、力、二、尺、八、乳、を、離、れ、て、獨、遊、を、あ、た、れ、れ、朝、夕、と  
 ても、易、かり、憚、り、さ、ら、妙、真、姨、御、宜、く、憑、と、ま、る、と、云、口、誼、存、死、媳、婦、岳、母、答、雄  
 雄、あ、く、勇、を、信、乃、小、文、吾、の、執、び、感、て、猶、云、云、と、談、ま、る、妙、真、の、心、も、せ、涙、此、々

信乃小文吾のこぶんごうち向むかひて怨うらみぶる嗚な犬田主いぬのぬし犬塚主いぬづかぬし言こと憚おそりまくはれば非たが如ごとく  
 御内意ごうちゐをかれば思おもひ汲みて死し御計ごけいにた犬阪主いぬのぬしも恨うらみくらは代四郎しろしやう使つかひ富山以来いらい親兵衛おんべゑ  
 衛ゑん就しゆては兩館りやうくわんの御恩ごおんを宣のたまはれ我孫わがまごとしくあわらねば親兵衛おんべゑは日取ひとけ早はやく御身ごみ  
 達た先まへもて而館くわん見参けんさんの初はつもも尚なほ總角そうかく多おほ年とし歳とし実まこと優やさては素藤すとうと征伐せいばつの正ただ  
 々ごと二ふた度たびの大功たいこうもも其その後のち又また路みち遙とほるは京師きやうし使つかひ奉りますは目今いま家いへ在あるは敵てき  
 へ間者ま遣つかはさるは然しかるは大おほ事ことの密使ひそかつかひ婦女子ふむすこで宜よろしくむは女むすめ憚おそりまくは奴家やつぱをも  
 犬阪主いぬのぬしの薦すすめし稟まうして用もちひまさめいふ異日いじつ親兵衛おんべゑがかりて面伏おもてふをぬ一ひと役やくの侍さむらいれ  
 船ふねの上うへの技わざがも船長ふねぢやうの母ははの奴家やつぱの刀やいば自達じだつがいふく及およぶは肉身にくみもも依よ介け  
 せは往ゆるは日敵にちてき地方ちか光景ひかりぢやうを注進しゆしんの参まゐりしもも今番いまばんの御用ごようの連つらぬは奴家やつぱ早はや安用やすうぢ  
 宿所しゆくじよ在あるは人ひとの穉兒ちごを衛ゑんして早はや暮くされば依よ借かりて具ぐ員ゐんも事ことをも情なさけないは  
 せは恨うらみ切るは氣きをも向むかへば憶おぼればとし泣なけば信乃小文吾のこぶんご暗くらくは高たかくは推おし

鎮ちんめる信乃のこが先論せんろんをも姨御おやごの怨言うらみご定さだまり以も理りのをぬまわらねば大おほ阪さかが薦すすめし稟まう  
 せは這こ老弱らうじやく三さん個ごの婦人ふにんを敵地てきぢへ間者ま遣つかはさるは亦また是こゝ以も理りのをぬまわらねば大おほ阪さかが薦すすめし稟まう  
 るは音ね喜ぎの媼おんの器械きぎ會あひ合つて男子なんし勝かつて本ほん事ことありはあまのは上かみ毛け荒あ芽め山やま老らう大田おほのちだ  
 もも咄はなちも目撃めくつをも漫まんのは傳でんのは言ごをも又また鬼おに軍ぐん節せつ兩りやう婿むすめ婦ふのは年とし尚なほ少せうと  
 且また顔色げんしやく醜みにくくは蓋敵かきてきの士卒しゆしゆ者もの誰たれもも好このまらずは然しかるは豊後ぶんごが敵降てきか奉ほう密使ひそかつかひ  
 とと伴たりて這こ色しやくをも七しち事ことと謀まらば敵てきの士卒しゆしゆ疑うたがひを相救あひたすひて信容しんようればあまのは大おほ阪さかが  
 思おもひをもも胡意こゝろをも身みを用もちひまさめいふ意い味みと悟さとらば恨うらみをももと解とけば小文吾のこぶんごも亦また  
 ららをも畢ひ竟けい仍なほも止とまるは館くわんの御為ごためを思おもひまさめいふ私わがのは一ひと義ぎをも役やく不ふ足そくせらるはあ  
 ららをも枉まがりて意見いけんをも從したがひまとと論ろんをも音ね喜ぎ音ね喜ぎのは單たん節せつも共とも侶りをも慰なぐさめて盡つまらずは誠まことのは言ごをも未まだ  
 なるは涙なみだの露つゆの玉たま枝えだの除とれば輒さがら妙たう真まこと才さいのは目めをも拭ぬぐひて今いまもも我身わがみのは不ふ肖せうをも恨うらみ  
 より外ほかはも親兵衛おんべゑがかりて功こうをも思おもひまさめいふ召めれば切せりますはあまのは人ひと數かず加くはらぬは敵所てきじよへ

のねと申。御説を穿る。今あるは息絶て身の死を死ね開て後、夢人親兵衛が百伏  
 ると思へ。花の昔の老樹の悲し町人の後家町人の母より身の大刀板、樹を知  
 る。それれ侍時役不立の生甲斐も。既覚期と究り切らぬ恥と知る者  
 ぞ。座親兵衛の侍へは、然るに身と起して外面投て出まると小文吾慌て  
 掖居て理を辨へる。有敷系老女今申短慮の似け申と吐きまると害れ信乃も殆困  
 えて。毒も。寛解して。姨脚。然ると思ひぬ。俱小稻村へ。又大阪等と商  
 量せ。御身の隨意做す。もあえ。必る性起りぬ。喃大田姨の心一筋も。忠信  
 節義の故る。理るとの。和殿の主張甚麼と。向小文吾然り。終  
 申の果も。俱小稻村へ。然るに。姥雪の梅子も。争何れせ。と。いふ。と。い  
 く。音音と。曳。單節も。俱不飲。我。我。御用。御立。も。婦。の。憾。を。送。れ。快。く  
 せ。ゆ。ん。ん。そ。と。又。本。意。あ。る。ん。か。二。尺。八。寸。苗。守。あ。る。炊。妻。不。任。用。せ。る。左。右

由ある。却。あ。る。非。如。泣。く。も。某。本。と。創。て。死。る。幸。を。と。憐。れ。信。乃。と。頭。を。掉。く。  
 否。と。母。三。大。母。三。宿。所。不。在。梅。子。と。留。守。置。か。人。怪。む。一。信。乃。兩。個。の。梅  
 子。も。親。達。俱。一。稲。村。へ。お。ね。ね。里。不。造。り。樹。あ。え。と。一。議。を。な。果。一。音。音  
 曳。多。單。節。も。飲。び。ゆ。え。歎。を。轉。し。ら。ち。笑。れ。身。妙。真。の。貌。を。改。め。信。乃。小。文  
 五。回。謝。し。て。申。思。ひ。多。く。刀。秘。們。の。心。詞。を。盡。さ。る。小。夜。の。深。る。も。知。ら。ず。一。只  
 一。筋。を。老。女。の。愚。痴。も。人。を。恨。み。身。を。托。し。他。の。讓。ら。し。思。ひ。忠。義。の。誠。心。を  
 け。と。猜。し。樹。と。相。計。ひ。多。く。好。意。あ。る。と。面。を。起。し。飲。び。奴。家。の。も。親。兵。衛  
 が。異。日。か。る。来。る。の。美。を。穿。る。本。意。と。稱。ん。信。乃。一。知。ら。ず。腹。立。詞。の。切。を。  
 痛。痛。く。思。れ。けん。許。し。多。く。ち。勸。解。れ。信。乃。笑。つ。點。頭。も。飲。び。の。咱。も。同。前  
 勸。解。ら。ず。中。を。え。却。咱。も。大。田。と。俱。明。日。早。夫。小。稻。村。へ。参。り。姨。の。姥。雪。の  
 母。子。五。名。と。各。轎。子。を。用。ひ。外。規。と。數。

所以を。あまの我の伴當を分ちて両三名残し置て。他を俱して。あまの  
といふ小文吾も俱に。脚小の出た。年少は。老も。身粧。時の程。若。稲  
村の程。近。日。景。短。た。時。候。れ。今。宵。も。准。備。を。い。た。め。と。期。を。推。其。妙。真。音  
音。曳。の。單。節。等。を。皆。共。伴。心。を。又。茶。を。煮。て。薦。け。る。中。力。二。尺。八。を  
暮。春。ろ。と。身。を。臥。房。入。り。早。く。熟。睡。を。と。り。て。這。客。を。知。ら。ざ。り。既。而。て  
信。乃。小。文。五。尺。妙。真。音。音。等。を。辭。一。別。れ。頃。日。姑。且。疎。ろ。け。當。城。宿。所。を。來  
共。伴。の。夜。を。明。ま。留。守。者。の。諫。僕。れ。皆。飲。び。て。仕。け。り。徳。而。次。の。日。信。乃。小。文  
五。尺。早。天。小。稻。村。へ。赴。く。程。妙。真。及。音。音。曳。の。單。節。力。二。尺。八。を。推。て。那。伴。當  
央。ふ。四。箇。の。轎。子。を。駕。り。俱。小。稻。村。へ。を。送。り。抑。這。一。對。四。箇。の。義。姑。節。婦  
が。情。地。の。軍。役。用。ひ。れ。後。の。話。説。甚。麼。を。開。下。回。解。分。る。と。聽。ね。か。い。  
南。總。里。見。八。犬。傳。卷。之。五。十。三。終

南總里見八犬傳第九輯卷之二十四

東都 曲亭主人編次

第五百五回 貞行與小託 穉子を留む 毛野明又察して死囚を免む

却て。犬塚。信。乃。犬。田。小。文。吾。の。早。天。小。籠。田。の。城。を。出。り。只。管。小。路。を。い。そ。ぐ。稻  
村。の。城。の。宿。所。か。へ。來。り。隨。即。毛。野。道。節。莊。介。現。八。小。籠。田。を。も。り。事。の。首。尾。を  
詳。告。知。し。て。老。館。の。御。懇。命。大。江。邊。參。果。取。る。も。御。意。の。趣。に。悠。々  
又。那。密。義。の。音。音。曳。の。單。節。等。を。別。議。す。相。歎。ひ。も。く。ん。と。い。ふ。單。妙。真。の。這。軍  
役。小。漏。れ。を。恨。ま。り。且。ち。歎。く。言。果。々。も。あ。ら。ざ。り。開。も。亦。忠。義。の。誠。心。を。雄  
魂。の。致。ま。所。吐。り。禁。る。由。を。只。得。其。情。願。ふ。信。一。緒。小。來。婦。該。之。の。故。而  
那。穉。子。力。二。尺。八。を。関。く。死。人。わ。ら。む。是。の。事。の。不。便。之。大。阪。宜。く。計。以。玉





が相伴多し程多く安宅へ来りて其の美を京演んとて我両個先もて面談を  
 請ひひと告る詞の玉かハ旋る辨の自抄の都てをあらとて謹て答る事  
 御内意の言の趣美りひひ千代九豊俊と禁錮の美臣等致仕退隱の後  
 多依貞住管りまらる今も不圖の外の饒さそ那人館の御仁政を感服して  
 軍功をとり那身の罪を償んと請ふ言の虚実の臣等屢試く真実情なるを  
 知れり遮莫料りく死の心之目今那身と牽出さる各宜く鞠問を更  
 就く又一議あり那妙真音音豊も單節の旨是忠義の本性なり或其  
 孫の代り或其良人其穉子の代りも渡生生死の海を怖る俱は這回の軍  
 役に用ひらる相欽せし誰か感佩せざる死後世々の美談を今も今も  
 見の公然たる老婦人と穴谷顔美麗の女弟兄弟も然りと今訟獄謝断の席  
 中俱の聲を連ねる未赦されざる罪人の對面をせん倒の面正しくもるは

所りる事や所詮件の婦女子も異日敵地へ赴くも輒生伯所留置て豊  
 俊の對面致さるべし又那兩個の小児カ二尺八寸其母親の軍役果るも輒生是を  
 管りて荆妻拙女を養せし荆妻も拙女も穉兒を愛する癖あり女兒の近曾貞  
 住の妻これいふ子も一あやの他一人の子とも都く穉兒を見れば放ち  
 ざる本性のいへ他も必欽びて衛士へ其の美由心易くると意衷を具不説示  
 其毛野のいへ庄介も事の便宜を欽びて貞仍不謝してのや御配慮の言の  
 趣其理の當りゆるなり那四個の義姑節婦を一旦薩田の宿所へ返して異日  
 敵地へ遣は折れ又召よまら不便るべし然るも安宅の留められ是を知は  
 者稀なり且豊俊の密使の敵地へ趣く身の出入其所をゆるるといへ況  
 カ二尺八寸を令政令愛ふ任用して其母親等が役果るも安宅の措れんと  
 一條の便宜の上の便宜なり特の安心仕りぬといへ毛野も又云云と其歡



びを演る折ら堀内の若黨が檐檻を來り跪せ。貞仍告る。大山主大飼  
 主が御前來りて次の間在在せり。又郎君の上總より方僅還りぬ。と云ふを貞仍  
 うち咄て開き待たし。うけか。疾造方へとせせ。心退く若黨の案内よりそ  
 徐々として這席に入る。兩個の客は是則別人。大山道節忠與と大飼現八信  
 道へそ背立の堀内雜魚太郎貞任の尚初装束の儘。一。航。席末の坐を  
 占め。道節と現八。先貞仍のち向ひ。致仕の後も恙を祝して。又道節  
 がのち。却晩生。今日の所役の婦人們の宰領。その所以の御前妙真音音曳  
 てひとよ。あやこ。當城の來りければ。又轎子かち無せ。昇せて。安宅へ來ぬ。  
 めら。尚外視と數。う。あれ。胡意。芥門より昇入れ。今政早く。知ぬ。ひて  
 俱。婦人們と穉兒。毎。則。奥へ迎。管待。折。令。郎。上。總  
 より。歸。城。あり。お。對。面。し。俱。お。翁。は。拜。謁。せ。んと。次。の。間。ま。ま。あ。け。る。お。公。卿。の。大。阪

犬川と密山談の最中。る。詞の腰を折ら。と思ひ。猶豫して。三日の果るを俟。修  
 主客の向。各。其。大。畧。を。す。く。こ。ま。を。ひ。ひ。と。告。げ。亦。貞。任。も。親。小。向。ひ。て。顔。致  
 衝。剛。才。歸。城。の。も。告。ぐ。且。毛。野。莊。介。小。向。ひ。ぬ。ゆ。豫。少。知。ぬ。ひ。推。津。の  
 城主。真。里。谷。信。昭。主。則。館。の。通。家。へ。介。る。お。那。人。年。來。強。飲。の。祟。かり。けん  
 前。月。暴。風。身。故。り。お。子。息。は。不。幼。弱。多。有。司。と。諸。士。と。確。執。の。事。あり。の。故。か  
 在下。館。の。仰。を。直。承。て。お。そ。な。上。總。へ。赴。せ。り。前。月。より。推。津。の。城。内。在。り。と。之。件。の  
 確。執。を。解。論。し。て。一。家。の。和。睦。を。執。扱。ひ。小。事。を。な。く。平。び。老。黨。若。黨。和。順  
 あり。力。を。勸。せ。心。と。同。く。て。幼。主。不。忠。を。盡。さん。と。則。連。累。の。誓。言。書。と。呈。上。し。て  
 當。黨。錮。の。罪。を。謝。し。ま。り。お。在。下。猶。且。の。後。と。敬。言。旋。り。罷。歸。す。思。ふ。程。お。大  
 敵。猛。可。お。水。陸。より。推。寄。ま。り。下。と。云。風。聲。あり。其。虛。實。の。ま。ご。詳。ら。ざ。り。お  
 両。家。老。東。荒。川。より。急。遽。脚。の。奉。輪。と。り。て。早。く。還。る。べ。し。と。下。知。せ。り。と。云。

隨即推津を立去りて。いそいで歸路を赴く程。浦安牛助登桐山八小森。但  
 一郎田税カ助も召れて。又其管る所の廳南榎本館山云。固城と。次役の頭  
 人小讓り守らる。連り小歸府をいそいで。料も在下と。路ゆく一緒小  
 くら馬を駢かると。を伴隨即俱小大城小参上り。悠と歩上り。早く見  
 参を饒されて。自他一樣小館小拜見。まじりぬ。就中在下。猶且別室小召さ  
 ます。大坂主の密策小依るべし。と。あ。軍陣の御隊配と。御口親詳小仰  
 示さぬ。い。実小面目身小餘る。欽ひ。い。は。是。小由て。各位の連見軍議  
 中。配慮の。を。查。ま。ら。ぬ。今日亦千代九氏の一議也。偶蔽屋小光臨。あ  
 ず。小在下宿所。在。ざ。り。けれ。ば。い。ま。茶果の款待。小も。及。さ。り。失敬。海容  
 あれ。と。陳。る。口。誼。小。莊。介。の。膝。と。找。め。祝。して。開。を。愛。さ。る。推津の  
 家中の確執。い。極。小。解。く。た。れ。筋。を。ま。く。月。を。慰。せ。て。事。理。一。和。殿の

御も柄。感心の外。い。は。し。と。心。と。ま。れ。毛野の亦。貞任。小。ち。向。ひ。那。松。策。の。趣。  
 既小館の御直談。あ。り。る。玉。の。開。も。易。く。且。退。は。る。長。途。の。疲。勞。を。  
 憩へ。ぬ。と。勸。ま。貞任。唯。々。と。心。く。亦。復。親。小。う。ち。朝。ひ。推津の一  
 義も。御前の首尾も。目。今。望。せ。ぬ。が。如。く。況。大坂主の秘策。小。用。ひ。ら。ぬ。の  
 身の面目。欽。せ。ぬ。と。い。へ。貞。任。點。頭。く。然。ん。と。異。目。の。め。る。所。へ。今。い。そ。ぐ  
 必要事。い。は。這。大坂犬川の。奉。り。て。來。ま。た。生。拘。の。逆。徒。千。代。九。豊。俊。と。  
 鞫。問。の。一。美。之。汝。い。は。這。御。旨。と。範。内。番。西。郎。等。小。傳。示。して。豊。俊。を。書。院。を。權  
 檻。牽。居。さ。す。勿。論。汝。い。は。豊。俊。と。管。見。宜。く。衣裳。を。改。め。其。席。末。小  
 列。さ。す。と。い。ふ。母。貞任。の。心。を。あ。り。四。大。士。小。辭。して。遠。く。退。り。け。り。姑。且。一。く  
 堀内の若黨。が。あ。り。四。大。士。小。女。小。を。看。め。果。子。を。薦。め。る。と。い。は。程。小。又。現。八。を  
 御。向。小。妙。真。立。目。音。等。が。早。く。來。お。け。折。の。便宜。を。毛野。と。莊。介。小。い。は。す。御。向。小

和殿等が早く来た。二百歩の遅速。他等が早く来た。和殿も  
既、次の間。王公の計。件、婦幼六名を奥へ。忠義、好情、外。朝、千代丸氏を御糾明の準備。天士、連卒、書院。跟、其、席、毛野、莊、魚、太郎、自、任、道、節、現、八、檢、使、品、尺、許、退、其、上、坐、居、是、  
より以下、前家老、諫の、青侍、鮫内、兼、四郎、の、袴、の下、と、股、を、結、り、揚、て、腹、

挿、の、刀、を、瑞、短、の、跨、ぐ。檣、檻、の、左、の、方、に、在、り。或、豊、俊、の、檣、を、要、繩、の、端、を、合、り。檻、の、上、と、下、の、在、り。登、時、四、大、士、の、睛、を、定、め、り。俱、千、代、丸、豊、俊、を、見、る。年、  
延、黒、と、な、れ、と、因、固、久、に、瘰、瘦、も、多、く、然、る、の、惟、悴、る。書、院、の、檣、檻、の、席、  
薦、一、枚、布、を、推、登、さ、れ、て、跪、居、り。堂、管、見、堀、内、親、子、が、月、屬、惻、隱、あ、る  
所、以、る、べ、し。中、の、單、莊、介、の、肚、裏、を、思、ふ。六、稔、已、前、我、身、武、藏、の、大、塚、を、  
巖、上、宮、六、名、を、誣、ら、れ、て、冤、屈、の、罪、を、論、じ、折、丁、田、町、進、が、奸、虐、を、水、火、の、責、を、  
命、危、く、生、か、り、一、身、の、恙、を、く、賤、賢、君、の、仕、ま、る、て、今、日、の、人、の、罪、戾、を、讞、断、の、  
職、役、を、那、時、我、の、御、士、の、小、廝、今、の、豊、俊、の、一、城、の、主、良、賤、素、是、同、一、く、他、を、  
叛逆、我、の、忠、義、其、做、を、所、云、壞、の、差、あ、る、勿、論、さ、れ、ど、賢、君、上、在、在、惡、

大塚 豊俊 武藏 賢君 上在在惡



八代九郎卷三十四

人の化して良善なる日の。酷吏法を枉れば忠臣も誣られ。罪ふるは罪小死する者あり。定ふ人の幸あると幸あるを。儒は是を命とし。老壯是を自然とし。佛は是を因果とを以て。哉と懐古の臆念あり。惘然たり。當下貞住。豊後と喚びて。千代九氏。這個二位。當家の賢臣。犬阪毛野。胤智。犬川。莊介。義任。又上坐する。犬山。犬飼。即是。這四個の人々。館の御説ふも。鞆問るも。ある。具の答。稟ねと先。そのら。る。と。毛野の。儘。端然と。豊後。より。向て。千代九氏。御不堂。管見。堀内。父子。成就。請。稟。も。情願。の。言。の。趣。の。差。池。あ。る。や。と。問。れ。豊。俊。頭。を。拾。け。て。然。し。我。性。の。愚。る。係。曩。の。素。藤。が。奸。詐。と。悟。ら。し。他。と。魚。水。の。交。り。を。做。ら。ず。遂。に。慮。外。の。御。敵。と。做。る。あ。ら。う。増。辟。隆。車。の。勝。り。を。け。れ。城。陥。り。士。卒。離。散。し。て。身。は。是。楚。囚。の。今。も。も。仁。君。死。刑。を。言。は。れ。ぬ。也。世。尊。の。管。見。堀。内。史。の。長。者。を。禁。獄。の。守。り。勿。論。諸。る。ぬ。も。反。て。龍。中。の。禽。を。

養ふは只惻隱の心。せむはこと。是れ。餓を凍を坐して食ひ肘を枕して。睡るの。久。あ。る。ま。で。身。小。杖。廿。台。の。呵。責。あ。る。死。を。知。る。は。則。是。君。臣。一。致。の。仁。心。あり。仰。は。高。院。德。澤。小。差。を。報。恩。を。思。ふ。も。由。り。願。ふ。所。は。這。回。の。軍。役。不。如。き。ま。死。し。て。罪。を。償。ま。欲。ま。す。の。外。に。な。い。く。亮。察。あ。れ。か。と。啣。言。が。き。く。陳。ま。を。毛。野。の。少。り。點。頭。く。好。々。その。美。あ。ら。う。ち。と。応。て。側。を。見。え。り。と。犬。川。目。の。ま。た。り。正。に。死。あ。り。ち。え。今。少。り。如。し。恩。赦。勿。論。な。死。後。と。問。ふ。は。社。小。応。に。せ。沈。吟。し。る。を。程。道。節。の。味。難。く。信。と。現。八。小。目。を。注。せ。共。侶。小。膝。を。找。め。て。登。上。せ。ね。犬。阪。今。其。召。囚。徒。豊。俊。の。陳。ま。を。堀。内。史。の。勸。め。我。少。く。所。と。増。減。さ。し。只。然。る。も。免。さ。れ。る。は。又。拷。問。及。ぶ。ま。だ。不。造。再。四。の。問。答。も。一。言。一。信。容。ま。す。と。是。千。慮。の。一。失。歟。犬。飼。什。麼。と。見。え。れ。現。八。然。と。領。せ。和。殿。の。小。心。愚。も。同。意。言。と。心。の。表。裏。あ。る。を。亟。不。知。る。べ。も。あ。ら。む。再。三。數。四。詰。り。問。り。黄。金。白。銀。と。え。さ。

るも錫杖鉢骨版の知れん大阪疎忽のあらむと詰れば毛野の合笑て其頭の  
 小心極む。我才子路のあらむれば片言以訟を定むると思ひも孟子の一言の  
 いるとあり人の入りの時言の虚実を知らず欲せば先其人の瞳子を見よ瞳子  
 悠々るる所を依り依り之と教ふる。因て我今千代九氏と問答の折其瞳子を相  
 考ふ孟子の教果して違ふ人の願ひの實情をて虚言をぬを知らず是れ  
 今更疑ふとて解き道節現入る其聰察の感佩して又論を由る  
 莊介ををちやむ大阪の堅定定小介の情を其辭をよき書とて  
 約む千代九氏の所始終符節を合さる如く増減するは是其情の一筋を  
 照驗之大阪の早く自得して相學さへ凡庸なるが今相る所逸早くも樹既に  
 かくの如し實の敬服と稱し同議の外をけれ負仍も負任も四犬迭小善小興  
 多く已小勝を思ふ嫌なき俱小公中て偏頗るは當家の察見の上あり

と感て憑思ひけり。悠而毛野の堀内親子の各目今時あり如く千  
 代九氏の陳する所其実情の疑ひなく館へ去の美を京上げ罪免さるべ  
 若るれ權且裸綫を解饒して去の処へ召升せん唯尚向ふ示さるあり  
 一霎時士卒を退けぬと公負任あるゆ。檣檻侍る饒内兼四郎と  
 くと喚近つけ。事修々と分付れ兼四郎の心を豊俊の要背繩をひ早  
 く解け。坐席の方へ卒とむる推找せ。却走卒等と俱外面へ退りけり。當  
 下毛野の豊俊と身邊近く招き聲を惜む談まる。千代九氏和殿  
 館の御仁政を感謝して願ふ如く今番の戦ひに従ふことを饒される戦功とて  
 其身の罪を償ふ欲する誠心定ふ時をいふべ。あられも弓矢前刀劍の  
 僅小一兩個の敵を殲する馬をよく大功を成さんや和殿一箇の勇を負す  
 我計小従人言ふ。悄地小肺肝を示すべ。和殿の心いふを。と問へ豊俊額

衝に謝して諸彦慈愛の執成ふよと。喪つて我首を既續うのともを。猶  
 後榮の頼とある縦水火の中にも。いやく推辭た何事まれ兼願ふ早  
 く教受と答る詞勇多。天の誓言の地お誓言の誠心氣色お見れらる道節莊  
 介現八とゆる貞幼も貞任も現獎善の域お入りける。あの人成を事あるべと思へ  
 頼厭直失れら。姑且して毛野の又聲を低め豊俊お示ませ。千代九氏我這方  
 寸の敵と。大敵と。鯛おせまぐ欲ま。計畧を誨ん欲あぐと耳披と。耳は示  
 まと半响許逆毛野が計る所那八百八人を始中。豊俊お伴せ。敵へ降  
 参の事の趣其時豊俊が敵遣を密使あ音音音弱四個の婦人を  
 用ふたう。あれ既お他をも召ま。只今奥お在るれば先豊俊と面善見お  
 るさま欲ま前後の用心送るありを。され豊俊お意外お出。折然  
 とくは合ふや。示教兼りひひぬ。今情願を容られ。軍旅お従ふのさ。然

る大役お亮ら。の面目の上おひ死。あのみ身敵の士卒と俱お燬お海お論  
 むとも機お臨と。變お心して必做を事ま。まの美の心易り。我身不肖お  
 ひども。父祖相傳の建領と。兼て一郡一城の王を。一か恩願の士卒るたあ。ま  
 然れども其忠義の志氣あり。且恥を知る者。かの折戦殺して。餘子らるあ  
 べ。その餘の城を。命を免れる。兵毎おひ。往方と。示の召聚へ。今番の  
 役お従ま。と。事お益有と。か。ん。恥。いと陪話ると。現八と。さ。左。右。も  
 あれ在。処。も。あ。る。あ。其。残。黨。と。ま。索。ひ。て。用。お。死。時。且。あ。ら。和。殿。の。敵。地。お。赴。折  
 従。ま。軍。兵。ら。犬。阪。が。必。准。備。あ。ら。んと。の。道。節。然。と。心。更。お。莊。介。お。向。ひ。て  
 ひ。ま。う。既。お。館。の。御。内。意。お。れ。今日。より。千。代。九。氏。の。禁。獄。を。饒。ま。も。け。ら。あ。ら  
 ぬ。ま。う。今。故。も。る。固。固。より。あ。ま。る。衆。人。必。疑。お。べ。と。の。を。莊。介。お。受。ま。其。頭。お  
 犬。阪。脱。落。あ。ら。ん。や。犬。阪。什。麼。と。請。向。へ。毛。野。の。笑。ひ。黙。頭。賢。兄。達。の。小。心。の

我思之所と相同し堀内豊貞住主との義をくまろ給ぬひひ又千代九氏を  
 四圍の返して只守護を固くせむ。道日敵免あべけれごと。由断の為体ゆく  
 日を過ぎる。あの人圍を破り脱れ去り。敵の降参をといふ前後の進退吻合  
 敵と闘矢の日定ふ。那地は造る。又術あり。そを折談去れ先音音音  
 四個の婦人を千代九氏に對面させ。異言の便宜の事。整正の早く圍圍へ返さ  
 べ。とふ堀内親子あろる。貞住みづら。奥あはれ。妙真音音音音音  
 節と推亭てわく。本あはれ。四犬士則。這義姑節婦。小豊俊を對面させ。  
 密談既。果し。貞住と貞住の先四個の婦人們を早く奥へ退けて却葉  
 四郎們を喚取。又豊俊の腰繩被け。牽せ。圍圍へ返しけり。  
 作者少選。兎筆と商。且一服と煙を吹け。漫小獨語。道。本輯前  
 前。密談商量の段甚。皆是後回の觀。

欲まへ。あるふから花も。平話を載。丁寧反覆して。綴做せ。則  
 作者の苦界を。然。是。筆の苦界を。省。善綴。果。事。彼。維。貴。本  
 笠翁の大筆。必病。所。然。水滸傳を除。外。吾。其。書。せ。と。マ  
 く見。本傳。水滸傳。五。十。回。水滸後傳を加。也。尚。十。回。餘。り  
 あり。俗。云。下。の。長。談。義。多。一。蓋。小。道。とい。ども。必。見。る。者。あり。君。子。の。泥  
 ん。と。と。怕。る。鳥。滸。技。の。鳥。滸。の。用。心。あり。看。官。作。者。の。苦。界。を。知。る。辛。は。も  
 苦。は。も。雜。々。五。味。塩。梅。の。意。味。は。是。鳥。滸。人。の。用。心。を。ま。や。  
 第百五十七回 上總の民孝義再恩を宣示  
 安房侯仁心軍令を定む  
 この日大阪毛野犬川莊介犬山道節犬飼現八堀内親子の宿所



千代丸豊俊と密議果し。僑居所かろま。隨便犬塚信乃と犬田小支  
吾小件の事の趣を達せり。告知せり。信乃小文吾六カ二尺八の事の便  
宜を欲せり。這里中も館小妙真の事。情由を詳おせ。上げ。館の御感  
後告ると宜し。此豊俊のゆも介ると。告るを毛野のち。遮莫密議  
も亦君命依るゆも。疾稟上ん。と。莊介と共侶。遠く君所へ。ありて。則  
義成主の貞の計。以豊俊の兼服。通く。あの日。事の便宜を。情地。おせ。上  
あ。義成感心。大々。る。と。豊俊のゆ。あ。上。も。毛野。が。方。寸。小。任。せ。ると。其。挿  
を。賞。せ。る。左。右。さ。る。程。十一月。の。盡。僅。ある。一。時。候。豫。武。藏。小。在。り。ける。里  
見の間謀。見。多。夜。毎。不。快。船。小。乘。り。走。り。つ。か。り。來。て。敵。地。の。動。靜。を。注  
進。去。然。る。扇。谷。定。正。の。五。十。子。の。城。あり。加。勢。の。諸。侯。漸。々。小。着。到。の。空。あり。

其隊々々の大將。山内頭。定父子を首。あ。嶺。我の成氏。石濱の千。垂。自。白  
井の長尾。景春。越。後の。腹。の。大。刀。自。及。西。管。領。扇。谷。山。内。磨。下。の。諸。城。王。大  
石憲重。其子。憲。儀。白。石。重。勝。小。幡。東。良。る。と。故。奉。る。小。違。あ。る。と。あ。の。他。小  
武藏相模の野。武士。毎。ら。招。ぎ。る。小。聚。ひ。來。て。西。管。領。の。隊。小。屬。く。者。壁。言。と  
群。る。蝗。の。如。し。あ。の。内。中。山。内。頭。定。父。子。の。本。月。晦。小。勢。汰。あ。る。ん。十二月。朔。小。鎌  
倉。と。出。陣。して。二。日。二。日。の。比。五。十。子。の。城。小。入。る。べ。と。公。風。鼓。耳。あり。又。相。模。の。三。浦  
義。同。甲。斐。の。武。田。信。昌。の。北。條。長。氏。の。厭。せ。る。或。子。息。或。親。族。を。大。將。や。て  
加。勢。あ。る。と。定。め。ら。る。あ。る。あ。義。同。の。婿。男。三。浦。暴。二。郎。の。獵。勇。小。し。て。背。力。百  
鈎。を。奉。る。小。足。れ。り。然。れ。ど。頃。日。寒。熱。の。恙。あり。病。臥。小。し。て。い。ま。出。來。せ。り。又。武。田  
信。昌。の。親。族。の。中。誰。を。軍。代。小。か。ま。さ。む。あ。の。長。の。い。ま。詳。る。と。單。内。管。領。持  
資。入。道。道。灌。の。年。來。扇。谷。殿。の。乱。政。を。諫。難。く。糟。谷。の。館。小。屏。居。あ。る。これ。

今番の役小従つて子息薪六郎助友を以て其催促小充んと云ふの助友もい  
 まいで來て是等の遅礙不参の諸將を除けても其勢既十萬餘騎陸の  
 下總の行徳園府臺水路の徑洲崎へ渡して安房上總を略す云々云々  
 言今日昨日より細く疑へくもあつたれども義成主の豫より思ひ給ふる  
 其の敢謀く氣色を折る安房上總下總も自家の軍兵漸々小稻村の城へ  
 着到ある者云萬五六千の做りしふあつたも士卒の隊配し水陸の備を立ん  
 と。十一月二十八日當洲崎明神の社頭と本陣とて士卒を送るる聚合  
 ら。摠大将里見安房守兼上總介源義成朝臣の薄金の鎧錦綉の戰  
 袍小精好の奴袴を張せ。大月形の大刀小鼻皮の尻鞆被けると佩做ら  
 ら。小純金の麾を採り。登見小尻と掛け幔幕の下金屏建下本陣の中  
 央あり。次の嫡男里見御曹司義通小櫻絨の鎧戰袍小精好の奴袴。猩

猩緋の草沓穿て。牽祖の名刀小豹皮の尻鞆あるを佩做ら。尚童年の副  
 將るも威風死父祖に似る。登見小尻を掛る。相貌猛々として愛敬ある  
 最美く見えさける。這面大将の左右両側小葦沓布せ。軍師大阪毛野  
 金碗宿祢胤智。水陸の防御使犬塚信乃。金碗宿祢成孝。犬山道節  
 金碗宿祢忠興。犬川莊介。金碗宿祢義任。犬田小文吾。金碗宿祢  
 悌順。犬飼現八。金碗宿祢信道。鎧の絨糸八彩るんを。茲更五色と  
 間色ある。戰袍以下の武具各その色を介て。心同し忠義の壯雄信  
 の。乃村雨の大刀桐一文字の匕首。莊介の雪條の雨刀を帶り。然ハ毛野  
 道節現八小文吾も或の家徳。或の感得の名刀を帶る者。札小尻身  
 曹。晃星の頭鎧。臂縛脛衣。小至る者。あの日を晴と打扮る。武勇胆畧  
 一様るを。具名状去々。皆一列小侍坐ある。其左の側少の當職の家

宰。東六郎辰相。荒川兵庫助清澄兵頭。杉倉武者助直元。堀内雜魚  
太郎。自任上總の館山の城の頭人。小森但一郎。高宗田税力助。逸友上  
總の廳南。標本兩城の頭人。浦安牛助。友勝。登桐山八郎。良干等。武  
具孰も。是光やうあ。存く。あ。星列。あ。他致仕の老黨。杉倉木曾介  
氏元。堀内藏人。貞。小森衛門。篤宗。浦安兵馬。兼勝等。の衰。老。出  
仕。堪。され。も。當家の安危。あ。の時。る。ん。坐。して。食。ひ。温。衣。も。屏。居。も  
身の幸。之。と思。つ。人の道。る。ん。縦。杖。推。乃。り。も。脚。陣。小。從。ひ。ま。う。ん。と。各  
再。勤。の。願。書。を。あ。り。齊。月。一。請。願。を。い。か。も。美。我。成。是。を。許。し。ぬ。其。父。老。之。  
其。子。易。ふ。則。天。の。下。の。通。義。之。老。多。ハ。既。功。成。り。て。身。退。た。る。あ。う。ま。あ。り。あ。  
故。今。直。元。自。任。友。勝。高。宗。逸。友。等。或。ハ。父。小。嗣。地。或。ハ。小。父。代。り。我。小。仕  
へ。皆。精。勤。の。少。え。あ。り。然。る。を。老。多。を。ま。へ。軍。陣。小。馳。入。れ。る。當。家。の。人。を

や。と。他。郷。の。人。小。笑。れ。ん。あ。の。是。決。して。兼。用。之。を。り。あ。り。今。ゆ。ら。老。多。も。願。ひ  
稱。之。を。尉。之。う。ま。あ。べ。あ。の。時。各。安。然。と。屏。居。る。日。を。過。ま。を。慨。し。思。ひ  
る。瀧。田。ハ。参。り。老。館。の。御。陪。堂。小。做。り。尉。之。ま。う。ね。然。し。七。飲。ひ。あ。べ。れ。瀧  
田。之。へ。も。敵。を。待。り。龍。城。小。あ。さ。る。る。枉。之。の。是。不。從。ひ。ね。と。町。寧。論  
さ。せ。隨。即。瀧。田。の。老。侯。小。の。趣。を。告。あ。義。実。主。終。ひ。感。し。て。件。の。四  
個。の。老。每。を。召。ま。と。連。り。り。け。れ。氏。元。自。任。篤。宗。兼。勝。等。ハ。各。あ。の。懇  
命。を。兼。り。俱。小。感。涙。の。找。ひ。を。覚。む。現。賢。君。の。御。計。ハ。孝。中。之。且。慈。悲。之  
從。ひ。ま。う。ら。ゆ。む。や。と。俱。小。瀧。田。小。赴。た。く。權。且。龍。城。あ。り。け。は。あ。る。是。昨  
日。の。ゆ。ら。今。又。一。個。の。老。実。兒。あり。是。則。別。人。る。ま。量。表。小。上。甘。利。墨  
之。助。弘。世。の。為。主。僕。安。身。の。莊。園。を。與。へ。られ。天津。九。二。四。郎。員。明  
也。之。精。悍。あ。く。武。具。一。て。其。莊。園。の。莊。客。二。十。名。許。小。鮫。甲。を。探。せ。率

八代傳九屏卷下四

十五

八代傳九屏卷下四

東荒川兩家老就。請京中。大敵封域。其  
 則東荒川兩家老就。請京中。大敵封域。其  
 故。今日。敵を逆。御隊配を定め。人傳。知  
 萬一の報恩。仕へ。推參。仕り。主。墨之  
 助弘世の兩館の御仁慈。絶。家を嗣。廢。祀。與。弘世の各代  
 那身。弱。病。軍旅。從。なり。故。弘世の各代  
 死。を。洪恩。報。欲。願。神餘。金碗。由縁。犬  
 士の隊。屬。情願。老實也。義成。則。九三。郎。を。召。近  
 論。汝の情願。所以。人各。其主。の。為。汝  
 他。を見。墨之助。仕。那身。終。職分  
 者。然。今。這軍。役。從。我。仕。大士。既。赦。許。を  
 皆。金碗。宿。祿。の。墨之助。代。足。孝。子。其。親。の

為。山。嚴。下。立。忠。臣。其。君。の。與。御。黨。の。戰。を。助。け。汝。の。志。の。賞  
 其。願。の。許。速。退。言。叮。寧。制。め。九。三。郎。の  
 感。涙。の。找。む。を。賞。を。辱。命。の。悖。り。な。罪。免。ま。い。と。も。死  
 重。仁。義。の。命。人。比。惜。り。も。身。を。殺。仁。を。者。あり。死。を。怕。れ  
 義。不。仗。者。是。其。死。重。死。所。已。と。を。弘。世。尙。人。並。の  
 今。の。軍。役。從。ざ。ん。や。從。戰。死。も。義。の。為。悔。る。所。な。し。  
 諄。返。言。己。も。あ。れ。義。成。主。憐。ま。り。ん。是。非。及。ば。ず  
 宜。に。役。を。課。せ。ん。汝。の。權。且。稻。村。の。城。在。り。兵。糧。運。送。の。事。を。助。け。勤  
 能。剛。敵。と。戰。を。破。り。銳。を。辟。か。く。善。兵。糧。を。運。送。して。自。家。の  
 士。卒。の。命。を。係。も。其。忠。其。義。異。る。昔。者。唐。山。漢。林。定。の。戰。ひ。  
 蕭。荷。曹。參。始。終。蜀。在。り。兵。糧。を。運。送。を。漢。の。高。祖。



八傳心算卷下四

八傳心算卷下四

十七

十八

七十五戦の功成り。四百餘年の大業を閉じぬ汝の美を思ひ。と諭し  
 ぬ。九三四郎も。あをい。推辭むとをゆ。恩を拜し。退る。俱し。莊  
 客等共侶。鮎々。稻村の城。小籠りけり。其の時。又那南弥六。弟。上總の  
 普善村の莊客。阿弥七。又。椿村。弟。隊。八。俱。軍役。不。從。あ。在  
 里と。ゆ。え。義成。則。荒川。清澄。命。あ。那。阿弥七。其。兄。南弥六。  
 義死の賞。と。て。既。諸役。を。免。る。者。之。且。阿弥七。二。男。増松。南弥六  
 が。養嗣。を。の。我。召。使。ん。と。思。へ。年。尚。十一。と。い。へ。其。義。小。及  
 かり。又。椿村の。隊。八。其。母。親。の。孝。あ。者。之。あ。と。り。最。小。南弥六。九  
 三四郎。出。來。介。復。五。郎。弟。と。俱。安房。住。る。と。を。欲。り。せ。其。任。使。の。志。  
 孝。の。為。思。ひ。絶。く。請。ふ。上。總。へ。還。り。し。あ。の。軍。役。の。馳。使。り。他。の。孝。心。を  
 奪。ふ。似。し。あ。の。美。を。の。他。等。示。し。上。總。へ。返。す。と。下。知。り。し。と。

清澄。則。阿弥七。と。隊。八。を。召。よ。す。館。の。御。仁。命。箇。様。々。と。件。の。下。知。を  
 以。渡。し。身。の。暇。を。取。ま。れ。阿弥七。等。の。感。謝。小。堪。也。則。答。直。示。ま。や。ら  
 御。誼。有。く。た。ま。ふ。忝。く。兼。り。い。へ。も。初。舎。兄。南弥六。が。重。罪。を。饒。さ。せ。玉  
 い。御。恩。澤。の。大。き。き。ぬ。他。が。身。後。も。大江。殿。及。支。老。の。御。執。成。せ。死。榮。の  
 あ。花。の。い。れ。小。縦。催。促。せ。れ。ども。今。番。の。軍。役。不。漏。ひ。後。々。ま。で。人  
 通。る。恩。も。美。我。の。辨。知。ら。ぬ。烏。澁。の。白。癡。と。せ。い。つ。あ。の。故。御。役。の。立。た。者。不  
 いる。ども。増松。を。携。り。御。陣。小。参。り。ひ。ひ。小。脚。誼。の。重。け。れ。ば。と。阿。容。々。々  
 と。し。し。退。り。必。南弥六。が。靈。痛。く。酷。く。出。り。ひ。願。ふ。い。の。隨。使。せ。ぬ  
 へ。と。意。申。と。盡。す。涙。と。共。み。ゆ。り。其。子。増松。を。喚。出。し。清澄。小。見  
 せ。か。ら。去。ま。く。欲。せ。又。隊。八。も。其。心。標。を。陳。願。ひ。直。示。ま。や。御。誼。を。阿  
 弥。陀。の。慈。悲。本。願。を。異。を。兼。り。い。へ。も。初。謬。老。館。を。犯。し。ま。ら。ず。

欲け。悖逆の罪免れぬを。饒され。舊里。椿村。小還り。母。徳と告ぐ。母親。泣く。其御慈恩。奴。忘れ。身を。終る。勉。年。貢。諸。役。人。一倍。身を。入。仕。切。小。教。今。番。の。軍。役。小。執。び。腹。を。立。ひ。親。の。心。然。る。を。御。免。を。退。ら。母。を。い。ひ。う。く。腹。を。立。ひ。當。役。を。果。さ。ぬ。然。ら。親。の。心。易。か。く。額。衝。伏。す。立。去。る。甲。乙。共。小。誠。心。の。大。く。強。難。清。澄。へ。退。り。義。成。主。阿。弥。七。隊。八。等。陳。情。の。言。の。趣。を。具。上。け。義。成。主。感。心。現。匹。丈。志。を。奪。命。を。預。も。あ。ん。是。も。亦。不。便。り。之。故。今。他。等。三。名。を。火。臺。の。助。役。不。せ。但。増。松。の。童。年。を。洲。崎。木。三。外。孫。荒。磯。

南。弥。六。後。氏。を。磯。崎。と。名。生。口。宜。く。助。役。の。頭。人。と。る。因。阿。弥。七。と。隆。八。俱。増。松。の。後。見。て。當。津。の。烽。火。を。告。る。を。職。分。を。了。り。勿。論。烽。火。本。役。の。士。卒。其。兵。母。上。目。を。傳。へ。新。舊。一。致。と。重。て。下。知。り。清。澄。奉。り。罷。出。て。隨。即。増。松。阿。弥。七。隆。八。御。説。徳。々。と。い。渡。り。且。烽。火。臺。の。士。卒。下。知。を。傳。へ。三。名。を。遣。し。阿。弥。七。増。松。隆。八。等。が。欽。び。い。へ。其。を。漸。々。傳。へ。二。萬。五。六。千。の。諸。軍。兵。誰。り。感。悦。せ。る。仁。君。上。在。ま。れ。畷。圃。の中。も。忠。信。天。の。時。地。の。理。不。如。地。の。理。人。の。和。を。管。領。烏。合。十。萬。の。衆。を。り。襲。ひ。伐。り。欲。す。も。臣。民。一。和。の。我。君。不。豈。勝。と。を。傳。へ。思。ふ。者。多。り。けり。問。話。休。題。の。日。又。義。成。主。兩。家。老。辰。相。清。澄。並。軍。師。犬。飯。毛。野。防。禦。使。犬。塚。信。乃。犬。山。道。節。犬。川。莊。介。犬。田。小。文。吾。犬。飼。現。

八代傳九轉卷之四  
 我嘗外國の制度と思ふ約開戦の得失の摠大将たる  
 者係らざるに及ばず。其君摠大将を擇む時必ず其節刀を  
 授けて賞罰訓を盡さんと漢の高祖が韓信を擧用しける時の如し即是の至  
 り。其故其從軍の偏將者諺く敵の爲に敗らざる時其摠大将の  
 罪として解官せらるる。我皇朝も神代より早く這御制度あり書紀に文を  
 照して知るべし然る國賊征討の摠大将必節刀驛鈴を賜ふ。其賞罰を  
 任し給ふ。蓋其中昔の中心文朝臣の將門を討ける時より近世義貞朝臣の尊  
 氏直義を討ける時まで朝憲正おの如し。多承お世の降りも。昨今お至る  
 舊例廢れて然る制度あり。只其一隊涯の戦を上日とまされ其一队の  
 將者諺く敵に敗れぬ士卒を喪ふとあるも摠大将の罪とせば。其故の  
 軍令明らざる。賞罰正しくなれば血氣わいて且名を好む者動され先駈

軍法を定むるべき。其力戦を上日とて謀略を好む稀に事臨て  
 怖と謀を好む成る者。唐山聖人の用意に豈力戦を勇ありとせんや。  
 今我制度の隣國の軍法と同じくも水戦の我摠大将より又陸  
 戦の義通をのり。摠大将を充れども水陸共に進退の軍師防御使  
 犬士等の指揮に従ふ。犬士等尚失ある。必先我を罪せ。犬士等皆軍  
 功ある士卒も俱に賞禄を取せん我の素より人を殺せしを嗜まざる况や邪  
 兩管領の怨む。余るを定正非理の恨を名とす。後敗我を征せざる我  
 已をゆるぎの備を倣ふ。約莫開戦の間其當の敵あらずの通り  
 數も殺さるるを好とせん。只敵の大将を。生拘るを。大功とす。首を  
 捕るを大功とせば。犯さるる法に処せん。我衆の軍令を早く下知ま  
 くと。則ち野信乃道節莊小文吾現八の各刀各一口を。賜



且命をうく。各士卒の軍法不違ふ罪ある時へ先斬々後小生。親兵  
 衛と大角も俱不違大刀一口を賜ふ。他考を今當陣不在。親兵  
 衛も賜ふを信乃。大角も賜ふを現八小渡。一措ん汝考權且。れを藏めて。  
 異日他考も修へよ。他考の這里不在。我考兩考思。誠心を。恩  
 命微軀。餘りあり。俱不。大馬の力を盡し。仕。以下。每。辰  
 辰相。清澄も及直元貞住。高宗逸友良干友勝。是より。以下。每。辰  
 命を令を兼る者。皆共侶。感佩して。畏り。を。京。折。龍  
 田。東。金。朋。三。小。湊。目。鱗。船。貝。六。郎。考。義。実。主。の。使。を。兼。り。主。僕  
 俱不。武。具。して。既。不。當。陣。不。來。不。け。修。よ。今。命。令。の。最。中。る。れ。其。從。兵。を。退  
 け。權。且。草。希。の。陰。不。居。り。言。の。果。る。を。待。ち。け。る。

第百廿回

龍田の三士生拘を獻る  
 扇谷の同謀假使を導く

登時東峰萌三。小湊目。鱗船貝六郎考。軍令既。不。及。之。則  
 義成主。不。見。參。して。公。考。臣。考。の。老。館。の。御。意。不。考。て。俱。不。參。上。り。ひ。ん。の。  
 故。の。臣。考。總。角。の。時。考。今。不。至。る。ま。で。老。館。不。仕。ま。れ。ば。一。と。も。戰。場。の  
 御。伴。を。仕。ま。ら。ざ。ら。ば。春。夏。の。間。素。藤。と。御。征。伐。の。折。も。人。人。の。功。名。を。柄。を。  
 不。羨。ま。く。思。ひ。ゆ。り。よ。今。番。の。御。封。内。一。郡。一。城。の。逆。徒。不。考。敵。の。鎌。倉。の  
 兩。管。領。並。不。近。國。の。諸。侯。考。雄。兵。十。萬。水。陸。より。攻。伐。ま。欲。ま。と。云。風  
 聲。既。不。喋。々。ら。臣。考。其。職。不。考。れ。も。の。時。尚。共。侶。不。考。陣。不。從。ひ。な。ら。ず  
 考。孰。の。年。を。俟。ん。と。思。不。望。の。已。ま。ら。不。圖。坐。考。宵。勤。の。折。考。の。考。を。情  
 語。不。ひ。ひ。不。人。老。館。不。生。口。ま。り。一。飲。昨。日。猛。可。不。臣。考。を。召。て。御。談。考。若。們。考。

血氣剛に壯校るる我は仕る故をりて。這回の役小従がれはさる本意なく  
思ふらぬ。故若們二名を軍中の使として明日稻村へ遣え聞戦の間俱  
本陣に在りて大士を敵と逆する武勇の掙を見習ひ必後学ふる也。  
若們權且あふ在りても外近臣るはあふ且致仕の老當黨が今日四個まで  
來りければ我を慰る倍堂よりその美を館に稟せしむ。從役の暇より八臣等  
欽ひのべらふもいづ。御恩を特一言兼まらるる退りて昨宵共侶の猛可も從軍  
準備し雜兵僅に十五名を從之。今朝の早天に瀧田より大城を逆出せ連  
てふいそ路あり。料らば一個の隠見を搦捕りしひく。その美は姑且時を移して  
方僅に參上仕りぬと言同様に言え上げ義成王含笑。現若們の情願  
武士たる者の真面目を其心樹さるらん。開を猜しぬる老館の御慈  
愛のこゝろ人を使ひせぬ。賢慮定ぬる易くぬ。好造化ありとありければ若們

今も我陣は居る事あらん。度毎に瀧田告なる小使より。今日より俱  
在陣せよ。却若們が來りぬ路を搦捕りたると隠見の原是甚麼る者  
と。と問を萌三答ていふ。然し隱見の原は空を過り折前路。一個の隠  
子也。其打拾は流流の棧の筒袖を鶏衣の腰蓑を。地方の捕人の  
く見ぬれども人との音聲の紛ふもあつりける。武藏訛でいへ。臣等是を誅  
す。隠見等と喚れ。他大く駭怕を走らし。百歩許逃去りける。透き  
追蒐けり。掖捉へ有ををりぬ。結ねり。敵は素生と來歴と去  
問ける。隠見見苦痛堪きりける。招きしより知りぬ。其奴は。大石見守。憲重  
が同謀兒也。憲重が家臣。仁田山。晋五。弟。晋六。武佐が從母弟也。朝時  
技太郎と喚做さ者。といへり。駭く那身の内を撈り檢す。果を懷ふる者。  
扇谷。定正。主の機文。數通あり。開を。その御國の民。毎に。薦め。發せ。て。内



三士路小 技太郎 捕

三士路小 技太郎 捕

疵<sup>ち</sup>を起<sup>おこ</sup>す。彼<sup>か</sup>の<sup>の</sup>伎<sup>ぎ</sup>倆<sup>りやう</sup>分明<sup>めいめい</sup>の<sup>の</sup>脚<sup>きゃく</sup>陣<sup>じん</sup>牽<sup>ひ</sup>せらる。と報<sup>ほう</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>る。六<sup>ろく</sup>郎<sup>らう</sup>と  
身<sup>み</sup>を起<sup>おこ</sup>して外<sup>がい</sup>面<sup>めん</sup>に立<sup>た</sup>ち出<sup>で</sup>る。伴<sup>ばん</sup>の雜<sup>ざ</sup>兵<sup>へい</sup>を索<sup>さく</sup>して會<sup>あ</sup>はせしむ。伴<sup>ばん</sup>の朝<sup>あ</sup>時<sup>じ</sup>枝<sup>えだ</sup>太<sup>たい</sup>郎<sup>らう</sup>牽<sup>ひ</sup>  
立<sup>た</sup>ち出<sup>で</sup>る。義<sup>ぎ</sup>成<sup>じやう</sup>主<sup>しゆ</sup>の見<sup>み</sup>せしむ。目<sup>め</sup>の檄<sup>げき</sup>文<sup>ぶん</sup>數<sup>すう</sup>通<sup>つう</sup>を會<sup>あ</sup>はせしむ。則<sup>すなは</sup>ち前<sup>まへ</sup>の  
聖<sup>せい</sup>廟<sup>びやう</sup>を拜<sup>まつ</sup>する。見<sup>み</sup>る。諸<sup>しよ</sup>士<sup>し</sup>の皆<sup>みな</sup>愕<sup>おどろ</sup>然<sup>ぜん</sup>と一<sup>いつ</sup>に驚<sup>おどろ</sup>かす。又<sup>また</sup>一<sup>いつ</sup>に亮<sup>りやう</sup>  
介<sup>け</sup>と云<sup>い</sup>ふ。愉快<sup>ゆがい</sup>と名<sup>な</sup>を思<sup>おも</sup>ひける。當<sup>あた</sup>り下<sup>か</sup>義<sup>ぎ</sup>成<sup>じやう</sup>主<sup>しゆ</sup>の這<sup>こ</sup>龍<sup>りゆう</sup>田<sup>でん</sup>の三<sup>さん</sup>士<sup>し</sup>の伴<sup>ばん</sup>を答<sup>こた</sup>へて  
隨即<sup>すうい</sup>杉<sup>すぎ</sup>倉<sup>くら</sup>直<sup>ちく</sup>元<sup>げん</sup>其<sup>その</sup>檄<sup>げき</sup>文<sup>ぶん</sup>を讀<sup>よ</sup>む。讀<sup>よ</sup>む。徐<sup>じよ</sup>の所<sup>ところ</sup>其<sup>その</sup>書<sup>しよ</sup>道<sup>だう</sup>之<sup>の</sup>  
諸<sup>しよ</sup>侯<sup>こう</sup>上<sup>じやう</sup>尊<sup>そん</sup>帝<sup>てい</sup>王<sup>わう</sup>時<sup>じ</sup>朝<sup>ちやう</sup>柳<sup>りゆう</sup>營<sup>えい</sup>下<sup>か</sup>求<sup>もと</sup>賢<sup>けん</sup>才<sup>さい</sup>善<sup>ぜん</sup>愛<sup>あい</sup>庶<sup>しよ</sup>民<sup>みん</sup>稟<sup>れい</sup>制<sup>せい</sup>於<sup>お</sup>  
連<sup>れん</sup>帥<sup>すい</sup>而<sup>を</sup>結<sup>むす</sup>交<sup>まじ</sup>于<sup>を</sup>隣<sup>りん</sup>國<sup>こく</sup>則<sup>すなは</sup>ち以<sup>もつ</sup>為<sup>な</sup>道<sup>だう</sup>君<sup>きん</sup>子<sup>し</sup>也<sup>なり</sup>言<sup>い</sup>有<sup>あ</sup>源<sup>げん</sup>  
成<sup>じやう</sup>者<sup>しや</sup>其<sup>その</sup>父<sup>ふ</sup>義<sup>ぎ</sup>實<sup>じつ</sup>嘉<sup>か</sup>吉<sup>きち</sup>叛<sup>はん</sup>逆<sup>ぎやく</sup>餘<sup>あま</sup>子<sup>し</sup>也<sup>なり</sup>當<sup>あた</sup>り時<sup>じ</sup>免<sup>めん</sup>命<sup>めい</sup>而<sup>を</sup>流<sup>りゆう</sup>寓<sup>う</sup>安<sup>あん</sup>  
房<sup>ぼう</sup>又<sup>また</sup>乘<sup>のり</sup>風<sup>ふう</sup>雲<sup>うん</sup>之<sup>の</sup>會<sup>かい</sup>伐<sup>はく</sup>神<sup>しん</sup>餘<sup>あま</sup>逆<sup>ぎやく</sup>臣<sup>しん</sup>定<sup>ぢやう</sup>包<sup>ほう</sup>報<sup>ほう</sup>之<sup>の</sup>橫<sup>ぎやう</sup>領<sup>りやう</sup>其<sup>その</sup>郡<sup>ぐん</sup>縣<sup>けん</sup>  
又<sup>また</sup>隨<sup>すい</sup>欺<sup>き</sup>殺<sup>ころ</sup>滿<sup>まん</sup>呂<sup>りよ</sup>安<sup>あん</sup>西<sup>せい</sup>遂<sup>すい</sup>併<sup>へい</sup>得<sup>とく</sup>四<sup>し</sup>郡<sup>ぐん</sup>矣<sup>なり</sup>梟<sup>せう</sup>雄<sup>ゆう</sup>詐<sup>せ</sup>力<sup>りき</sup>不<sup>な</sup>一<sup>いつ</sup>而<sup>を</sup>

足<sup>あ</sup>其<sup>その</sup>子<sup>し</sup>義<sup>ぎ</sup>成<sup>じやう</sup>奸<sup>けん</sup>且<sup>かつ</sup>有<sup>あ</sup>膽<sup>たん</sup>畧<sup>りやく</sup>自<sup>みづか</sup>養<sup>やう</sup>其<sup>その</sup>箕<sup>き</sup>裘<sup>しゆ</sup>而<sup>を</sup>來<sup>き</sup>畧<sup>りやく</sup>上<sup>じやう</sup>總<sup>そう</sup>掠<sup>りやく</sup>  
下<sup>か</sup>總<sup>そう</sup>切<sup>せつ</sup>受<sup>じゆ</sup>領<sup>りやう</sup>房<sup>ぼう</sup>總<sup>そう</sup>守<sup>しゆ</sup>護<sup>ご</sup>以<sup>もつ</sup>自<sup>みづか</sup>稱<sup>しやう</sup>東<sup>とう</sup>南<sup>なん</sup>大<sup>だい</sup>竹<sup>ちく</sup>潘<sup>ぱん</sup>然<sup>ぜん</sup>而<sup>を</sup>不<sup>な</sup>受<sup>じゆ</sup>制<sup>せい</sup>  
於<sup>お</sup>連<sup>れん</sup>帥<sup>すい</sup>不<sup>な</sup>結<sup>むす</sup>交<sup>まじ</sup>于<sup>を</sup>隣<sup>りん</sup>國<sup>こく</sup>加<sup>か</sup>之<sup>の</sup>役<sup>やく</sup>使<sup>し</sup>結<sup>むす</sup>城<sup>じやう</sup>煉<sup>れん</sup>馬<sup>ま</sup>殘<sup>ざん</sup>黨<sup>たう</sup>大<sup>だい</sup>山<sup>さん</sup>  
道<sup>だう</sup>節<sup>せつ</sup>大<sup>だい</sup>塚<sup>さか</sup>信<sup>しん</sup>乃<sup>すなは</sup>ち大<sup>だい</sup>阪<sup>はん</sup>毛<sup>もう</sup>野<sup>の</sup>等<sup>とう</sup>皆<sup>みな</sup>以<sup>もつ</sup>大<sup>だい</sup>爲<sup>な</sup>氏<sup>し</sup>八<sup>はち</sup>箇<sup>こ</sup>強<sup>きやう</sup>人<sup>にん</sup>而<sup>を</sup>  
使<sup>し</sup>此<sup>こゝ</sup>在<sup>に</sup>近<sup>きん</sup>國<sup>こく</sup>屢<sup>る</sup>放<sup>はう</sup>火<sup>か</sup>陷<sup>けん</sup>城<sup>じやう</sup>暴<sup>ぼう</sup>行<sup>かう</sup>竊<sup>せつ</sup>盜<sup>たう</sup>無<sup>な</sup>不<sup>な</sup>爲<sup>な</sup>又<sup>また</sup>於<sup>お</sup>其<sup>その</sup>中<sup>ちゆう</sup>  
有<sup>あ</sup>稱<sup>しやう</sup>大<sup>だい</sup>江<sup>かう</sup>某<sup>ま</sup>惡<sup>あく</sup>少<sup>しやう</sup>年<sup>ねん</sup>嘗<sup>じやう</sup>幻<sup>げん</sup>奪<sup>だつ</sup>隣<sup>りん</sup>國<sup>こく</sup>逆<sup>ぎやく</sup>臣<sup>しん</sup>河<sup>かう</sup>鯉<sup>り</sup>孝<sup>かう</sup>嗣<sup>し</sup>於<sup>お</sup>法<sup>ぽう</sup>  
場<sup>ばう</sup>以<sup>もつ</sup>陰<sup>いん</sup>藏<sup>ざう</sup>焉<sup>なり</sup>出<sup>で</sup>沒<sup>ぼつ</sup>無<sup>な</sup>量<sup>りやう</sup>何<sup>いかん</sup>皇<sup>かう</sup>毛<sup>もう</sup>舉<sup>きよ</sup>今<sup>いま</sup>也<sup>なり</sup>鎌<sup>けん</sup>倉<sup>そう</sup>西<sup>せい</sup>管<sup>くわん</sup>領<sup>りやう</sup>家<sup>か</sup>  
連<sup>れん</sup>諸<sup>しよ</sup>侯<sup>こう</sup>合<sup>あ</sup>兵<sup>へい</sup>將<sup>じやう</sup>行<sup>かう</sup>天<sup>てん</sup>誅<sup>しゆ</sup>大<sup>だい</sup>兵<sup>へい</sup>臨<sup>りん</sup>城<sup>じやう</sup>日<sup>にち</sup>玉<sup>ぎよく</sup>石<sup>せき</sup>其<sup>その</sup>與<sup>よ</sup>碎<sup>さい</sup>若<sup>じやく</sup>等<sup>とう</sup>  
房<sup>ぼう</sup>總<sup>そう</sup>洲<sup>しゆ</sup>民<sup>みん</sup>俱<sup>く</sup>欲<sup>よく</sup>去<sup>き</sup>桀<sup>けつ</sup>紂<sup>しゆう</sup>就<sup>きゆ</sup>湯<sup>たう</sup>武<sup>ぶ</sup>武<sup>ぶ</sup>謀<sup>まう</sup>而<sup>を</sup>刺<sup>さ</sup>義<sup>ぎ</sup>成<sup>じやう</sup>或<sup>ある</sup>捕<sup>と</sup>犬<sup>けん</sup>  
氏<sup>し</sup>首<sup>しゆ</sup>來<sup>き</sup>獻<sup>けん</sup>諸<sup>しよ</sup>軍<sup>ぐん</sup>門<sup>もん</sup>則<sup>すなは</sup>ち其<sup>その</sup>賞<sup>しやう</sup>豈<sup>ぢや</sup>唯<sup>たゞ</sup>千<sup>せん</sup>金<sup>きん</sup>富<sup>ふ</sup>貴<sup>き</sup>利<sup>り</sup>達<sup>たつ</sup>必<sup>かなら</sup>在<sup>に</sup>是<sup>こゝ</sup>  
舉<sup>きよ</sup>是以<sup>もつ</sup>檄<sup>げき</sup>之<sup>の</sup>漢<sup>かん</sup>文<sup>ぶん</sup>和<sup>わ</sup>解<sup>げ</sup>之<sup>の</sup>國<sup>こく</sup>字<sup>じ</sup>之<sup>の</sup>寫<sup>しやう</sup>也<sup>なり</sup>數<sup>すう</sup>通<sup>つう</sup>也<sup>なり</sup>土<sup>ど</sup>民<sup>みん</sup>の

文字を免者不讀見その所為多べ。義成是をちめて件の生拘枝太郎を  
 そが終面前不牽居させむ。みづろ解論いふやう今戦國割居の世方り  
 人も我も各間諜見をり。近國の虚実を撈り。封疆を守る用意とを  
 然に間諜見んと。我甚しく憎むあはれ。今這檄文を見る火をて水  
 といふが如く其誣言と甚し。初我父の安房四郡を得ぬ。逆賊定包を  
 伐滅し。義兵の致す所を満呂安西が自滅を取り。奸詐不義の天誅  
 の。然に信時の景連の賣られて竟身を殺し。景連の亦八房の犬吠  
 まく命を預ぬ誰う是三亡滅の故を。我父を罪とせん。困民通て罪  
 とせざるを定正一箇の臆断を。是を罪と思ひ。何ぞその折征せざる。  
 數十年麻止ぬ。今ふく。是をいへる遅く。且我が上總下總を伐徒へ  
 ち。其城王を者暴暴辰を。民の棄られを取れる。敢詐カと盡す。苦

戦て人の城邑を奪ひよる。皇居及將軍安入調頁の敬礼を  
 懈らざる。隣國の諸侯と親く交ることを。又隣國といふ。一か  
 兵を構ふる。天子將軍是をりて我を罪ありと。官領軍我を  
 罪せし。私議ゆ。公論あり。又犬山道節犬塚信乃が。定正  
 主と敷き走ら。一旦五十子の城を援け。他者がい。我の仕る以前の  
 り。其先君と父祖の為。聊怨を復あり。然るに我が他者不課て火を  
 放ち城を拔け。抑亦誣言を。八犬氏の母ハ其未生以前より。我  
 家不宿因あり。我感悟る。他者グ在処を。年未を  
 麻止る。春より夏に至りて。稍縁熟して。皆召集て。竟不家臣。今  
 大士の母ハ生來感得。芳あり。仁義礼智孝悌忠信の八行を各丹田の  
 藏ゆる俊傑を。其行狀一個とて。仁義八行の稱さる。去の我を

ノアハナリ車ヲ考ヘ

ノ文ハコトノ

知れる人もあらず。誣々強人といはる。宣沙汰の涯之。况孝嗣と云ふ。我  
い。是を見ぞ。他へ靈狐の帮助ありて。罪を免れ死刑を免れ。人の噂  
望の願。宣正主早く。怨怒の妄想を祛け。善小與。其徳をりて。皆  
自他の民相悦び。永く唇齒の好を結ん。憐を解。猶悟る。其怨を  
飾り。其非と理と。敢勝負を决せん。防衛の備あり。前執  
る身へ。辭さる。由る。爾還る。憲重。是者。其美を。報。宣正主。或  
諫める。定正。遂に感。容て。思ひ。かへ。も。あ。る。べ。多。ふ。両家。の。幸。い。る。ん。し。付  
麻。公。の。美。を。と。見。や。と。い。れ。て。技。太。郎。頭。を。拾。ひ。て。御。説。兼。り。ひ。び。仰。の。條  
條。胆。小。銘。と。て。憲。重。小。報。ひ。の。む。い。き。免。さ。を。あ。り。と。願。へ。義。成。主。領。り。て。然  
も。あ。り。ん。卒。然。と。崩。二。目。も。其。技。太。郎。頭。不。裁。る。素。解。鏡。て。浅。船。の  
乗。せ。て。返。一。遣。り。な。の。地。不。留。む。へ。う。と。仁。慈。の。下。知。は。崩。三。時。の。心。を。あ

技太郎が赤を解んと。登時道即休。ゆ。ゆ。と。林。に。出。て。義。成  
主を諫る。世々稀命を。御慈命を。否。ま。く。不。敬。の。罪。を。免。さ。ご。う。い  
も。盗。糧。を。齎。し。讐。刃。を。借。ま。り。聖。賢。の。せ。る。所。あり。宋。襄。公。に。あ  
過。さ。る。非。如。寬。仁。大。度。と。い。ふ。這。奴。と。説。し。も。定。正。馬。將。之。又。憲。重  
慳。臣。之。俱。道。理。を。暗。け。れ。這。仁。命。を。受。容。れ。て。其。愆。を。改。る。由。あ。る。も。い。の  
お。夫。人。の。臣。と。て。君。の。惡。と。長。ま。者。其。罪。猶。輕。し。君。の。惡。不。逢。ふ。者。其。罪  
是。重。と。い。ふ。經。文。と。り。て。思。量。ま。が。那。憲。重。親。子。の。如。し。君。の。惡。不。逢。ふ。者  
も。多。く。理。を。知。り。主。を。諫。め。ひ。り。や。且。檄。文。を。散。さ。敵。の。間。諜。兒。は。這。奴  
一。個。さ。る。も。然。に。我。安。房。の。圍。民。を。理。義。不。明。ろ。稀。る。べ。け。れ。檄。の。誣。言。不  
惑。さ。れ。て。叛。く。心。の。馮。も。せ。ば。則。是。自。家。の。害。也。早。く。這。奴。が。首。を。斬。せ。て。衆。小。示  
去。ぬ。ま。の。御。後。悔。り。や。い。ん。と。憚。り。所。も。多。論。さ。り。と。毛。野。信。乃。莊。介。小。文。吾。現。八

八代傳心屏巻上四

共

ら。の。黙。然。と。し。て。坐。る。の。も。又。辰。相。清。澄。の。萌。三。目。貝。六。郎。亦。至。る。ま。で。大。山。が。議  
論。當。れ。り。と。ま。り。て。思。ひ。ぬ。る。の。り。の。り。君。の。意。衷。と。汲。難。く。比。皆。共。侶。の。黙。然。と。す。  
そ。の。中。の。義。成。主。の。件。の。諫。言。を。听。果。く。敢。怒。る。氣。色。を。徐。に。論。一。の。道。  
節。汝。が。諫。言。の。誰。も。恣。思。べ。い。我。も。亦。婦。人。の。仁。を。好。と。ま。る。あ。わ。ね。も。今。思。ふ。よ  
ま。い。あ。ら。ま。い。這。安。房。上。總。の。民。每。の。老。館。及。我。年。來。の。所。を。德。と。せ。ら。這  
檄。幾。百。枚。を。見。る。と。も。敢。叛。く。者。を。あ。べ。い。又。安。房。上。總。の。民。每。の。我。の。い。ひ  
不。德。と。し。て。年。來。怨。る。の。の。わ。六。這。檄。を。見。む。と。い。ふ。も。必。や。我。を。棄。て。敵。小。從。の  
者。も。多。く。む。其。叛。く。と。叛。ざる。の。我。德。と。不。德。不。在。り。の。檄。文。を。隱。え。や。且。汝。の。言  
愆。て。り。人。の。為。の。誣。られ。其。虐。を。憎。む。の。故。に。我。も。亦。其。虐。の。倣。る。不。狂。人。も。共。亦  
走。る。不。似。し。他。の。他。が。虐。を。以。て。我。の。我。仁。を。以。ま。這。奴。を。殺。して。何。せ。ん。汝。の。忠  
誠。の。我。の。知。る。の。知。り。這。里。用。ひ。た。る。の。の。意。味。を。以。の。故。に。の。後。と。も。

思。ふ。の。の。必。懲。り。を。諫。め。と。慰。め。の。の。道。節。根。然。と。畏。敬。服。し。御。教  
諭。の。有。り。を。畏。る。も。美。り。の。い。ひ。寔。は。臣。等。が。淺。慮。る。僅。か。其。一。を。知。る。の。も  
及。ぶ。と。依。然。居。る。富。嶽。の。巔。と。見。る。が。如。し。就。て。猶。あ。る。を。恐。れ。る。の。も  
が。京。上。人。方。僅。仰。出。され。軍。令。の。敵。と。刃。を。合。さ。る。折。生。拘。を。り。大。功。と。も  
首。を。捕。る。を。好。と。せ。む。と。一。條。の。思。ひ。ぬ。る。の。益。兵。と。凶。器。の。敵。と。刃。を。交  
る。時。毫。も。用。捨。ま。さ。る。然。る。を。相。憐。し。く。戰。ふ。者。の。い。や。开。を。憐。め。と。教。え。る。  
言。憚。り。の。い。ひ。も。矛。と。盾。と。を。擲。り。似。たり。昔。楚。國。の。矛。と。盾。と。を。賣。者。の。あ  
け。其。矛。を。買。入。と。い。ふ。者。の。時。の。我。這。矛。と。刺。せ。鐵。の。盾。と。も。必。く。檄。を  
と。い。け。り。又。其。盾。を。買。入。と。い。ふ。者。の。時。の。我。這。盾。と。防。け。矛。も。前。も。徹。ら  
む。の。の。後。の。人。の。是。を。詰。り。て。あ。ら。ま。い。汝。が。盾。を。刺。さ。誰。何。と  
傾。け。し。言。空。射。り。て。賣。ら。る。の。の。の。壁。言。喻。の。韓。非。子。の。事。と。瑯。耶。代。醉

篇中載て以狄約莫言の品語ひゆきを牙盾とての義ハ誰も知りたる  
 参る御軍令も庶一とせん欲そを左も右もわれ今番守隊の惣大将扇  
 谷定正主の臣等が先君先父の冤家也今館の讎言敵也とて戦の  
 時不蒞く倘前向立つとあらば射て殺まほむと必死の義を饒しめんと  
 向ハ義成主領は汝が疑ひ开も亦故也我嘗上古の聖王仁君の軍と  
 憶ふ敢其敵と屠る人を殺せば死に為らざるも只逆を討ち暴を懲り  
 り其民を救ふの義然今我敵と待つ防ぎと上目とて殺せ宗とせむ  
 あをりて汝等七名を防禦使あらりしりく防せ為りて戦ひ以功と  
 されども首を捕るを好とせむ是仁人の心るをや余る防禦と云ふ又差  
 大勇の大敵を防禦必し謀を以て故の戦むとて敵と退る者  
 其次は防ぎ或は殺し或は走らざる者又その次の防ぎも竟る防禦

必し折を勢ひ以窮りて戦死して名を貽その誰う敵を懼くなく戦ふ者  
 あらんや機不臨と変不心とて進退出沒疆りる乱戦奔馬の中や豈  
 只敵と生物んとて戦ふ者あるべしや其敵と憐むらんや戦ざる前不在り  
 又戦克く後もあるべし昔唐山秦の蒙恬ハ趙の降卒四十萬を宥ふ  
 報ひし後竟ハ趙高ハ謀せられ刃伏しゆり箴とるを死の然我軍  
 今敵の首を捕る者を罪せんとあるや言テ盾とわれもせむ我ハ他を伐  
 る欲せば他も我を伐るも已とを必死と死の斫もあつべし刺もあつべし殺  
 るも功とせざりし則仁の心人の義を思ひ違へと解きて道節沈吟ん  
 莞尔と笑ひ頭を拾け御教諭愈佳境入りり滋感服仕る由今御  
 諛ハ只臣等が疑ひを解せぬを備の御諭微りせ疑思ふ者まるは下  
 相あるゆて心と志をわれ義成主ハ辰相と清澄をアタへ汝今言成安



道郎忠誠多。其方正直言。我々所の人。今その言を取。
 いとも後必裨益。わん士喜ぶ。と稱え。辰相清澄。共侶。拜賀。君
 君。臣も亦臣。當家永昌。疑ひ。其款。直示。毛野。信乃。
 現。八小。文。吾。自。餘。の。毎。至。る。孰。感。服。せ。る。元。俱。千。歳。を。唱。へ。
 而。東。峰。萌。之。若。二。日。と。日。則。朝。時。技。太。郎。不。被。る。索。を。解。免。せ。
 太。郎。恩。を。拜。受。外。面。退。治。等。と。雜。兵。等。守。り。洲。崎。の。港。口。
 隨。即。快。船。お。ち。乗。せ。武。藏。の。柴。濱。を。送。り。け。り。介。程。朝。時。技。太。郎。
 宵。悄。地。五。十。子。の。城。か。り。來。り。主。の。大。石。憲。重。小。安。房。を。り。事。の。願。未
 義。成。主。の。い。れ。那。仁。心。の。大。く。ぬ。を。毫。も。隱。さ。告。ぐ。憲。重。六。つ。も。呆
 る。と。半。响。許。さ。る。思。ひ。復。さ。美。言。の。信。る。甘。言。の。反。て。毒。あり。并。に。只
 敵。の。心。を。鏢。と。是。義。成。が。詭。の。計。を。んと。敢。又。機。念。せ。且。已。遣。

たる。間。謀。見。の。一旦。敵。不。搦。捕。ら。れ。て。饒。さ。れ。て。か。り。主。君。小。報。ん。の。
 只。技。太。郎。が。口。を。鉗。め。り。自。家。の。士。卒。小。も。の。を。知。せ。軍。敗。れ。後。の。日。小。定。正
 是。を。夢。知。り。且。恥。且。悔。思。の。竟。其。甲。斐。さ。り。け。り。あ。ち。是。後。の。話。不。題
 義。成。主。の。軍。令。既。成。り。日。又。水。陸。の。隊。配。と。定。め。る。水。戦。の。摠。大。將。は。義
 成。主。自。任。て。洲。崎。の。濱。邊。の。本。陣。に。在。り。軍。師。大。阪。毛。野。防。御。使。大。山。道。郎
 犬。村。大。角。を。首。と。小。木。林。但。一。郎。高。宗。浦。安。牛。助。友。勝。等。相。從。ふ。這。隊。の。士。卒
 一。萬。六。千。之。内。中。犬。村。大。角。今。敵。地。に。在。り。あ。れ。ど。も。水。戦。に。與。る。不。可。
 友。小。文。名。を。下。總。の。行。德。へ。防。御。使。大。川。壯。介。を。大。將。と。て。大。田。小。文
 吾。と。副。將。と。登。桐。山。八。郎。等。足。小。從。ふ。隊。の。士。卒。八。千。五。百。之。又。下。總。の。園。府
 臺。へ。里。見。御。曹。司。義。通。を。摠。大。將。と。東。六。郎。辰。相。後。見。杉。倉。武。者。助
 直。元。等。相。從。ふ。龜。城。と。定。め。る。其。城。外。小。敵。と。待。つ。大。將。防。御。使。犬

つるまのふせうぬまはれち。あつちりたのすけふもら。これあふ。うちとあそりせんて  
 塚信乃副将大飼現八並田税力助逸友者。是れ従ふ内外の士卒九千五  
 百之の餘印東小六郎。荒川太郎一郎。木曾三助。東峰。崩三。小湊。目。鱒船  
 貝六郎。遊軍者。俱小洲崎の陣在り。又稻村の城。義成の二男。次丸。を大  
 将者。荒川兵庫助清澄。後見者。他老黨若黨相従ふ。籠城の士卒一千  
 五百人の時。満呂復五郎。重時。ハ刀瘡者。愈へ。則小洲崎の陣。ハ参りて  
 孰の隊とも。屬られん。を請ひ。稟者。義成主。馳て復五郎を召せ。汝  
 犬川莊介。犬田小文吾。小従者。行徳の敵。ハ向ふべ。と定め。隊配既。ハ果々。  
 其の宵。義成。義通。父子。洲崎。明神。ハ参。龍。ハ祈請。の筒。牘。一通。ハ白羽。の征  
 箭。二條。を添。神殿。ハ藏。め。なる。神主。巫祝。等。管絃。を奏。舞樂。の時。方  
 了。社前。多。松。の重枝。ハ。白鳩。二隻。忽然。と。蜚。出。大洋。の方。戌。を投。て。翔。て  
 見え。多。ける。不思。議。れ。鳩。ハ。飛。ハ。早。物。を。和。名。と。と。東。雅。中。ハ

い。の。り。と。と。の。少。男。各。ハ。あ。れ。も。あ。の。日。ハ。十。月。二。十。八。日。ハ。寅。の。刻。を。ま。は。れ。月。ハ  
 烏。夜。中。這。鳥。瑞。あ。必。神。所。為。多。士。卒。各。勇。ハ。憑。思。ハ。之。徳  
 而。這。詰。朝。國。府。臺。と。徳。敵。を。待。諸。將。士。卒。ハ。義。通。御。曹。司。を。首。て。犬  
 塚。信。乃。大。飼。現。八。東。六。郎。杉。倉。武。者。助。田。税。力。助。等。前。後。二。軍。の。兵。を。領。て。  
 早。天。小。稻。村。を。進。發。を。又。一。軍。ハ。犬。川。莊。介。犬。田。小。文。吾。登。桐。山。八。満。呂。復。五。郎。等。  
 其。隊。ハ。從。士。卒。を。領。て。同。時。ハ。又。稻。村。ハ。行。徳。を。投。て。出。陣。去。其。光。景。ハ。甚。麼  
 ぞ。但。見。る。旗。旗。幡。幟。ハ。曉。風。ハ。翻。翻。り。鎗。眉。尖。刀。ハ。朝。日。ハ。赫。亦。火。ハ。人。ハ。鎧。の  
 袖。を。連。て。兜。の。星。ハ。明。る。天。を。ち。仰。馬。ハ。真。紅。の。總。を。無。く。鑼。の。音。と。共。ハ。嘶  
 く。征。客。捲。天。の。勢。ハ。妻。子。留。別。の。涙。と。願。其。去。向。ハ。山。中。ハ。水。仙。ハ。日。南。ハ  
 花。と。見。野。梅。ハ。冬。至。ハ。馥。郁。ハ。兩。相。の。柱。ハ。求。食。ハ。飯。會。者。水。の。上。ハ。絨。ハ。落。葉  
 あり。安。房。上。總。ハ。春。寒。く。冬。暖。地。方。ハ。折。々。是。小。寒。の。節。ハ。人。馬。の。吻

息白く見えり。早朝の耳研らるる似き。頭盛の鏡も冷れり。弓矢維張  
 鏡砲各肩を其武其勇決然とる。只這兩軍のさるる洲崎の濱の本  
 陣の形勢も亦思ふべ。波濤在処より二百歩許退きて小阜の地方の夜屋  
 あり。中央の義成主の屯する処也。十二間八間あり。左右の毛野道節等守居  
 各數百人を容れり。内外の一萬五六千の士卒幾も張耳と幕の  
 陰に在り。浦風靡靡。白旗と磯馴松の被れも散る。水際維だ。戦艦を舳  
 尖を並べ。數るの違あま。馬の熟て水と怕れ。人の勇も敵を遅し。を刃を  
 鞆より頭れり。囊と用ひを隠る。火銃の燃線。潮風中も濕ら。旗々火  
 箭の準備。櫃より火をこま。してあり。聖々。戦米の積れてせり。棟と菅は穩  
 小駝馬の敷系れて運送の便り。を暇ある。雑兵を鏃と磨の沙の坐る。舵工を  
 帆を繕ふ。鼻々と响く。吊腿の音。鼓々々々。鳴る。二六の大鼓抱圍。鼓の林の鼓言の士

卒の打腕を撃。雑居飲酒の林の大将といふ。鏡も書画の貝も吹く。時成  
 報け。夜の篝を焼く。夜行と叫ぶ。往く者の名告り。還る者の名も。只是齊  
 齊整々々。細い説も盡さる。も。何が一を。既して十一月の果て十  
 二月五日の日の日。大大角が。裏小武藏の此米濱へ。おる。おる。兩個の伴當。情  
 地の快船に乗走る。洲崎の陣から。隨即毛野の對面を請ふ。大角が  
 齋圓一。密書と衣領の裏より。令出り。渡り。且来意を告ぐ。毛野ら  
 道節を招か。俱に其書を開いて。然る。大と。先其使の。水路障り  
 る。速る。を。留置。躬て本陣に赴き。則義成主の伴の密書を見  
 せ。計謀果て又の。大師と大角が。那地を計り。首尾至妙。小  
 へ。今宵堀内。貞任。選兵百五十名を従せ。早く那地へ遣。八八八人の  
 密策。其一隊も足る。べ。敵の衆船一緒に在る。燬を免る。も

へ。あどり。音音も四個の婦女子も。今宵遣いひん。の美の亦箇様  
 箇様と言詳お耳に宣せ。義成屋敷點頭。开も亦汝も任してん。負住  
 其他が歸府せ。日お件の密議を示し。あるべし。其計を  
 いそぎの毛野の則退り。先堀内雜魚太郎負住と浦安牛助友  
 勝。事の秘密を説示し。其後東峰。萌三。小湊。日。鱒船。貝六郎。等。情  
 地招れ。談する。和殿等の當職。原是老館の御使。瀧田へ戦の  
 注進を。宗と。死る者れども。然るも。中。關戰。小。遇。けれ。本。意。を。ん。  
 我館の請。和殿。十二分の大役を課。東峰。鱒船の兩  
 生。今宵我投。方へ隊兵を領。其投。方。又。其計。以  
 箇様々々。又。小湊。生。異。日。遣。地方。その計。以。箇様々々。任。の  
 美。言。詳。説。示。せ。二。個。の。壯。伎。怡。悦。堪。合。笑。共。侶。其。計。策

中。從。ひ。當。下。毛。野。の。村。節。を。合。出。是。を。萌。三。と。貝。六。不。慮。與。其。隊。小  
 從。兵。卒。を。授。け。隊。配。早。く。定。り。け。毛。野。の。這。二。個。の。壯。伎。等。を。退。き。せ。  
 又。浦。安。牛。助。友。勝。を。招。れ。各。相。伴。を。潜。び。稻。村。の。城。か。り。來。り。俱。堀。内。の  
 宿。所。造。り。隨。即。千。代。丸。豊。俊。浦。安。友。勝。を。引。込。今。宵。妙。真。單。節  
 等。と。敵。地。へ。遣。き。快。船。の。舵。工。お。做。ま。り。其。示。敵。の。寄。り。の。月。八。日。  
 和。殿。の。當。日。小。箇。様。々。と。其。進。退。を。示。ま。れ。豊。俊。等。悦。兼。て。猶。潜。り。  
 圍。圍。居。り。毛。野。の。則。退。り。音。音。妙。真。叟。單。節。を。悄。地。別。室。に。招。れ  
 集。て。且。友。勝。と。俱。件。の。密。議。を。談。する。程。堀。内。雜。魚。太。郎。負。住。の。暴。お  
 心痛。の。病。發。り。似。と。伴。り。唱。て。洲。崎。の。陣。を。辭。し。去。り。其。隊。の。士。卒。百。五。十。名。を  
 從。令。稻。村。の。城。内。宿。所。か。り。來。り。け。毛。野。の。則。負。住。と。這。圍。坐。招。れ  
 入。り。更。も。又。談。する。御。向。那。一。義。の。崖。略。を。傳。へ。ど。大。師。と。大。村。お。授。け

たる。計畧既ハ仍レテ敵ハ其の月初の八日ハ必推寄来ルベシト告アケケル。大  
角ガ密書言ク。其ハ是ハ乃テ堀内生ハ其隊兵百五十名ト俱ハ。漢者ノ如  
クハ打粉テ甲冑シテ各其船底ハ推隠シ。五七箇ノ鯨舟ハウチ乗テ今宵  
悄地ハ其投キ方ハ赴ル。我ハ犬村ガ密使ト御導ノ為ハ留置ス。則他  
ウチ載テ其投キ浦ハ浦中。大村ハ對面易ク候ベシ。大角ガ那地ト偽名  
赤岳百中。大師ノ偽號ハ風外道人。即是ハ那里ハ到リテ後ノ進退ハ  
必大角ガ意申ス。其ハ乃テ其の兵を、却又音音ノ刀自若ハ是ト異  
多。今宵豊俊ガ降参ノ密使ト伴リテ快船ハウチ乗りテ五十子ノ城ヘ赴ク。小  
四箇ノ婦人同船セ。敵ハ其使ノ女子ノミテ且其死ヲ疑ベシ。其ハ故ハ音音ハ刀  
自ノ鬼ト俱ハ先ニ。五十子ノ城ヘ到テ箇様々ト其ハ折敵ノ士卒ヲ  
豊俊ハ其ノ書翰ヲ見テ、必是ヲ疑ク。拒テ垂ハ信ラズ。登時妙真

刀自ト單ハ即トシテ浦安生ハ船ヲ擡シ。別船ハウチ乗りテ、其ハ折敵ノ士卒ヲ  
到リテ、豊俊ハ其ノ事ノ倉卒中、豊俊ガ降参ノ、其書ト見テ、其ハ折敵ノ士卒ヲ  
又奴等トシテ、其ハ乃テ其の兵を、却又音音ノ刀自若ハ是ト異  
多。今宵豊俊ガ降参ノ密使ト伴リテ快船ハウチ乗りテ五十子ノ城ヘ赴ク。小  
四箇ノ婦人同船セ。敵ハ其使ノ女子ノミテ且其死ヲ疑ベシ。其ハ故ハ音音ハ刀  
自ノ鬼ト俱ハ先ニ。五十子ノ城ヘ到テ箇様々ト其ハ折敵ノ士卒ヲ  
豊俊ハ其ノ書翰ヲ見テ、必是ヲ疑ク。拒テ垂ハ信ラズ。登時妙真

課せし。信謀りゆ。我々憶ふ。約莫這頭。成る。武士。由。莊。客。も。皆。總。角。多。比。の。好。ま。そ。水。の。戯。れ。船。を。操。る。こ。の。浦。安。生。の。今。宵。の。舵。工。は。是。元。元。見。れ。一人。七。但。其。先。船。の。舵。工。を。選。ぶ。渡。草。音。音。の。刀。自。自。早。く。も。水。戯。を。ゆ。り。こ。の。空。取。舵。工。あ。る。ま。と。も。必。渡。さ。ん。加。旗。猶。幸。あ。り。大。師。が。這。黄。昏。も。那。雍。龍。襲。の。玉。を。ゆ。り。こ。這。里。も。那。里。へ。赴。く。船。の。順。風。を。與。へ。んと。大。角。が。書。状。を。在。り。開。き。堀。内。生。の。與。え。れ。ど。刀。自。等。も。究。竟。の。便。宜。之。然。る。六。艘。械。を。操。る。ま。も。船。を。か。の。つ。か。う。那。地。不。届。ら。ん。の。憂。も。あ。ろ。易。く。な。る。べ。し。の。餘。の。事。の。曲。々。今。我。指。揮。不。逞。あ。ら。む。あ。ろ。ゆ。ゆ。と。説。示。廿。六。貞。任。友。勝。の。感。と。く。已。ま。む。妙。真。音。音。曳。の。單。舟。中。の。比。皆。共。侶。不。悦。兼。く。水。路。の。准。備。を。做。さ。程。の。毛。野。の。人。々。不。辭。一。別。れ。て。い。そ。ぎ。と。陣。所。へ。還。り。け。り。今。程。の。音。音。曳。の。這。頭。の。浦。の。世。を。不。疑。る。發。婦。の。像。を。打。捨。て。其。曠。昏。の。城。を。出。る。毛。野。が。教。へ。浦。邊。不。見。く。見。ふ。果。して。水。際。不。維。た。は。一。

艘の快船あり。隨即これあり。乗りて。曳き。と。俱。中。漕。必。ま。ふ。大。法。師。が。那。玉。を。て。あ。ろ。吹。ま。る。あ。ろ。ん。折。々。順。風。に。け。れ。ば。席。帆。揚。て。ま。ら。ま。る。日。の。暮。り。て。鳥。夜。を。れ。ど。も。船。穩。中。迷。ひ。の。せ。む。坐。し。て。其。曉。天。の。此。際。濱。の。船。果。み。け。り。有。徳。り。一。程。の。妙。真。と。單。舟。の。音。音。曳。の。此。下。後。れ。て。浦。安。友。勝。と。相。伴。ま。る。二。個。各。形。貌。を。窺。し。て。其。投。ま。浦。曲。の。來。て。見。る。あ。ろ。も。毛。野。が。准。備。を。け。り。一。艘。の。快。船。あり。且。其。邊。の。一。個。の。浦。人。漁。火。を。焼。き。居。り。火。光。は。友。勝。と。透。し。見。て。和。殿。の。濱。縣。馬。助。を。ま。や。ひ。ん。れ。日。暮。り。奶。々。と。妹。子。と。を。お。も。く。乍。心。摩。那。里。へ。と。も。く。を。や。と。向。か。友。勝。あ。ろ。ゆ。り。然。る。こ。の。和。殿。も。豫。知。る。故。主。圖。書。殿。の。輿。の。扇。谷。家。へ。降。参。を。請。ん。と。く。方。僅。我。故。朋。輩。某。甲。の。妻。と。女。兒。が。悄。地。に。這。頭。より。船。の。乘。り。と。五。十。子。と。投。げ。ぬ。れ。ど。鈍。や。惴。り。と。要。緊。の。口。書。を。執。忘。れ。ぬ。他。等。も。追。草。鬼。の。丹。を。遞。與。さ。ん。と。く。來。ぬ。と。和。殿。も。船。の。乘。り。と。ま。と。の。を。其。人。等。あ。る。を。思。ふ。る。馬。助。知。る。と。里。見。

殿の仁心多し我故主を誅戮せむ。今も圍圍の類なるふ。今番の息劇の嘗  
 管見の憐る隙を覘む。圍見を破りて扇谷へ降参せむ。彼の一歩の不義の  
 多く且危し。いづ日稀身便り不就く。我も亦その義を告ぐ。當圍の世を潛  
 我殘黨不拘修く。力を勸せむ。いかにされし我の呆まき。心をせむ。己ねと禁  
 生友勝胡意冷笑ひ。忠義の疎を知漢くる。殘黨既も同意を。主を竊  
 出さす。旗と賜日遠く。その折の後悔ま猶論ま。死すべし。われども。去向を  
 いそげ。今宵の饒さん先々といひ。妙真單節を引立て。船に乗んと水際  
 寄ると。件の漢子酷く奴心で。なると一聲叫びも果む。衝と身を起して携  
 林を友勝を身と反して。撲地と投る。白打の精妙件の漢子の筋斗り。さ  
 沙を散して滾ぶ時頭を磯石に撲せけん。満面怒地血を塗れて。仰反り。さ  
 息絶けり。その時一個の燈心見あり。姑且磯松の枝陰に身を潜む。事の光景と

現ひ。これ憶むもヤヤと聲を擧て。出歩み出さず。船を友勝のうらむ。向ひ  
 通の濱縣主とやら。今甲乙の回答ありて。精なる。和殿を那上總を。擧  
 本の敗將千代九主の殘黨。多し。信云。酒家の大石石見守憲重の同謀。見天  
 岳餅九郎と喚る者。和殿も五十子の城へ推参せむ。欲りぬ。唯も同船  
 幸。汲引をまへ。あの受の只和殿の爲の。さす。我も亦這梓にあを。過  
 分の賞禄。千くら。委曲の船を。さす。卒々といそぎ。友勝憶むも。笑れて。開  
 料ら。幸。要る。奴。障身。せむ。言も。費。時。も。程。今。の。先。火。家。の  
 船。二。里。も。後。れ。け。案。内。を。憑。ら。妙。真。と。單。節。を。と。て。  
 他。の。我。母。と。女。弟。之。既。不。納。應。の。計。較。あ。女。流。と。あ。地。在。在。後。日。の。安。免  
 心。許。る。故。う。ち。載。く。も。さ。の。義。も。憑。と。宣。示。と。い。ハ。餅。九。郎。點。頭。て。好  
 好。女。子。の。障。り。い。そ。べ。し。と。い。う。單。節。も。を。掖。技。け。徐。に。船。を。乘。ま。友



ゆずり九郎

ゆずり

八代傳九郎卷五十四

廿六



ゆずり

ゆずり

友九郎

猿八友勝と  
猿樂して餅  
九郎を釣る

八代傳九郎卷五十四

廿六



勝の妙真を駝ひて船に遣り居て其身も俱か乗る程餅九郎の縄解て早  
 く漕ぎ快船を追風よれが箭の如く大洋遙か出ふけの然に友勝が投らま  
 死せりと見えたる件の漢子の姑且して頭を拾けて龜の像く西下を見えり蛇の  
 似く五體を伸しておろし身を起して汀渚を潮水を掬ひて洗ふ鮮血の濺准  
 備の餉燕脂を洗ふ随の疾る。軀をも拭きて幾番顔面を拭ひて草  
 くの獨笑して洲崎を陣所へかゝるべし。亦毛野が謀る処の邊に扇谷の  
 間諜見徘徊して虚実を窺ふ猶もんと思ふ心を友勝の徳々と耳に誨え又様八  
 と喚做ま一個の雑兵の好ま様樂とぞ做ま者件の謀計とゆひせり果して  
 敵の間諜見餅九郎と釣出七。反て友勝も引をぬき畢竟空る。這  
 計暗合く。後の話説甚麼ぞ。開の下回解分を聴ねか。  
 南總里見八犬傳第九輯卷之三十四終

南總里見八犬傳第九輯卷之三十五

東都 曲亭主人編次

第百五十九回 助友忠諫父の志不代る 信隆機変族の兵を借る

くてさふ給うまをさるま。そのよすは。其の陣より来て軍師犬阪毛野不報る。那  
 却説雜兵狙罔猿八々當晚洲崎の陣より来て軍師犬阪毛野不報る。那  
 浦中く有る誨られる様樂とぞ。扇谷の間諜見天岳餅九郎と釣出あふ  
 其奴鈍も謀られ。友勝も引をせんと。同船のりち乗りて五十子の城を投て  
 漕走りせける光景を以て具しければ毛野の憶むら笑ま。現狐と釣る搦夫の  
 似る我弄計の折もくゆれて反て浦安等の帮助ある。一実不物怪の幸  
 るる。事皆汝が押死に必秘をへ秘をへ。口を鉗め。人不知る。卒とそ  
 賞錢を取まれば猿八々受く。己が守屋へ退りけり。あの時尚甲夜を。い人

定小至らねが毛野の本陣へ赴きて義成主を見参り折らる義成主は獨帳中  
 多。燈燭の下に兵書を開いて在る。躬を召入れて對面あり。當下毛野の今  
 宵貞住の遣兵百五十名を從せ。大角を兩個の使と共に那地へ遣しける。又  
 趣。又東峰萌之と鯨船員六人も亦百五六十の隊兵を授け。其投を方へ  
 遣せり。又立音音曳と妙真單節と前後の別船より乗せ。二度亦五  
 十子へ遣し折妙真等浦安牛助友勝と附。幫助ありける。又雜兵粗  
 岡猿八が猿樂と。扇谷の間諜兒天岳餅九郎と釣出ける。支の便宜を  
 悄地へ生口宣しける。言葉て又いせり。立音音曳四個の婦女子と前後二度遣せり。  
 徳々の遠慮おられ。おれも。那朝時技太郎の事もいへ。大石憲重も猶疑  
 いて十代九豊俊の降参と信するとも。おれ然心許る。いへ。鳥夜の技石小似  
 れも。更々猿八が猿樂と。聊試ひり。おれ思ふ。増する便宜あり。既小安心

仕の取といへ。義成主より。然々猿樂の計策の出来過は。いへ。おれ者もあ  
 る。おれ我思ふ。いへ。おれ。能狐と捕る。搦手と。おれ。必野狐のあり。おれ。思ひ定りね  
 ども。餌と。いへ。おれ。猿と。搦て。待て。おれ。狐。必。寓。おれ。其。猿。おれ。入。おれ。ぬ。おれ。今。宵。此  
 算計も。則。又。おれ。理。おれ。那。敵。の。間。諜。兒。おれ。必。其。浦。邊。おれ。在。おれ。正。可。おれ。思。ひ  
 ぬ。おれ。謀。おれ。所。暗。合。おれ。て。おれ。宅。おれ。錯。おれ。り。おれ。凡。おれ。知。おれ。の。おれ。做。おれ。す。おれ。ん。おれ。曩  
 おれ。の。おれ。媒。鳥。おれ。を。おれ。り。おれ。秋。小。禽。おれ。を。おれ。捉。おれ。る。者。おれ。と。則。是。同。一。理。おれ。ん。既。おれ。や。て。敵。の。間  
 諜。兒。おれ。が。汲。引。おれ。を。おれ。身。おれ。妙。真。單。節。友。勝。おれ。の。おれ。立。音。音。曳。おれ。も。是。おれ。ふ。おれ。り。て。必  
 や。信。容。おれ。られ。鳴。乎。謀。おれ。る。哉。と。稱。おれ。え。おれ。の。おれ。毛。野。おれ。の。畏。おれ。る。容。衛。て。臣。おれ。等。おれ。が。智。術。の  
 所以。おれ。の。おれ。ま。這。回。の。松。策。始。おれ。り。其。圖。おれ。不。當。おれ。の。おれ。則。錦。の。御。盛。徳。おれ。も。天。の。祐。おれ  
 け。おれ。機。変。おれ。の。実。おれ。已。おれ。て。おれ。る。所。おれ。の。おれ。を。おれ。義。成。主。おれ。の。否。おれ。と。おれ。然。おれ  
 い。おれ。機。変。おれ。の。巧。おれ。聖。賢。の。必。嫌。おれ。を。おれ。孫。子。おれ。の。兵。と。詭。道。おれ。と。おれ。の。故。おれ

孔聖の事不臨く必<sup>レ</sup>怕れ謀を好て成<sup>レ</sup>え者<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>のりあ<sup>レ</sup>る也。然<sup>レ</sup>機<sup>レ</sup>變<sup>レ</sup>は  
 巧<sup>レ</sup>も善<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>ハ必<sup>レ</sup>や饒<sup>レ</sup>されん邪<sup>レ</sup>智<sup>レ</sup>の機<sup>レ</sup>變<sup>レ</sup>ハ必<sup>レ</sup>害<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>豈<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>列<sup>レ</sup>の  
 論<sup>レ</sup>せや。又<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>既<sup>レ</sup>敵<sup>レ</sup>の寄<sup>レ</sup>まると<sup>レ</sup>夢<sup>レ</sup>え<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>の遠<sup>レ</sup>くも<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>寒<sup>レ</sup>の响<sup>レ</sup>あり  
 水<sup>レ</sup>戰<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>目<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>敵<sup>レ</sup>の淺<sup>レ</sup>慮<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也。自<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の士<sup>レ</sup>卒<sup>レ</sup>衝<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>邊<sup>レ</sup>落<sup>レ</sup>は  
 者<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>の立<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>凍<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>ん然<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>脚<sup>レ</sup>冷<sup>レ</sup>龜<sup>レ</sup>りて<sup>レ</sup>干<sup>レ</sup>戈<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>操<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>便<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也。あ  
 美<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>豫<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>問<sup>レ</sup>れて<sup>レ</sup>毛<sup>レ</sup>野<sup>レ</sup>の答<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>也。然<sup>レ</sup>ハ寒<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>戰<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>他<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>便<sup>レ</sup>  
 也。年<sup>レ</sup>來<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>也。當<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>冬<sup>レ</sup>暖<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>氣<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>違<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>夏<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>調<sup>レ</sup>煉<sup>レ</sup>  
 仕<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>既<sup>レ</sup>初<sup>レ</sup>冬<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>候<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>這<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>温<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>乘<sup>レ</sup>りて<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>涉<sup>レ</sup>  
 索<sup>レ</sup>馬<sup>レ</sup>脚<sup>レ</sup>冷<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>凍<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>血<sup>レ</sup>氣<sup>レ</sup>壯<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>士<sup>レ</sup>卒<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>泗<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>寒<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>  
 時<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>也。水<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>反<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>温<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>况<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>拙<sup>レ</sup>策<sup>レ</sup>仍<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>  
 湯<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>做<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>べ<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>美<sup>レ</sup>脚<sup>レ</sup>擡<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>理<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>餘<sup>レ</sup>談<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>

父<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>夜<sup>レ</sup>深<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>話<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>面<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>五<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>也。今<sup>レ</sup>朝<sup>レ</sup>早<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>赤<sup>レ</sup>品<sup>レ</sup>百<sup>レ</sup>中  
 少<sup>レ</sup>節<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>艦<sup>レ</sup>幟<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>賜<sup>レ</sup>りて<sup>レ</sup>貌<sup>レ</sup>姑<sup>レ</sup>峯<sup>レ</sup>路<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>正<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>定<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>計<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>則<sup>レ</sup>水  
 陸<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>隊<sup>レ</sup>配<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>這<sup>レ</sup>里<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>間<sup>レ</sup>諜<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>住<sup>レ</sup>進<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>据<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>敵<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>備<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>摠<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>里<sup>レ</sup>見  
 義<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>安<sup>レ</sup>房<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>洲<sup>レ</sup>崎<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>陣<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>構<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>則<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>阪<sup>レ</sup>毛<sup>レ</sup>野<sup>レ</sup>胤<sup>レ</sup>智<sup>レ</sup>防<sup>レ</sup>禦<sup>レ</sup>使  
 大<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>即<sup>レ</sup>忠<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>也。相<sup>レ</sup>從<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>隊<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>萬<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>千<sup>レ</sup>餘<sup>レ</sup>也。又<sup>レ</sup>陸<sup>レ</sup>下  
 總<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>圍<sup>レ</sup>府<sup>レ</sup>臺<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>根<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>嫡<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>里<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>冠<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>通<sup>レ</sup>摠<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>也。老<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>  
 東<sup>レ</sup>六<sup>レ</sup>郎<sup>レ</sup>辰<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>杉<sup>レ</sup>倉<sup>レ</sup>武<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>助<sup>レ</sup>直<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>也。是<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>也。矢<sup>レ</sup>斫<sup>レ</sup>河<sup>レ</sup>を  
 前<sup>レ</sup>めて<sup>レ</sup>防<sup>レ</sup>禦<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>犬<sup>レ</sup>塚<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>孝<sup>レ</sup>犬<sup>レ</sup>飼<sup>レ</sup>現<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>也。是<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>一  
 萬<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>也。又<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>德<sup>レ</sup>口<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>防<sup>レ</sup>禦<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>犬<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>莊<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>任<sup>レ</sup>犬<sup>レ</sup>田<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>吾<sup>レ</sup>悌<sup>レ</sup>順<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>將<sup>レ</sup>也。  
 矢<sup>レ</sup>斫<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>德<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>河<sup>レ</sup>邊<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>陣<sup>レ</sup>也。其<sup>レ</sup>隊<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>兵<sup>レ</sup>七<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>千<sup>レ</sup>也。過<sup>レ</sup>也。の<sup>レ</sup>他  
 安<sup>レ</sup>房<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>總<sup>レ</sup>也。四<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>箇<sup>レ</sup>城<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>也。城<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>頭<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>守<sup>レ</sup>りて<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>邊<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>備<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>固<sup>レ</sup>る

らむ稲村の城の義成の三男里見次丸老當黒荒川兵庫助清澄等三千  
 士卒と俱ふれを守り龍田の城の義成の父里見治部大輔義実の致仕は老  
 當杉倉木曾八氏元堀内藏人貞必等相従ふく日足を守る龍城の士  
 卒僅か二千多しと云足ふりて洲崎へ向ふ水戦の惣大将の管領扇谷  
 修理大夫定正並不定正の長男式部少輔朝寧小幡木工頭東良大石  
 源左衛門尉憲儀武田左京亮信隆是等宗徒の大将としてこの隊の軍兵  
 三萬餘名巨艦數百艘おらり衆る。本月八日の曉天より徑小洲崎へ推寄  
 せんとせ入下總る。國府臺の管領山内兵部大輔顯定足利左兵衛尉日  
 成氏を兩大将と頭定の嫡子上杉五郎憲房並白石城八重勝成氏の家  
 臣横堀史在村新織帆大夫兼行等是に従ふ。兩隊の軍兵三萬八千又行  
 徳へ定正の嫡子上杉五郎朝良と千葉兼八自胤と西大将と大石石見

守憲重原播磨八州入相馬郡領將常稻戸津衛由元等是に従ふ。兩隊  
 軍兵三萬餘之漸々走附く士卒と合して水陸の兵を慮八九萬及び  
 伴りて十五萬騎と稱えり。既申て諸方の隊配かゝる如く定りけり。朝頭  
 定父子成氏朝良自胤の柴濱より艦を或の西國河の流り或の徑中川へ  
 推渡して夙く要害を合んとし。士卒の艦を餘を歩りゆくも三より四并  
 中成氏の初大石憲儀が約束の言違ひて定正頭定の管待恭しう。况  
 今番の惣大将もさるもあされ。獨憤胸が満て側人のる折々伴の老  
 當横堀在村の受付麼と怨せり。他が諫の艱難ひく。事のあふ及不之然  
 ども在村恥る色も。情地が主を寛解も。脚憤の然るも。臣等事此  
 勢ふりて那肚裏を推量ひ。不定正も頭定の底意我君と推尊する。あ  
 ちねども近國の諸将来會され。其兵權を失ひ。と。胡意恭敬の礼茂

盡さ。遊莫。園府臺の寄隊。他既。我君と。搦大将。御做。一。あ。を。て。頭定。の  
 副將。る。べ。且。水路。の。安房。へ。近。けれ。ども。那。里。僅。四。郡。の。も。上。總。の。安。房。五。六  
 倍。七。四。十。餘。城。の。魚。米。の。地。之。然。下。總。より。攻。入。り。て。早。く。上。總。に。累。せ。ぬ。其  
 軍。功。定。正。主。の。水。戰。十。倍。一。て。兵。權。立。地。の。我。君。の。御。堂。入。ら。ぬ。何。の。御。疑。ひ  
 いた。大。功。の。細。謹。を。省。ぎ。大。礼。の。小。讓。を。辭。せ。小。説。を。忍。じ。大。謀。を。乱。る。と。い  
 う。今。一。重。毒。時。忍。せ。ぬ。臣。も。憐。而。の。計。ひ。て。ん。ち。任。さ。ぬ。ひ。と。説。惑  
 せ。る。便。任。利。口。の。成。氏。淺。く。も。憤。り。解。す。又。阿。容。々。々。と。頭。定。父。子。と。俱。に。園。府  
 臺。を。投。て。進。發。を。後。悔。あ。ふ。立。ぎ。ま。へ。有。徳。り。一。程。扇。谷。の。内。管。領。持。資  
 入。道。道。灌。の。其。子。新。六。郎。助。友。と。名。代。り。て。の。日。五。十。子。の。城。の。着。到。あ。る。助。友  
 隊。兵。三。百。餘。名。昨。日。相。撞。る。糟。谷。の。館。と。立。出。く。後。う。や。今。日。の。速。く。も。敢  
 遲。參。を。取。る。色。を。推。く。定。正。主。の。見。參。り。て。父。の。意。見。を。舒。す。の。事。を。累。表。す。

愚。父。道。灌。屢。諫。書。を。口。呈。り。て。里。見。を。御。征。伐。の。不。可。る。と。直。示。あ。り。御。用  
 ひ。あ。ら。せ。り。て。既。あ。の。期。及。せ。ぬ。今。は。是。非。の。初。る。べ。は。所。あ。ら。ぬ。れ。ども。人。の  
 臣。と。あ。り。其。君。の。非。を。知。り。ま。ら。猶。も。孤。忠。の。詞。を。盡。さ。で。其。傾。覆。を。俟。ま。ら。不  
 義。や。て。且。愚。る。べ。抑。那。義。成。父。子。の。世。の。稀。る。良。將。也。當。家。と。怨。を。結  
 び。ま。ら。知。又。其。良。佐。る。者。の。仁。義。八。紘。の。八。犬。士。あり。東。荒。川。杉。倉。堀。内。の  
 毎。も。皆。一。人。當。千。也。其。封。疆。を。守。る。足。れ。り。然。る。と。今。鳥。合。の。衆。を。も  
 一。時。水。陸。を。攻。ま。せ。克。ま。思。い。召。め。ら。卵。の。石。と。厭。上。火。と。夾。ま。せ。水。の  
 擲。つ。ま。り。甲。非。文。を。技。め。ひ。べ。臣。等。が。愚。心。意。り。是。を。思。ふ。里。見。の。腹。心。の。患。は  
 わ。る。後。の。患。ひ。あ。る。べ。は。則。是。頭。定。主。と。北。條。長。氏。の。互。に。反。て。頭。定。主。の。患。を  
 束。ね。詞。を。卑。く。あ。る。俱。に。里。見。を。伐。め。の。只。前。面。を。背。と。忘。ま。し。御。不。覺。不  
 あ。ら。ん。や。倘。幸。ひ。し。て。今。番。の。戰。ひ。を。克。せ。ぬ。者。も。兵。權。反。て。頭。定。主。の。奪

る。是より先。又戦ひ利あり。是より怨と里見氏の結びの事。御方の  
 諸將離れ叛く。地を削り。至る時悔及。及せぬ。もいひ。而る。り。や。稟  
 さ。や。今大寒の時。候。多。水戦。と。上。日。と。あ。る。士。卒。の。多。脚。亀。り。と。擇。り。自。由。を  
 る。べ。く。且。昔。の。あ。る。近。世。も。安。房。上。總。を。攻。伐。せ。し。艦。を。渡。せ。例。を。守。る。水  
 行。其。路。捷。けれ。ば。海。岸。の。崖。最。多。て。波。濤。累。れ。艦。寄。ら。ざ。の。故。極。て  
 危。敵。の。海。邊。の。成。長。と。水。戯。水。馬。自。由。を。む。不。知。安。内。の。士。卒。を。駭。く。  
 這。寒。天。の。水。戦。の。時。も。敵。も。知。り。召。れ。ぬ。謀。の。軍。と。い。ま。く。の。顯。定。主。の。あ  
 理。と。知。る。秋。君。と。俱。水。路。を。向。る。其。隊。配。の。折。れ。せ。ぬ。及。く。國。府。吉。室。の  
 敵。向。ひ。あ。り。是。其。奸。智。の。長。る。所。姑。且。成。敗。を。見。ん。と。多。く。悟。り。ぬ  
 ぬ。て。朽。惜。けれ。と。席。を。拍。ち。面。を。犯。し。て。親。代。の。孤。忠。の。誠。意。諫。言。細  
 中。の。事。も。定。正。の。事。も。果。を。怒。れ。る。面。の。朱。と。伏。く。眼。を。睜。り。聲。耳。共。立。く。

我れ助友過言親道權が分付り。一。言。一。句。の。對。酌。も。多。く。敵。と。美。く  
 自家と諷る。并。と。忠。臣。と。い。は。れ。や。里。見。の。近。曾。我。不。冠。せ。し。大。山。道。即。大。塚。信  
 乃。等。と。引。入。れ。隣。國。の。毒。と。流。せ。る。罪。重。か。今。伐。去。後。世。子。孫。の。患。ひ。と  
 る。且。顯。定。の。同。宗。と。い。は。れ。不。合。の。胸。解。け。今。我。幫。助。の。事。を。猶。疑。は  
 誰。と。憑。ん。況。や。今。寒。天。と。其。利。を。垂。て。水。路。と。あ。る。孰。の。日。あ。る。那。根。本  
 稻。村。の。城。と。拔。ん。里。見。の。士。卒。を。多。く。水。族。あ。ら。も。あ。る。寒。天。の。水。戦。は。自  
 家。の。脚。冷。亀。の。敵。の。脚。も。同。く。な。る。べ。し。左。も。右。も。あ。れ。我。神。仙。の。幫  
 助。あり。又。術。師。の。御。道。あり。必。勝。の。理。あり。今。征。伐。の。時。不。吉。の  
 詞。を。盡。せ。る。饒。さ。れ。大。不。敬。其。罪。重。を。知。る。秋。道。權。權。公。在。り  
 る。我。催。促。を。用。ひ。て。今。事。を。承。け。雨。を。り。名。代。や。と。聊。々。士。卒。を  
 事。の。事。を。不。忠。多。外。聞。た。過。言。の。條。々。今。い。も。饒。か。り。覺。期。を



八代将軍 徳川吉宗 巻五十五

三浦 義興

せよと罵れども。助友阿容るる氣色も御説でらひへとも昔も今も良將の幻術賣卜の果敢るは枝と憑むとやいれ耳を貴と目と賤とて奇巧を好めど必奇禍あり其も亦是御行の一事をいければ臣等が邊參を咎め受ふ今參るも尚早より親道灌が教ふりて敗軍の折御危窮を極ひまらん為おとといのをも果敢定正の敦圍に猛く衝と身を起しと以さればと君臣上下の礼と乱る鳥澗の白物命根断くられんと罵るるも佩刀の柄をもを搥り引拔んとあけるを席の傍にたりる武田信隆敬馬に吐嗟とむる自身を盾に推隔々刃を拔せを助友が與ふ陪話ていふや在下の信昌の名代たる不逞夫の罪あり然ると他人の為りも過言の罪を勸解稟まら打出の杭に似れども今助友が稟まらるる則親の口状を憶む嫌忌不歩りし年尚少に所以るればいづれ恩免と賜へか。縦其罪是ありとて

他が親持資入道の年未軍功多うりし世の人を知る所あるは一個の敵ととも伐めりて反て有功の家臣の其子と誅しぬる必敵に笑ふ。這義を思ひ召さむと為諷諫の詞を盡き程の左右侍り大石憲儀及箕田馭蘭二も已てを以て詞を添く共侶不寛解し定正僅不怒を醫せり。故の登見お搦る時憲儀聲をゆり立ち新六郎罷り立ねば退り。と遣り立ち助友の心も甚艶然と見らるて微子の去り箕子の是が奴と做ら比干の諫ゆる則死せり我大皇國の越後中太あり寧中忠臣の狗とる所とも乱離の人ふるるや後を思ひ合されんと咥はるる身を起して徐の外へ退る。隊兵三百名を従へ。糟谷の館へ返り。飲戒の淹りて中途に在る。飲是を知る者多うりけり然るにその日定正の怒を寛解し助友を恙も退り。武田左京亮信隆の素是上總る廳南の城主に初信隆行心。那



墓田素藤と酒茶遊遊の友垣と締び去歲の比より春に至りて素  
 藤が里見と怨るるありて叛て竟に館山の悖逆の旗を建し時信隆  
 も亦交遊の罪免れずと思ひく其友なる真里谷信昭千代丸豊俊等  
 と共各其城を据りて討隊の大將堀内貞約杉倉直元堀内貞住等と  
 戦ふ程に真里谷信昭が心変りて寄隊の内応をせしが其戦忽地敗  
 まる豊俊の生拘られ信隆の辛く命を免れて敷漏される士卒と俱水  
 路を歴て相模路へ落延り甲斐の國主武田信昌嫡家されし情地府の  
 城に赴き則信昌其身の不幸没落の由を告るら托し彌心主僕寓  
 居あるける年の冬十一月扇谷山内の兩管領が安房の里見を征  
 伐せし甲斐の武田も加勢の軍兵を催促せし然れども信昌北條長氏の  
 厭ふれみぐる出陣せし親族の中もあはれ者軍代とて早く五

十子の城へ來會せしとありかど信昌の生心して敢其美を言て老黨  
 甘利亮元等と召集へくあはれ誰何と詮議あり亮元がらや那里見義  
 実義成父子の當今稀る良將と云世の風聲あるく以歎別又隔昨歳  
 當國の旅宿して料を館不見参する犬塚信乃犬山道節の智勇兼備の  
 俊傑多し君を知り召所へ今其黨都て八人皆里見相仕へ重用大々  
 るるまに云も風聲紛れは然るは是虎の翼を添ふる如く敵の城  
 管領鳥合の衆をめて伐滅さす欲するもいふて克らあらんや當家の  
 猶幸い北條を厭ふ一役あり加勢の士卒を遣さし權且其成敗を御覽あ  
 るかと云意見憚り所るると武田信隆をよと制めし信昌に向ひては  
 甘利が一議その理あれも加勢の軍兵を遣されざる兩管領必然ん今在  
 下隊兵三百名を借しぬ則館の名代と唱る五十子の城に到らば徳而

那里到るといへども。両管領と相輔け。又里見も従つて。在下一箇の掎  
 尾をのり。朝々廳南の城を合ひ復して。故のどくふ是を領せん。のりくふの美を饒  
 さきぬと其々請求る。信昌も其の言を許り。和殿我名代として五十子の城を  
 造りて。又々両管領を相輔け。又里見も従ひて。昔の城邑廳南と。合  
 んとし。あつらひ。言詳し。示しねと。問へ信隆然。計の密なるを可とせ  
 機小臨。變お応する。進退の肚裏お在り。あつらひ。儲果さ。出宗御身及  
 ぐ。在下み。如く。開を齎して。謝し。あつらひ。時い。ゆる。て。喪ひ。易り。い  
 り。饒さ。せ。ゆ。ひ。と。天地お。誓ひ。て。請ひ。信昌猶も思難。又元元意  
 見を問ふ。元元一霎時。沈吟。ど。あつらひ。人。暴。友を。擇。も。竟。小。城。地。を。喪  
 び。浮浪一稔。及。よ。も。其。本。性。胸。逞。く。て。且。義。我。あり。智。術。あり。謀。る。所。悪  
 事。さ。る。饒。一。ぬ。も。あ。つ。ら。へ。當。家。小。稟。一。恩。を。仇。る。館。の。御。為。牙。を。あ。べ。た。

不義ゆ。六自業自得。之。倘。幸。ひ。や。其。事。成。る。這。里。然。然。せ。る。帮。助。と。做。さ。る。  
 親族故御へ錦を。杜衣。お。還。城。樂。の。欵。ひ。わ。ん。先。事。の。試。二。三。百。の。軍。兵。を。授  
 け。五十子へ遣。一。の。一。事。兩。用。さ。る。欵。と。い。を。信。昌。ち。て。我。も。亦。如。右。思  
 ふ。卒。然。其。望。未。任。左。京。よ。信。隆。只。い。く。謹。慎。を。旨。と。て。疎。忽。の。舉  
 動。去。く。と。叮。寧。お。警。言。く。逞。兵。二。百。名。を。授。け。信。隆。忻。然。と。欵。ひ。兼。く。  
 恩。を。拜。別。を。告。ぐ。上。總。も。今。も。也。所。從。の。士。卒。十。四。五。名。と。俱。お。伴。の。兵。を  
 招。く。夙。く。甲。斐。の。府。を。立。去。る。の。り。胡。意。中。途。お。淹。留。し。て。十。月。五。日。の。朝。五。十  
 子。の。城。を。諸。將。の。行。德。國。府。堂。へ。出。陣。せ。り。其。迹。へ。入。替。り。定。正。お。見。參。考。  
 邊。着。の。障。り。を。云。云。と。頼。陣。し。ら。れ。ば。定。正。反。く。其。邊。を。外。口。め。肚。裏。お  
 思。お。や。武。田。信。昌。の。既。小。是。西。を。厭。あ。一。役。あ。れ。加。勢。の。餘。計。の。軍。役。也。且。這。信  
 隆。の。素。是。上。總。も。廳。南。の。城。王。さ。り。小。里。見。義。成。小。盾。を。御。し。ら。果。敢

多城を攻落され。甲斐の武田の身を寓する人の噂は豫少ぬ有徳と云  
安房上總の如法安内なり。且義成死心おれ敵お蒞る自家に帮  
助する事必尋らんと尋思をあらそふ。姑且身邊おゆるを安房上  
總の地理虚実城邑の言寡剛柔を甲しとて問致すと。馮心し思ひ  
今助友が父代する孤忠の諫言忌とる。凜然として烈しければ定正怒お  
堪てては數おせんと敦圍りと信隆為不勸解ける言听れ事終れて早  
くを異し理り一件の意味おれ現乱世といふ。突の中おち飯の内も鍼  
るはあま信隆が胸の機関善悪邪正孰を也鬼神もさし量らざるべし。

第百六十回 衛士相挑む兩枝の花  
名將許容る内應の質

介程お定正の五十子の城近に濱邊お尋く戦艦を集る大石憲儀奉

其艦と展檢を約莫柴濱より大木林六御中。海岸お維ぐ大小の戦  
艦千百數十艘。這内中鯨船幾十艘。柴硝の類都て燃草をヨリ  
採入る。憲儀の家臣仁田山晋六武佐是を掌り。夫役を駈て柴を運  
ぶ。名中負ふる地方の素より是柴お富ら其故の當時柴の浦人ハ冬十  
月の初より其年の暮まで海苔を採り生活を其海苔を採る。波濤  
至処より千數間水中お尋く柴を建く。籬色の像くお做し措け。波瀾お  
揺る海苔日日お這柴お概ると採り漉れ且乾て賣るを地方の名産と  
も氣味極く好。他郷の海苔の及ぶ所おあらず。這海苔を採る柴と土  
俗の方言お名つけいひとて近曾ある人の狂歌お幾谷山ひくおひよる海苔と  
あま玉の賜おせんひの乾海苔作者按まるおひよる日日の義を洋中  
海苔建る柴おより來る。日日お概れ。馳て其柴を呼く。日日お獲地名

柴と云ふも。這柴小据りてるべし。廻國雜記の道與准后の柴浦よりよみぬ  
 ひ歌の船よりつむ柴のうら人とあり。即今の芝のりや。本名の更級日記の  
 所云建柴の浦。即是其柴と建るの故り。證とるまへ。或は又太田道  
 灌の平安紀の小芝浦とある。歌の露をけり。道の芝生を踏る。駒のま  
 まりわけの空とあれ。昔も柴小芝を通りて書るの假字を論る。昔の  
 柴の海邊の真砂子地をら。結縷草。書るの題。の言く生ふくもあま。柴と  
 芝小かけく詠る。歌人の比與の。必とまへ。又按る。柴小程遠りらぬ  
 地名小日比谷と喚做まあり。昔の這頭より。日日の柴を専伐出あり。ひりて  
 日日谷と云。牧猶考て。正に照驗とる。別小識さむ。あま。昔柴小柴のヨカ  
 て。しよを解く。の。間。話。休。題。有。悠。一。程。小。十二月六日の。曉。天。小。音。音。曳  
 小。順。風。小。吹。送。ら。れ。け。る。船。柴。濱。小。果。一。目。今。艦。小。柴。を。深。入。る。支。役

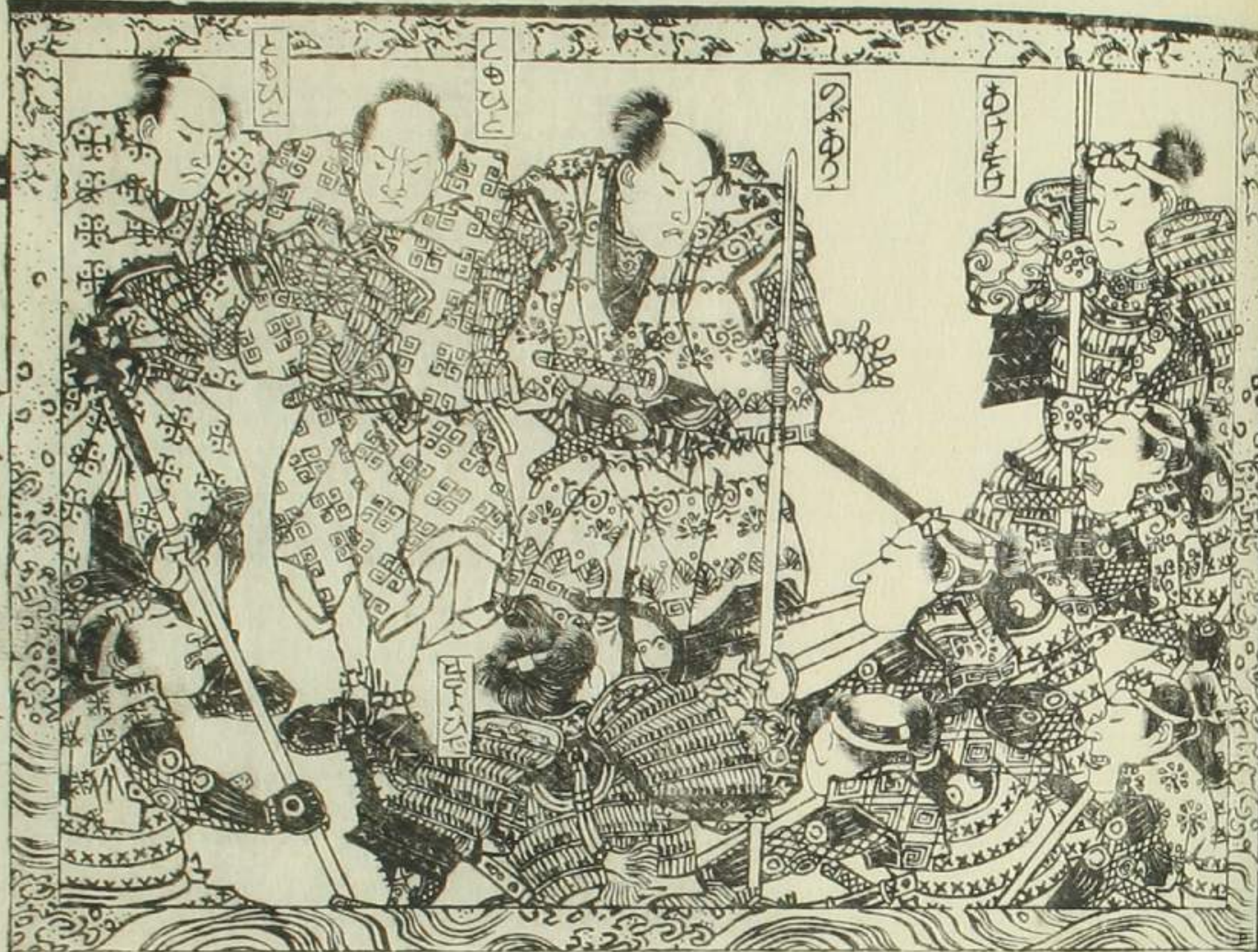
毎を喚ての。奴の情地。安房より来る者。管領様の御内也。ある  
 元刀祢們的對面を願ひ。ゆる。あ。の。よ。京。の。と。の。へ。大。家。牧。馬。は。且。誦。り。と。  
 安房秋々々々。と。走り。仁田山。晋六。小。告。れ。晋六。亦。敬。馬。は。る。先。其  
 船と機歇させ。船械を奪ふ。許の艦の間へ。緊く。維せ。隊兵戎  
 お。船。傳。ひ。近。つ。て。来。て。兩。個。の。婦。人。を。相。る。一。個。の。年。六。十。有。餘。中。骨。相  
 賤。く。ぬ。媪。へ。又。一。個。の。年。二。五。六。あ。や。あ。む。顔。容。の。愛。さ。死。惜。む。一。致。婦  
 る。秋。頭。髻。を。剪。り。て。兩。鬢。あ。ら。是。上。外。小。同。船。の。人。を。け。れ。晋六。僅。小。心  
 る。音。音。等。小。向。ひ。て。ぬ。媪。等。は。是。安。房。人。秋。傳。折。小。憚。り。も。何  
 と。敵。地。よ。り。来。お。け。ぬ。を。恁。公。我。の。扇。谷。殿。の。麾下。の。一。諸。侯。當。國。大。塚。の。城  
 主。大。石。見。守。憲。重。王。の。家。臣。也。郎。君。源。左。衛。門。尉。憲。儀。主。小。隸。れ  
 たる。仁田山。晋六。武。佐。是。之。憶。小。若。們。の。吹。流。され。致。る。ま。這。頭。が。故。御。で

還りて致と問ふと音音の口をいふ。我々の然る者も故主の與内恋の  
 密使の参りたる其故の箇様々々と千代九豊後の事の顛末且閉戦の  
 時の臨み裏伐して里見の艦を焼く欲する進退を實に伝ふ其状告げ  
 其言葉又又公を千代九の殘黨の世を潜ひて安房小在居者百十數  
 名はれども女子をその漁舟も遠く必と饒されねば已と云ふ我々が  
 大事の使の立ゆり良人も兒子もあの春の閉戦陣殺されぬ共侶の  
 嬌婦小ゆり數るねども我名を極引媳婦の臥間と喚做しゆりゆり  
 我を御主君の京上ゆりて馬心ゆり共侶の其漏るると補ひて本末乱  
 さを哄誘せし晋六ゆり點頭で原来和女をの豫聞く上總の敗將千  
 代九氏の殘黨ゆりあける我ゆり差錯るる那人當家へ内恋の謀  
 書と必齎しんと云ふねといふ其音音の差する面色して御向の事の

慌てて開けりしは非如其書ゆりゆりも浮るると云ふゆりゆり  
 晋六ゆり黙れ騙見奴舌長し縦使の女流でも忘る東西の事を缺て  
 降人裏伐の願書と云ふと云ふ懸見あんと云ふ是若の里見の間者疑  
 ひる。結初れ兵毎饒まると訃聲高く喚れ捷雄の親兵五六名兼りぬと  
 忘も果を船の以りと乗移り音音曳も云云と争ふ分説を听かして十  
 三四棹喚いて索を横んと闌折るる前向より來ゆ快船一艘澳の真風  
 延帆揚る疾と宛箭の如く陡然として近つ程其船は男女四名過  
 ぎ船頭小在居り一個の漢子の是則別人を仁田山晋六等が火家ゆく  
 いぬ比回謀の為小安房へ遣はれて那地小在居り天品餅九郎を在居り登  
 時餅九郎聲慌しくゆり人々下りて制れ晋六ある什  
 麼と訝りるる親兵を制りて程もる件船の徑小突鯨と共中りて

早く水際へ寄りし。餅九郎の磯へ降りて。其頭小立る。亞目六が耳を被よ  
 せ。悄説多。又友勝と妙真軍節と指して。事の由を告る程。既而て天の  
 明け。浩處。大石源左衛門尉憲儀の聚令。戦艦と展檢せし。五六  
 十個の士卒と領。騎馬廿め。五十子の城より出て。赤山晋六天品餅  
 九郎の邊へ。是を迎へ。訟宣を乞ふ。其を憲儀より。馬より下て  
 發見。不掛りぬ。當田下晋六。千代丸豊俊が降参を請ふ。前使の事を告れ。餅  
 九郎も亦豊俊が再度の使濱縣馬助。母と女弟と推して。未だ折の爲。体  
 馬助が故朋輩某甲を投殺す。餅九郎が偷見て。豊俊が裏伐の内。成の  
 詭譎。るぬ。照据を乞ふ。其使馬助。男女二名と同船。あか。か。り。あ。ふ。け。は  
 事。の。首。尾。を。詳。報。一。六。憲。儀。點。頭。ら。欽。び。く。隨。即。音。音。電。と。友。勝  
 妙真軍節も。都て。船より。召登。て。み。く。又。其。來。意。を。尋。る。時。降。人。の。作

法。され。ば。と。亞。目。六。則。友。勝。の。両。刀。を。帶。る。と。饒。さ。さ。徳。而。友。勝。が。の。所  
 餅九郎が報ると。毫も差。不。と。あ。る。友。勝。の。千。代。丸。豊。俊。が。舊。臣。濱。縣  
 馬助と偽名告て。則。豊俊が裏伐の謀状書。を。呈。上。せ。妙。真。の。馬。助。の  
 母。戸。山。單。節。の。馬。助。の。女。弟。叫。子。音。音。の。榎。引。曳。の。臥。間。と。各。各。名。を。変。て。  
 俱。の。憲。儀。の。拜。謁。を。登。時。大。石。憲。儀。の。件。の。謀。書。を。示。し。用。は。り。と。見。て。豊。俊  
 懐。の。夾。め。の。事。豊。俊。裏。伐。の。情。願。の。既。に。我。間。謀。見。天。品。餅。九。郎。が。見。出  
 きて。相。違。わ。ら。ぬ。と。上。の。今。ら。疑。ふ。と。あ。る。水。戦。の。大。後。日。と。定。め。ら。其。折。殘  
 黨。獄。と。破。り。て。豊。俊。と。竊。出。て。俱。の。裏。伐。に。里。見。の。艦。を。焼。く。べ。の。故。の  
 馬。助。が。宅。眷。を。安。房。の。在。せ。と。お。ろ。参。ら。せ。極。好。戸。山。叫。子。臥。間  
 と。や。ら。三。個。の。女。子。の。保。質。し。て。城。内。へ。召。措。ん。但。一。御。方。の。士。卒。們。の。豊。俊。を  
 認。り。し。者。あ。ら。ぬ。榎。引。を。其。姫。を。武。佐。の。管。け。て。艦。に。留。り。て。豊。俊。が



女流を留めて憲儀豊俊の謀書と受く

十五

女流を留めて

明相お清英は怪癖て信有るの生拘

女流を留めて憲儀豊俊の謀書と受く



女流を留めて

女流を留めて

き 折の眼見せよ。又濱縣馬助の情地、安房へ立かへり。残黨並に故主  
豊俊の報て裏伐の準備をいそがね。我の徑に五十子へ退りし言上及ぶべし。さ  
るはと宣示せ、大家ひしく兼額衝く。開ぐ中、友勝へ唯々とむる言業  
まて立まき、當下仁田山晋六も一旦没官する友勝が両刀を卒と返せ、友  
勝へ受戴せ、腰の帯びて、妙真音音曳の單節の目を注し、あつるを却  
憲儀の拜謝し、且晋六と餅九郎を告げ退せ。船をち乗り、船を推  
建て安房と投て、漕去りけ。介程、大石憲儀の天品餅九郎に分付て、妙  
真の戸山曳の臥間單節の叫子、三個の婦女子と開ぐ儘、推立て、俱して五  
十子の城かへり、随即主君定正、千代丸豊俊が裏伐の謀状を主君と  
且裏の安房へ遣る間、謀見天品餅九郎が俱して來おける。豊俊の密使濱  
縣馬助と老弱四個の女子のをも、顛末送き、定正、其書を開し。

其言を聞き、歎け、堪む。合笑れる額と拵て、憲儀の命を往る日、汝の  
那風外道人が遣る安房の方と見出して、例寄の徳々たる黒氣の中、異日  
那里の内応の者ありん。先見果して違ひ、今料をせし、千代丸圖書助  
豊俊の内応の吉事あり、知又赤品百中、武田信隆の便宜をいそが、皆是自  
家の洪福、今番の征伐必勝必利何の疑ひあるや、件の戸山臥間叫子と  
らひ女子毎と保質の捕置る、開ぐ箕田駒蘭二も管けて、是等の下知傳  
へよと詞委る、分付る。面色あつ快然たり、憲儀これを羨り、脚錠の如く、這  
回の吉兆第一義の風外道人の風術、いへ、臣等明日、谷山へ赴けり。ゆく八日、  
開戦の折、約束を違ひて、那風を吹きたるを、憑といひ、又保質の女子、  
事ハ駒蘭二も脚錠を傳へて、佐とら守むべし。相あるを、心て、馳て退せ。  
却箕田駒蘭二件の下知を傳示して、俱する妙真曳の單節を開ぐ、伝



與一。又父母。他等。比皆。女流。れども。千代。九豊。俊が。保質。るれ。日夜。の守を  
 固く。まへ。其。番卒。の。頭人。大。家臣。朝時。技太郎。と。天岳。餅九郎。と。附置ん  
 和殿。も。折々。由。断る。宜。く。心。を。屬。て。と。諭。せ。取。蘭。二。謹。と。美。て。則。件。の。三  
 個。の。婦。人。を。乾。淨。し。一。室。在。り。せ。と。恣。外。の。事。を。許。さ。技。太。郎。と。餅。九  
 郎。の。勤。番。の。頭。人。る。れ。五。六。個。の。雜。兵。を。從。令。送。伏。り。守。り。居。り。然。れ  
 地。の。政。も。虫。水。の。住。む。魚。の。雄。雄。の。媾。合。を。行。ひ。ぬ。這。餅。九。郎。と。技。太。郎。八。年  
 三。四。十。に。至。る。ま。尚。獨。寝。や。妻。を。見。れ。ぬ。曳。多。單。即。が。年。少。く。て。且。愛。と。美。た  
 面。影。の。羈。と。做。て。暇。な。勤。番。の。倦。む。厭。む。現。野。の。花。は。目。小。艶。く。村。酒。の。金  
 醉。む。心。地。さ。へ。堪。が。ら。ん。傷。小。人。の。な。折。小。餅。九。郎。の。情。々。地。の。技。太。郎。と  
 商。量。を。申。す。我。意。不。那。叫。子。の。千。代。の。殘。黨。濱。縣。馬。助。の。女。弟。也。の。良  
 人。と。い。は。是。も。入。る。年。増。せ。又。那。臥。間。の。良。人。あり。小。里。裏。小。戰。敗。れ。時  
 陣。殺。あ。ら。と。い。ふ。れ。問。で。も。あ。ら。早。夜。家。々。然。が。て。あ。れ。甲。也。も。の。寤。寐。不。眠。あ  
 ら。底。止。息。ぬ。郎。欲。あ。く。思。ふ。べ。我。も。亦。美。婦。欲。得。と。久。く。求。れ。ぬ。の。ま。の。嬌。み。い  
 ら。今。番。の。恩。賞。の。叫。子。ま。れ。臥。間。ま。れ。相。公。と。い。ふ。事。も。あ。ら。女。も。思。ふ。も。勝。軍。此  
 後。を。の。の。の。美。を。稟。一。出。ぐ。も。あ。ら。既。小。這。意。あり。あ。ら。守。り。て。の。早。暮  
 さ。の。恰。も。画。る。餅。を。見。て。饑。を。忍。ぶ。異。る。の。然。が。先。那。戸。山。小。告。て。媒。妁。あ。ら。く  
 誘。へ。後。不。乞。稟。と。思。ひ。甚。麼。と。情。語。け。技。太。郎。の。笑。片。向。て。波。の。頭。小  
 傳。を。覚。え。ち。領。を。答。る。や。然。入。咱。等。も。亦。其。意。あり。異。義。中。に。我。も。間  
 諜。の。役。也。姑。且。安。房。小。在。り。時。箇。様。々。の。不。造。化。也。一。旦。捕。捕。られ  
 か。ど。も。饒。さ。れ。て。か。り。あ。ら。里。見。殿。の。心。操。と。那。里。の。虚。実。を。大。爺。小。報。稟。あ。ら  
 小。功。あり。あ。ら。と。和。王。と。共。侶。小。那。嬪。一。個。を。乞。ま。ら。ん。あ。の。美。を。戸。山  
 媪。小。告。て。先。の。縁。を。結。び。置。く。送。小。樂。一。か。也。和。主。の。臥。間。欲。叫。子。欲

八天傳九郎卷五十五

と回ふを餅九郎守のむき開の回るまもあまをいれぬ叫子せん戸山の媼  
の我情願と和王告て誘へ和主の意中の我告んと示し合せり人な折折  
送代小妙真を情地招ひて云云と似ける面の皮厚く其情慾を打  
出せ媒妁のそ譚へ妙真の呆果て鳥嶺人なりと思へども暴立る必  
怨く事先強顔のせを陽然らぬ面色成ると就らる向の  
術と延き空言さるるも措れぬ卑節節節節々々と耳に告る腹立  
あつたべれども大阪主の逆ら謀りぬいこの這頭ふとむ然るも亦物怪  
幸あるのさるる色もわぬいそと解り論せぬ卑節節節節々々と  
心もぬ堪ぬまよ立ら腹を横日刺き臆推開て天を瞻る物思ひ真愛の那  
里も異なるぬ憂ふ就ても舅姑と親子の上も左も右も心よかる胸の雲雪の稀る  
る冬の日を秋とぞ思ふ露路の玉の濡るる袖の涙も不題の目洲崎の里見の

陣所より遠見の為隊兵を領て其頭の浦巡りを致し兩個の小兵頭印東  
小六明相 柳ヶ子 荒川太郎 一郎清英 二個の艦心見を捕捕て本  
陣へ牽りて来り俱小訟稟さるる臣も方僅這浦續ける馬頭上りて這二  
個の艦心見を生拘り来歴出処を責問ひひか他筆の素藤と同悪て  
曩の麩南の城を没落さるる武田左京亮信隆の使也。當御陣へ参る者  
といへるるぬぐみいへども敢是を恣ふせむ憲断を請はるといふ是も義成  
甲の端近く其生物もと実檢あり。則軍師大阪毛野奉りて其言れ  
虚実を鞠問き大山道節の明相清英の隊長を俱に這詮議の與り  
けり。然るの生拘二名の内武田信隆が猶子也。一條端四郎信有と喚做  
ま一個の社校あり。の者則陳きていさ。小可也。今番信隆の密使も立ら  
ま。推て御陣へ参り。則是別義ふぬ。曩も信隆諺る。草田素

大傳し陣巻

大傳し陣巻

藤と親<sup>あつ</sup>かりけり。交遊<sup>かうゆう</sup>の罪脱<sup>ついで</sup>るふ路<sup>みち</sup>も。竟<sup>つひ</sup>お御敵<sup>おんてき</sup>とるう<sup>ま</sup>。脱<sup>だつ</sup>くも勢<sup>せき</sup>ひ  
 窮<sup>きゆう</sup>り。二<sup>ふた</sup>の残黨<sup>ざんたう</sup>と共侶<sup>きうりよ</sup>お乱戦<sup>らんせん</sup>の中<sup>なか</sup>お命<sup>いのち</sup>を免<sup>まぬ</sup>き。甲斐國<sup>かうはい</sup>へ封<sup>ふう</sup>じつ國主<sup>くにぬし</sup>武  
 田信昌<sup>たのぶまさ</sup>親族<sup>おんしゆく</sup>るれ<sup>ま</sup>身を寓<sup>よせ</sup>く。今<sup>いま</sup>まで那里<sup>かた</sup>おひり<sup>ま</sup>扇谷<sup>あふぎやう</sup>より。信昌<sup>のぶまさ</sup>へ加勢<sup>かせい</sup>の  
 允<sup>ゆる</sup>ず。軍兵<sup>ぐんべい</sup>を催促<sup>せうそく</sup>せざる。信隆<sup>のぶたか</sup>是<sup>こゝ</sup>お時<sup>とき</sup>をゆ<sup>え</sup>。請<sup>こゝろ</sup>を信昌<sup>のぶまさ</sup>の代軍<sup>しろぐん</sup>とて。隊兵<sup>たいへい</sup>總<sup>そう</sup>お  
 三百餘名<sup>さんひやくじゆなま</sup>を領<sup>りやう</sup>く。御<sup>ご</sup>お五十子<sup>いそご</sup>の城<sup>しろ</sup>お到<sup>いた</sup>りぬ然<sup>しか</sup>へ其志<sup>そのし</sup>陽<sup>やう</sup>の扇谷<sup>あふぎやう</sup>の從軍<sup>じゆん</sup>おひ  
 へも。先非<sup>せんひ</sup>を悔<sup>くわい</sup>く。當家<sup>たうけ</sup>の仁義<sup>にぎぎ</sup>を景某<sup>けいけい</sup>の臆<sup>おく</sup>念<sup>ねん</sup>既<sup>い</sup>お久<sup>ひさ</sup>し。いぞ舊罪<sup>きうざい</sup>を恩<sup>おん</sup>  
 赦<sup>あや</sup>む。異日<sup>いじつ</sup>圍戰<sup>ゐせん</sup>の時<sup>とき</sup>臨<sup>りん</sup>く。信隆<sup>のぶたか</sup>必<sup>かならず</sup>裏伐<sup>うらひ</sup>て。大功<sup>たいこう</sup>を奏<sup>そう</sup>ま。其忠<sup>そのちゆう</sup>  
 其功<sup>そのこう</sup>ある於<sup>お</sup>て。舊<sup>ふる</sup>お因<sup>よ</sup>く。廳南<sup>ていなん</sup>の城<sup>しろ</sup>を返<sup>かへ</sup>。賜<sup>たま</sup>へか。情願<sup>じやうげん</sup>只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>御許<sup>ごきよ</sup>容<sup>ゆる</sup>  
 ゆる。免許<sup>めんきよ</sup>の御書<sup>ごしよ</sup>を賜<sup>たま</sup>りて。異日<sup>いじつ</sup>の證文<sup>ていぶん</sup>お做<sup>な</sup>り。言偽<sup>ことごと</sup>りるは為<sup>な</sup>る。怪<sup>あや</sup>せ  
 一條<sup>いっじやう</sup>信有<sup>しんゆう</sup>を保質<sup>ほくしち</sup>あり。口措<sup>くちそ</sup>せぬ。おの義<sup>ぎ</sup>信隆<sup>のぶたか</sup>の。五十子<sup>いそご</sup>の城<sup>しろ</sup>お入  
 り。以前<sup>いぜん</sup>路<sup>ぢ</sup>を。悄地<sup>せうぢ</sup>お小可<sup>せうか</sup>お使<sup>し</sup>を課<sup>か</sup>せぬ。信隆<sup>のぶたか</sup>が。早書<sup>はやしよ</sup>の。秘<sup>ひ</sup>して

小可<sup>せうか</sup>が衣襟<sup>えいせきん</sup>の裏<sup>うら</sup>お在<sup>あ</sup>り。合<sup>あ</sup>ひ出<sup>で</sup>。中<sup>ちゆう</sup>の相違<sup>さうゐ</sup>あるべし。とひけり。義成<sup>ぎせい</sup>  
 是<sup>こゝ</sup>をち。隨<sup>ま</sup>即<sup>すなは</sup>明相<sup>めいさう</sup>分<sup>ぶん</sup>。其<sup>その</sup>信隆<sup>のぶたか</sup>の。早書<sup>はやしよ</sup>を合<sup>あ</sup>ひ出<sup>で</sup>。毛野<sup>けの</sup>  
 讀<sup>よ</sup>せ。其<sup>その</sup>文<sup>ぶん</sup>今<sup>いま</sup>信有<sup>しんゆう</sup>が。趣<sup>おもむ</sup>と。聊<sup>しかう</sup>も違<sup>ちが</sup>ふ。尾<sup>お</sup>お數<sup>かず</sup>ゆる  
 る。折言<sup>せつげん</sup>文<sup>ぶん</sup>お血<sup>ち</sup>を汰<sup>た</sup>。赤心<sup>せきしん</sup>を見<sup>み</sup>。義成<sup>ぎせい</sup>是<sup>こゝ</sup>を听<sup>き</sup>果<sup>は</sup>て。毛野<sup>けの</sup>と道節<sup>ぢゆうせつ</sup>を  
 見<sup>み</sup>。汝<sup>なんぢ</sup>の。汝<sup>なんぢ</sup>を何<sup>なに</sup>と思<sup>おも</sup>ふ。量<sup>りやう</sup>お武田<sup>たけだ</sup>信隆<sup>のぶたか</sup>が。甚<sup>お</sup>田<sup>た</sup>素藤<sup>すとう</sup>と交<sup>ま</sup>り。人<sup>ひと</sup>  
 人<sup>ひと</sup>を知<sup>し</sup>る。新<sup>あらた</sup>心<sup>しんしん</sup>るれ。畢<sup>ひ</sup>竟<sup>けい</sup>義侠<sup>ぎぎやく</sup>の本性<sup>ほんしん</sup>るれ。勝<sup>かち</sup>くと。知<sup>し</sup>る。一旦<sup>いつたん</sup>逆徒<sup>ぎやくてい</sup>お  
 與<sup>よ</sup>せ。今<sup>いま</sup>の悔<sup>くわい</sup>く。思<sup>おも</sup>ふ。保質<sup>ほくしち</sup>を。寄<sup>よ</sup>せて。欺<sup>あや</sup>む。誠心<sup>まことしん</sup>を示<sup>し</sup>す。  
 心<sup>こゝろ</sup>麼<sup>や</sup>許<sup>ゆる</sup>せん。汝<sup>なんぢ</sup>許<sup>ゆる</sup>せん。汝<sup>なんぢ</sup>試<sup>し</sup>ふ。是<sup>こゝ</sup>を議<sup>ぎ</sup>せ。と。向<sup>むか</sup>へ。道<sup>ぢゆう</sup>節<sup>せつ</sup>毫<sup>ご</sup>も。礙<sup>あ</sup>り。  
 ぞ。脚<sup>あし</sup>誑<sup>ごう</sup>の。恐<sup>おそ</sup>れる。御<sup>ご</sup>仁心<sup>にしん</sup>の。至<sup>いた</sup>り。今<sup>いま</sup>の世<sup>よ</sup>の人心<sup>にんしん</sup>。誓<sup>ちか</sup>言<sup>げん</sup>盟<sup>めい</sup>お背<sup>へ</sup>に。保質<sup>ほくしち</sup>を  
 棄<sup>す</sup>る。敵<sup>てき</sup>を謀<sup>ま</sup>は。者<sup>もの</sup>間<sup>ま</sup>是<sup>こゝ</sup>あり。况<sup>ま</sup>や。甲斐<sup>かうはい</sup>の。武田<sup>たけだ</sup>の。甘利<sup>かんり</sup>元元<sup>げんげん</sup>る。ど。知<sup>し</sup>  
 智謀<sup>ちぼ</sup>の。老<sup>らう</sup>黨<sup>たう</sup>る。は。開<sup>ひら</sup>く。臣<sup>しん</sup>を。知<sup>し</sup>る。所<sup>ところ</sup>へ。傳<sup>でん</sup>聞<sup>ぶん</sup>を。宣<sup>のたま</sup>ふ。

然信隆が降参保質をりてまればと再議不及で恩免ら  
 物体をくやいんと議事を義成うちけて毛野が意見を問ふ然  
 道節が小心の量る所穂當中危くまひへとも豊後の長もいふ今信隆の  
 歸降の願ひを疑ふ許さぬぞへ脚仁政も異同あり後小是をり者も  
 べし縦今赦免の御書を賜り信隆実の歸服せを情地の謀るあり  
 とも扇谷の士卒那意を悟り御書あるをのぞ知る反々信隆を  
 疑ふ然は是れは是れは反間の計約のりともいふ孰の方小御方益あり  
 使御書を賜り信有をのぞ保質を留め且信隆の意中衣の虚実を  
 宵まる若工やいべと答稟せ道節も悟りて獨點頭くも義成遂に  
 かの議小任し則赦書を兩個の使取せ返遣し信有をのぞ  
 稲村を清澄預けひけり。

第百六十四回

重時 異同兩姓の逢ふ  
 義任 藁人三勇と先小庄

這時下總より行徳口敵を待り大川庄小田小文吾の登桐山八満呂  
 復五郎若と俱七八千の兵をわていきて其地小赴く程上總下總の路次中  
 かの隊小加附く御士豪民の子弟の皆勇わて各々好む者一千二百名をり  
 公既あて莊小文吾の行徳に到り時這加勢の士卒六皆兩股原木の間小  
 住りて下總より千葉考流の壓を市原の御士館持儀杖朝經夷瀆の  
 御士大樟村主俊故も則かの隊の頭人より原本兩股の間より行徳へ一里を過  
 然大牙接る処の相救余便り宜は角の勢を張る小足れり後工を  
 後安らける莊小文吾も八七が儘人馬を扱めてあの日行徳へ來ぬも敢  
 民業を妨げ又民屋を焼拂る地の理不据る塩濱小陣を南左の

八代傳九郎卷三十五

三十一

大徳寺藏



ありとも我々の則是防禦使ゆく找る人の國郡を奪んとそ求むるあり  
 今若謀計をのり那両柵を捕れとる難くもあむぬ技をさる先只館の  
 知旨を守りて寄隊の大軍と待て一度破らんとお莊々素よりその意も  
 是ハ隨即濱邊の柵を構へ且塩濱と今井の上流を多く快船と維ぐの  
 爰ハ長陣の準備して寄隊の向ふを俟一か十一月ハ果敢る盡て十月の  
 初ふるおけり有佳一程ハ滿呂復五郎重時ハ這陣中ハ傲上もる徒然ハ  
 堪ざりけれ有一日獨立出て漫ゆるある程ハ徳本ハ徳と唱ふの左右ハ  
 川添の村落ヨリ所謂堀江猫貫鉄真同関嶋新井湊村河原大  
 和田稻荷木ハ市河ハ至れハ街衢同トくぞの餘も猶もるを要るけまお  
 備るる間話休憩する日復五郎重時ハ東西とち巡る隨ハ憶む湊  
 村ハ亦よける折々憂々丁々と焼刀の棧打鳴も鏝の立日耳ハ响ゆる高か

ほととこれハ這村の坎稍盡処ハ最寒る方鏝匠ハ家ありと主人とかがけ一  
 個の漢子年齢ハ五十有餘る其子也あらん年十六七る一個の猴子  
 と相共ハ鏝を鍛冶ひく長く器械を製出せまを有ける重時ハ今這里ハ  
 悉く憶む其店前ハ歩を駐りて簾ハ掛夾みる出刃と刀子を見るハ皆  
 是藤原信之と勅ある四字の銘あり又其側の壁ハ白土一七大多竹輪  
 内ハ屋字と寫るハ九屋るべと猜せらる且其猴子の逞ハげる全身黒  
 く膏満る眼圓ハ骨太ハ身ハ袴の敗て下短る夾衣只單被ハことど  
 敢寒けた面色せむ膳祖ハる兩袖を腹ハ巻て裳を股まを引折結  
 合鏝を打ハ為体都て槍棒の多法ハ稱ひて替力あるべく見えハ  
 重時ハ立もぬ去らむ其冷ハ果ると急ハ主人を喚てハ其里  
 漢子ハ作り新刀ハるやあハ我買ま欲を出して見せハ甚麻ハ

やと問れて主人の見久の官人先柩へ尻を掛せ先代まで刀鍛冶で  
 新刀もよくいひ小可の其弟子を木尻八と喚ぶる。老老化て鈍るも本性  
 故の技は拙くはあらず刀の作りのとを重時うちひきて開き左も右も  
 あれぬの家筋へ九屋の竹輪の安房の満呂の花薙我の昔年亡  
 びる麻呂小五郎信時の親族。満呂復五郎重時は今里見殿の  
 仕より。昨今塩濱の陣の存。若是汝が東人の先祖へ満呂氏ありさ  
 る矧矧や又這少年の骨相を見て猜さる武藝を嗜む者似さる年の  
 幾箇も名を何と久後。馮の心地を。由緒のやむを欲しといひ  
 きて木尻八頭を撥て原来御身の満呂氏を濱の御陣より求ませ。矧矧  
 是まの御小可が故東人も則是満呂氏也。在昔鎌倉の將軍家  
 創業の時頼朝公に従ひあり。麻呂五郎信俊殿とやら。庶流の人も

子孫民間の降り。錢近きて生活も口碑。小可の詳さの知る  
 父とも既小猜し。今も不満呂氏。信之家の通稱。然し這子の小  
 可が主の助也。故東人九屋太郎平の獨子。若れ再太郎と喚做。二  
 親早く身故り。小可年未後見して。今茲は十八歳。然し這  
 子の生年の文正元年丙戌也。且丁の月日お生れし。所以矧甚。然し熱性  
 る。生活さへ火を宗とせ。鍛冶の子で。性として水を好む。冬も換  
 細て。村後。泉河へ身を漫まら。反て快いと云ふ。あつた。誰  
 教ね。水戯れ自由を。夏も早瀬を。西の岸。届  
 る。小可叱り。林の。免毛。聴き。嗜好。又。是の。角。舐  
 白打槍。杖。劍。悄悄。地。其師。就。学。の。田舎。良師。遇  
 り。何を。扱。技。月。か。這頭。白。人。相撲。取。と。い

似而非腕扱でいへ親共肖さば破落戸まきやくいんといつて呵々とうち笑へ  
 重時只管感して已まむ再太郎とてとんたのりやう。意の優る這子の本  
 性今戦國の時方りと。莊客まれば職匠もれ武藝とて純袴を求め名を  
 揚家と與ま。但一那身の熱性とも冬の早水お浸りて凍がるやあらんや  
 あの一條の信とて詰ると木丸八寸のむを訝りあの理らるら。あの是も亦極めて  
 故あり我家五世の祖にける。麻呂太郎平信之より相傳へ一人魚の膏油今も  
 有り傳へ云ふの膏油の昔一箇の樽お装れて塩漬お漂寓りし信之不思議  
 拾得て秘藏せり其樽の樟木とて伝へ藤葛を植へたる其大洋お漂  
 二年久しければや。牡蛎海藻とてよく粘るる人魚膏油と寫し四箇  
 字の幽お讀れとを然とも孰の國の産物と流れ來ぬ故を知も又何お用る  
 正を知を凝りと蠟の像くもりて開か終藏り置ける有一年一個の頭陀

あり我家お宿せり日其頭陀件の膏油我家お在りと少知りて主人信之お誨  
 るも。倘人ありて人魚の油を吹ふと其其時三千年と有る。惜る膏油氣の  
 齡を延ま奇効を。遮莫是と燈火お做まると風雨おも滅びて日月と光を  
 同く又人お身の鼻口耳腋肛門都て九孔お塗まて水お入れ大寒の日といとも猶  
 温も凍るると波お潜りて海も涉ま又刀劍お塗まると鐵を研り角を  
 辟くべし試めるといと。這信之の時よりて刀鍛冶と活業おある件の人  
 魚の膏油とて作る所の新刀お塗まて鐵研と名づけ是と售る果し其  
 驗ありければ漸々お初れて家傳おあるも。時惜や膏油を用盡して残り  
 二三合お残り。是を兒孫お貽さんと。則硝子の壺お藏め其歲月を寫し  
 まて傳へて今おあると。再太郎の試み大前年の冬も那膏油と身お塗ま  
 して今井河お入て。河水温ると湯の如く。波濤を潜るも自由お前回の



岸へ渉まると見る者一奇とせざるもの任れ他が熱性や泪を好むも  
争む冬の日水小戯れても凍む溺るゝる人魚の膏油の奇特多然るを  
益の技かのも費るが落情さ小可駭き推禁て隠して使せざりけれども今  
る所を一合あり二合あり足さるべし然る冬の日水を咽で凍むとい奇談ハ  
是ある所以といと鼻春蟻めりて説誇る折々這門邊來て立在る一個の  
童男ありいと寔なる行社衣を腰短刀を擋下り不跨做し背小最なる  
袂裏衣を駢ふるが左の小菅立を引提て前より王宮の問答み耳を敬けて  
穿て居ると知ざりし重時の今木尻八が話説て再太郎の人とると人魚の  
膏油の奇特を述べ欬び不堪され又木尻八に向いての言穿て穿て穿て穿て  
年の正小我と同宗也先祖麻呂信俊主の數世の末葉るんと今も小疑  
ふへく我の妻もる子もみけれぬと云ふた心地を言會卒小似れどもは這子と

我養嗣を取ね俱小里見殿不仕まると父祖の與も孝順を鍛治て其身を  
終小踰らん況今番の軍役不従て戦功あり名も揚げ家も良を幸ひあらん  
和主のあら甚麼を問へ木尻八沈吟して開他が立身出世の階梯小ゆるも  
我流るぬ先主人の獨子といひと云う再太郎を見らるる上再太郎和郎も目  
今少く如し和郎這大爺の養嗣あるが武士と欲する情願小稱らん左も右  
中も主張して隨意答稟さまやと云れて再太郎又死する多と解に貌を改め  
重時うち向ひて不肖の我身を子とせんと御意をゆゆる思ひける幸ひあを  
ゆるれ勿論他姓小の親の家を絶小忍び必推辭べけれども俱小是満呂  
氏中同宗これ一家小といふ今より親と仰せまらん先三拜を受あひといひ  
軀て身を退せて云ふ重時を拜せし重時も亦遽く礼を返せる良縁奇遇  
あは欬び不就て又木尻八を再太郎が日屬小似賢貌を言ひ我を折て呆



八天傳九輝卷三十五

六

大塚堂藏



鍛鐵以爲刀劍 治心誼爲武士

八天傳九輝卷三十五

大塚堂藏

ると半晌許まもくと口訥りていふを譽る親心子小甘口を村酒の用あるを  
 知らねども夜消の與小買措れ二合半堀架厨より出玉乾魚と吹草火の灸  
 舖の碟子執添て却重時を上坐お請ひつ俱小献酬を親子の契り千世までと  
 訖一壽詞も馮心此奥蘭不及時重時の酒菜せんと勤壯る長財囊裏よ  
 て合半を圓金十兩を紙か拍り便面小載て是を木丸八贈りていふ我のま其  
 詳多りと知ねども和主忠信の心りと先主人の狐を守育る甲斐もある我今切小  
 養ひ合て且塩濱の陣所へ移て還れば明日よりさる徒然るる陣中るれ餘  
 財をあらんと薄義するのくう這彼びと表するのこふと木丸八のあけ開の亦要  
 るは御仁義へ這大金と争何いせんと辭ひて受ぬらうと重時連り不推薦せよと  
 被るる合を先が木丸八只得受戴て馳て懐小來る程の再太郎の恭しく重時お  
 ち向ひて為小其勢ひを演小けり當下復五郎重時又木丸八お談するを知るごとく

敵の二柵の西の河原と妙見嶋小在り我再太郎と共侶小早端を涉り先馳りて  
 柵を破り思ふを為小人魚の膏油を欲まんとしへ木丸八異議もる開の  
 易たふと心々奥小赴りて件の堀と出まると又再太郎新に綿入衣を被更  
 さる故りる両刀を遞與りていふ是汝が先祖より傳られる什物るれも  
 數世用るれば藏措れ其甲斐ありて今日より主共侶の世におもろ刀お恥も忠孝の  
 道を喪ひぬとと論せ再太郎受戴てそらあるゆゑ親小存り親の思を  
 返さる別るとも義父大人の庇ふると武士の數小入るる必安房へ迎りて反  
 哺の本意を果まべるといふ木丸八領くの胸疼けれ答のせで涙と共小人魚の  
 膏油の堀と卒とむる小遞與せし重時怡悦小堪ぞ其心操を謝り告別て  
 身を起さるる程の門備小立る那童男の遠く聲を被て登りていふ  
 嗚林がゆり立投捨て内に入りて重時小向ひていふ仙もろ一時の哉番御目小

被り一日のわけを今の迷面をれし料は那里未嘗折這里を主人と問  
 答の名告ゆゆとゆゆ知ぬ小父は是我先父の義兄弟満呂復五郎王に  
 信已に安西出来介景次が獨子な安西成之介を侍り豫知せぬは我身  
 母の俗縁ある上總る山中村弓折塚の邊で遠山寺と喚做した山院の住  
 持の養れて年来喝食をゆりし是裏に我父出来介の忠義の為の素藤と刺  
 ち欲あし事成り其里の命を殞しと風の便り少くもち歎いてゆりし  
 夜夢不奇に告あり親の聲歎とわびてや成之介の事を知り今番里見  
 殿の大敵あり錦倉の両管領合縦連衡の大軍となり水陸より攻伐し我義兄  
 弟満呂復五郎大川大田兩將のふ隸られて必行徳の陣不在汝那里赴て  
 復五郎憑て役に従へ尙幸ありて軍功あり里見殿不仕まて我志と紹く  
 足ん勉かよふ歎と思へ愕然として敬篤に覺けり覺ての後の胸裏に其聲  
 尚蠅々と耳邊に在るふ似れ歎の中勇れて正並るべく思ひて師の坊  
 告知して身の暇と請ひける師の坊允しぬれ只得意衷と寫送し七情地旅の  
 準備とあり夜ふ紛れ亡命して且れ走り替れ宿る通路の艱苦と厭む今稍塩  
 濱の陣所に来て則脚身と尋ねし漫行をせしやれ那里未嘗とゆりし  
 なるて料らまも這里不在せしを知るの満呂同宗の義お侍て子と養ま欲玉  
 其要談の最中氣がゆる名告ゆゆとゆゆ言の果るともゆゆは義お侍るとは御  
 身の小父を猶子と齒して這番の役の俱しぬれ光と増ん玉櫛笥かきぬ我  
 二親も草の原を鉄ひゆる宿世鈍多劍大刀身の脚鬼の山院小生育る物部の  
 八十宇治河を疎けれと夏の日消し年毎山河の水を戯れて烟だの上とありし  
 暴河を渉まると後るる思ひゆる是は果敢た技を二箇の本事か立願ひを  
 遂さぬと口説く言葉の露も清心に見れて直と額櫛く板席の塵埃と洗ひ

八代傳九郎卷五十五  
 六八

流をまよふ涙坐不找とけ思ひのりなれ又這奇遇ふさてとどろ駭にあら木尻八再  
 太のいりえ重時へつぐとぞ感嘆大なるる平伏成之介の額と推抗は得と  
 見て現穉顔の覚ある出来介の子でありて杖も大なるるける哉汝が親の末期の  
 筆の寫貽され我れ一日も汝の思ふるあはれども早暮小素藤と對治の  
 折我身深瘰命危く療養某餌の月を削りて久し屏居てありける先月の中  
 院に至りて刀瘡をうけ愈へ又軍陣の從きて往る日あはれ地小あはれ汝の親の  
 送言と傳る便宜をりて其志親の劣らざる忠義を紹きて十五の足は總  
 角の身さへ命をさして今番の軍役の從んそ玉鉾の路辰に上總なる山  
 中村の山院より我を尋て來りけり了得親の子にけり出来介の義死の折館の  
 御尋わりて我既汝の事と言上り及び御執立ありとそ其御内意の事  
 事かたも是より後云云と事言され件の一妻の再度の御沙汰されり汝の親と

共侶の義侠の與命と捨ける南弥六の養嗣増松の例もあれ憑り當陣の  
 兩大将大川大田の懇言必や用ひられ年の幾あるけりとも向成之介然り今  
 茲に十二の幼るる宜く憑りしやるといふ袂と折返して情と感涙と推拭へ重  
 時さして慰め却木尻八と再太郎成之介と引會され甲乙俱小重重尊奇  
 遇を感下且歎びて送る痛思ひけり當下重時又父を我今日の漫約の獨陣中  
 徒然と慰る為のるるを情地の今井河の淺端と撈りて欲するのあれ然りと料  
 あり來て同姓の子と養食て且馮河の奇某とゆゑる多くゆゑに幸ひる不這義甥の  
 束つふ逢ぬ歎ひ何う是は優愛早く陣所は推乃かて我兩將の免許と請ひて  
 とをがせ誰と歎ひ勇さるん再太郎の膏油曇の袂束を引とせ家の修の兩刀を  
 腰に帯て成之介と共侶木尻八別を告て遠くも重時の後眼をみてと留難  
 なる木尻八を門傍の立て目送りける憐而滿呂復五郎重時の件の兩個の少年と俱して



要るるの事と論せ小文五も亦いさ。物本末の事終始あり再太郎が本  
満呂の存り就初重時が始り居りさるといふべし然りと他人の名字を乞ひ  
本を奪て末を欲りし始を思ひ終に就く事の宜しき事か。名を取ん  
実を取らぬ。とられて重時脱る。就介再太郎と共侶其秋ひ演りけ  
その時大川大田兩將の従ふ。當席に在る者の登相山八良千等皆是腹  
心よりぬるけれ。重時の又膝を找め。其れと小文五の告る。在下今日料を  
也。這再太郎が家お修る。人魚の膏油を以ては。人の身の九孔か  
塗りて水入れ。今大寒の時とも。敢凍え溺る。海を自在に歩をべ死  
経験の再太郎が既試ひひ。小実の奇菜とのへ。惜ひ。其膏油今ある所  
一合のものを。士卒の配分。あつて。在下親子と就介  
三箇の用ふる足。豫の館の御首。敵の推寄。あつて。待つ。找

むとを許されぬ。憚り。思意をり。量る。今目前の敵の二柵を破り  
河を渉。寄隊の胆を拉ぐ。全勝の勢ひ。豫。這を思ひ。衛  
身。立。土民の向。浅瀬を。歩。渉。死。処。る。就介  
も夏毎の溪川の水を戯れて。四。下。他。を。相。伴。て。今  
宵。悄。地。河。を。渉。敵。の。柵。火。を。放。さ。登。時。兩。君。快。船。を。一。隊。の。河。上  
より。前。面。渡。て。敵。の。活。路。を。殺。り。空。死。一。隊。の。徑。今。井。河。より。挾。て  
攻。伐。玉。の。唾。と。敵。の。頭。人。も。虜。せ。ん。易。名。候。一。の。談。儘。一。の  
む。や。と。言。男。も。薦。れ。小。文。五。の。只。點。頭。の。も。許。さ。あ。つ。た。良。千  
の。皆。是。を。喜。し。て。良。策。と。思。ひ。げ。中。の。莊。八。の。件。の。言。の。趣。と。果。て  
却。り。我。も。亦。豫。より。其。義。を。思。ひ。さ。あ。つ。た。館。の。御。首。を。り。今。日  
は。も。寄。隊。を。俟。て。徒。日。を。過。せ。只。戰。飯。を。費。す。の。謀。る。者。不。似。り。

然先那柵を破りて河を渡して敵を俟たし寄隊と戦せり他が  
勢ひを折る足んあれども那二柵を破る尚稀き大銃の備あり且究竟  
弓も引くも然る漫の攻伐は自家に戦致り思ひ入と黙  
止ふ満呂生然る奇謀あり是便宜といひて遮莫漫不揃るべし  
今宵我唐の張巡が段不傲ふて弓も引く菓人を船に建て鳥夜に乘りて  
突然と敵の二柵を推し合はれ他が前を合し銃丸も浴びて然る後那  
柵の頭人等が詭計をたし後悔す我士卒又後の夜の船を那に潜せり  
亦復柵を破ると敵の必先度不懲りて前を射せし銃砲を禁め  
倒由断せ是必然の勢也其折るを復五郎和殿の這少年等に従へり  
情や河を渉し敵の柵に火を放さる攻一攻り敵を拂ん先菓人の計  
畧も敵を懲りて弓箭火銃を禁め其の失ありと論せり重時信服

まで妙計とぞ感づけり計いと相歡ぶ登桐山八良千の小文五の白ひて  
のち下下近届軍軍の講をゆひり元人東都の羅貫中が二回志演  
義の載りと云那魏公曹操が呉の孫權と攻伐せり欲りけり赤壁の陣  
戦以前は呉の都督周瑜が胸狭くて劉玄德の軍師なり諸葛孔明の  
才と思ひ故猛可敷萬の兵を求めて其前約束の日と違ふ速く作りし  
を罪を以て斬るといひを孔明頼み諾みて敢て困る面色せし菓偶人を  
多く作りて舟を數十箇の艦に建て野干玉の夜の深し時候敵の守る城の  
る所の江邊に潜せり鼓を鳴らし関の聲を揚げ俄然として攻蒐るべし  
勢ひを示せり城の士卒も驚馬に謀り前を射せし風が横吹く驟雨  
よりも敏速りければ其菓人ふ立ッ処幾萬幾千條ると知る既に孔明  
明い思ひの隨ふ敵の兵を得て船を潜返さるし其前數萬あり



る。則周瑜（周瑜）と與へし。周瑜（周瑜）其智（そのち）我を折（をり）てい。媚（ね）く思（おも）ひた。是（これ）は。是（これ）の趣（おもむ）を今（いま）大川（おほなが）王（おう）の義（ぎ）を説（と）く。唐（たう）の張巡（ちやうしん）の段（だん）の倣（なま）ふと宣（のたま）ひ。い。あ。る。を。願（ねが）ふ。誨（し）め。い。ひ。と。向（むか）ふ。を。小文（せうぶん）吾（われ）う。ち。多（おほ）く。不（な）我（われ）の。只（ただ）武（ぶ）を。宗（そう）と。考（かん）ふ。其（その）義（ぎ）を。考（かん）ふ。大川（おほな）序（じ）次（じ）の。文字（ぶんじ）の。大塚（おほづか）大川（おほな）及（およ）ぶ。も。あ。ら。ざ。れ。ば。其（その）義（ぎ）を。考（かん）ふ。大川（おほな）序（じ）次（じ）の。人（ひと）の。疑（うたが）ひ。を。解（と）く。其（その）社（やしろ）衆（しゆ）微（ゑい）笑（わら）て。然（しか）し。羅貫（らくわん）中（ちゆう）の。三（さん）國（こく）志（し）演義（えんぎ）の。一（いつ）書（しよ）の。虚（うそ）と。実（まこと）と。相（あ）半（はん）して。作（つく）り。設（た）け。い。も。少（すく）く。も。譬（たと）へ。目（め）今（いま）登（のぼ）桐（どう）の。い。う。孔明（こうめい）の。敵（てき）と。計（はか）り。て。數（かず）萬（まん）の。益（えき）前（ぜん）を。令（しやう）る。素（す）より。陣（ちん）壽（じゆう）が。三（さん）國（こく）志（し）中（ちゆう）の。又（また）宋（そう）の。司馬（し）光（かう）の。通鑑（つうかん）の。因（よ）り。唐（たう）書（しよ）と。按（あ）ず。あ。ち。唐（たう）の。張巡（ちやうしん）の。故（こ）事（じ）と。羅貫（らくわん）中（ちゆう）の。撮（さつ）合（くわ）ある。那（な）張巡（ちやうしん）の。唐（たう）の。忠臣（ちゆうしん）の。玄宗（けんじゆう）帝（てい）の。時（とき）安祿山（あんろくせん）が。乱（らん）す。唐（たう）の。諸臣（しよしん）位（ゐ）高（たか）く。も。多（おほ）く。賊（ぞく）の。降（くだ）り。し。惟（ただ）張巡（ちやうしん）の。孤城（こじやう）を。守（まも）り。て。死（し）す。至（いた）る。ま。敢（あ）屈（くつ）せ。ぞ。竟（つひ）も。矢種（やしゆ）の。彈（たま）丸（まる）の。張巡（ちやうしん）則（すなは）ち。藁（かう）と。縛（むす）ね。て。人（ひと）の。ど。く。作（つく）成（せい）ま。者（もの）一（いつ）千（せん）餘（じゆう）。是（これ）の。黒衣（くろい）と。被（か）せ。て。

以夜（い）維（ゐ）下（くだ）ま。潮兵（しやうへい）。争（あ）ふ。て。射（や）る。久（ひさ）し。乃（すなは）ち。其（その）藁（かう）人（ひと）を。引揚（ひきあ）げ。還（かへ）せ。潮兵（しやうへい）の。益（えき）前（ぜん）十（じゆう）萬（まん）を。い。う。其（その）後（のち）復（かへ）人（ひと）を。維（ゐ）下（くだ）ま。賊（ぞく）徒（た）笑（わら）く。備（そな）へ。設（た）け。む。乃（すなは）ち。死（し）士（し）五（ご）百（ひやく）を。以（も）進（しん）く。賊（ぞく）の。陣（ちん）營（えい）と。斫（き）る。潮軍（しやうぐん）大（おほ）く。乱（らん）れ。遂（つひ）も。累（かさ）幕（まくら）と。焼（や）て。奔（か）る。追（お）ふ。十（じゆう）餘（じゆう）里（り）。唐書（たうしよ）第（だい）百（ひやく）九（きゆう）十二（じふに）忠義（ちゆうぎ）列傳（れつでん）張巡（ちやうしん）の。傳（でん）見（み）え。近（ちか）世（よ）天朝（てんてう）の。謀（めい）倣（なま）い。惟（ただ）千早（せんさう）の。楠（くすの）是（これ）の。忠義（ちゆうぎ）も。張巡（ちやうしん）と。拮（けつ）棹（しやう）。楠（くすの）公（こう）猶（なほ）勝（か）れ。其（その）他（ほか）那（な）演義（えんぎ）見（み）え。漢中（かんちゆう）の。閉戰（へいせん）孔明（こうめい）が。城（じやう）の。門（かど）を。開（ひら）いて。反（かへ）り。曹操（そうさう）を。退（ひ）け。其（その）實（まこと）の。孔明（こうめい）あ。ら。ぞ。則（すなは）ち。是（これ）趙雲（しやうゆん）の。外（ほか）の。門（かど）を。開（ひら）いて。敵（てき）と。退（ひ）け。者（もの）唐（たう）の時（とき）も。此（こゝ）あり。木子（もくし）謹行（きんぎやう）即（すなは）ち。是（これ）事（こと）の。唐書（たうしよ）第（だい）百（ひやく）十（じゆう）木子（もくし）謹行（きんぎやう）の。詳（しやう）又（また）孔明（こうめい）が。南蛮（なんばん）攻（こう）め。獅子（しし）と。作（つく）り。孟獲（もうかく）の。使（し）ふ。猛獸（もうじゆう）と。權（けん）を。追（お）ふ。奔（か）る。其（その）説（せつ）の。身（み）所（ところ）別（わか）れ。父母（ふぼ）ある。富（とみ）言（げん）え。信（しん）る。の。言（げん）れ。も。あ。不（な）要（えい）る。け。れ。具（ぐ）せ。異（い）日（にち）別（わか）れ。識（し）ま。べ。蓋（け）し。士（し）君子（くんし）の。釋史（しやくし）物（ぶつ）の。

毛鶴山... 評注及... 金聖歎... 外書... 是等の... 實を辨せ... され猶能... ぬあり... 因て聊是... お及り婦... 幼の爲め... 厭るべ

本と悦ぶ。是は学問の餘樂の。先と眼と史傳を晒して其見ると博くさ  
れ誰が虚実を分別して作者の隱微を發明せや。とて今酒家の敵の  
筆前を合する故事を談する。三圍演義を取ぎて唐書の張巡傳を引る。然  
るに疑ふところと解れて感傷良干重時。就小再太郎に至るまで耳新  
き思ひける。當下登桐良干の莊小向う向ひて言の勢ひを演じて争う。今  
小羽ぬこさきども和君等八人の天授の才を生れり。不知るふあま  
び今戦國の時方々武備いゆる。文學を自得の如く。不至んや感心の外  
ひる。とを其社小あむ。否と。我の甫の七歳。逆旅の母を喪ひ。大塚  
葦六の小廝。おせり。身之最賤。かけふ。幸や。大塚と情地の友垣を結  
び。那人の帮助。よ。和漢の史傳を見る。とをゆる。と文の  
大村大坂あり。又大江あり。大塚あり。我と及ぶ。所あり。を  
井を譽り。と。と卑下を。餘談不及。ひ。問話休題

小程の犬川莊小。犬田小。文吾の。日猛可。小士卒。小下知。一。菅原人。一千有  
餘を作ら。其偶人の外を堅く。内を空虚。是則外敵の空則を  
受く。内敵の鐵砲。鉛丸。と受納。せん。為にけり。既にして其  
瞳。氏。自。都。く作り。畢り。是。縮衣を被せ。船。四五十艘。小分り。載。士卒。其陰  
在。這艦隊の頭人。八郎良干。満呂復五郎重時。並。満呂再太郎  
信重。安西。就。景重。相。從。艦。每。雜。兵。船。工。と。共。二十名。小過。さ。り。けり。  
去。日。八。十二月初。の。三日。之。日。黒。白。も。り。夜。半。時。候。妙。見。嶋。と。西。河。原。を  
る。敵。の。柵。近。く。漕。上。を。諸。艘。一。度。小。真。然。と。攻。鼓。と。打。鳴。り。其。聲。を  
發。は。菅。原。人。の。陰。より。火。銃。を。發。ち。箭。を。射。出。して。突。然。と。して。攻。入。ら。す。く  
欲。し。其。勢。ひ。を。見。る。程。二。柵。を。守。る。敵。の。頭。人。猿。嶋。郡。司。將。衛。小。越。小  
權。太。表。練。彦。別。夜。又。吾。數。世。の。士。卒。と。俱。小。敬。馬。謀。で。敵。の。三。宮。を。奪。す。

見定めぬれば只破れんと構う。攻鼓の音の聲とあつて、各相争ふて、鏢  
砲を發ち、望前を射る。雨霰より敵を射りければ、敵は慌ち去らして、相挑む  
と三响許天の明えんとあつた時、良干と重時、八徐の諸艦と漕返させ、那  
里の首尾を莊と小文吾の報知し、却其詰朝、高米人におきて、望前を合  
る。約莫二三萬條あり、又高米人を解して、内より一銃丸を合ふ。其  
銃丸二三斗ありければ、勞せしめて得ありと、笑する者ありけり。徳而十二月四日  
よりぬきの日、廿八日、小文吾の良干、重時、信重、景重等の諸士を集合して、示を  
御前洲崎の御陣より遣され、快船來着きて、大阪大山の奉書あり在り。  
敵は月の八日の曉、天水陸俱に推寄せ、勝負を決まべしと云、既小其船を  
あり、愁々かまの地へ向ふ敵の軍兵も、今日、欽明日、日必あべし。因る其使者詰茂  
佳福等の幸便縁り、復五の情願、並に再大就人の事の趣を、大阪大山の

消息をて、件の御使船と返さし、必し上らべし。却今日の軍議を別事  
る。敵の二柵を頭人士卒の昨宵、鈍くも計られて、よく前九を費し、  
れ。今宵又船を寄せ、も、徴り、備を做さず、其懈る時、臨みて諸  
艦、亦一漕をせ、短兵急小伐破ら、但一那二柵の汀渚より、十間許水中  
に、鐵の鏢索と張、耳して、觸械と速り、馬脚を鐵駐を構うと、  
昨夜、我艦、其里まで届らざ、あ、早く見り、今宵、我艦、其れ、必  
件の鏢索と踏、柵の近つて、と、あ、の、何、何、と、商量を、莊と、共、侶、  
小文吾も、亦是を、談、軍議、小、脱落、する、けり、登時、滿呂、復五、郎、重時、ハ  
突然と、杖と、出、て、則、二、天、士、の、朝、ひ、て、の、か、り、其、水、中、に、鏢、索、の、事、ハ、昨、日、告、稟  
あり、如く、人、魚、の、膏、油、の、奇、茶、あり、是、を、り、て、刃、の、塗、れ、ハ、數、百、斤、の、鐵、も、も、豆  
腐、を、研、る、り、易、く、とい、ふ、是、を、り、て、今、宵、の、端、踏、を、在、下、の、許、り、の、再、大、就

介を相伴ふて。情地の今井河を。咽に。前へ。歩して。水中の。鏢索を。断つ。且。柵の水門を。潜り。入て。火を。放ち。柵を。焼て。暗跡を。仕。この。這義を。あ。美を。と思。ひ。入り。請。薦。れ。莊。有。理。と。領。て。其。美。宣。定。小。宜。一。から。む。縦。柵。を。攻。破。る。も。善。悪。も。別。ぬ。鳥。夜。る。れ。不。知。案。内。の。自。家。の。與。大。進。退。不。便。多。分。和。殿。先。柵。を。焼。く。并。燭。を。漏。さ。者。な。く。必。敵。と。亡。ま。へ。柵。の。頭。人。衆。兵。を。昨。夜。小。懲。り。備。を。做。さ。と。思。元。自。推。量。の。猶。小。心。不。あ。く。こ。ろ。和。殿。今。宵。先。不。找。て。情。地。小。河。を。涉。さ。も。只。の。功。を。貪。り。漫。不。端。ら。失。あ。る。心。勉。慎。と。ね。と。敬。言。れ。重。時。の。忻。然。と。歎。び。可。堪。され。ば。言。美。多。退。は。け。信。而。大。川。大。田。兩。將。俱。小。今。宵。の。隊。配。と。做。ま。小。莊。八。千。五。百。の。兵。を。わ。て。西。河。原。の。柵。を。伐。破。る。べ。又。小。文。吾。も。千。五。百。の。兵。と。わ。て。妙。見。嶋。の。柵。を。破。ん。と。四。日。の。日。昔。春。て。より。俱。小。

數十箇の艦を。法へ。情々。地。小。艦。ま。の。餘。の。衆。兵。を。留。め。塩。濱。の。本。陣。と。守。り。ま。小。登。桐。山。八。郎。良。干。と。頭。人。と。ま。那。二。柵。を。破。り。後。徐。小。河。を。涉。さ。せ。ん。為。有。信。一。程。小。滿。呂。重。時。ハ。再。太。就。小。と。共。侶。小。甲。夜。より。先。駢。の。准。備。と。る。ま。小。先。那。人。魚。の。膏。油。と。り。て。各。帶。る。兩。刀。を。抜。出。し。塗。る。と。幾。番。も。知。ま。の。餘。ハ。三。個。の。一。身。九。孔。都。て。漏。さ。塗。ま。る。ま。小。肌。膚。光。澤。や。小。膝。理。細。く。小。做。り。て。寒。氣。を。覺。む。惜。む。べ。膏。油。を。小。盡。さ。け。信。而。這。義。父。子。義。任。多。俱。小。牛。の。頂。草。と。り。綴。り。身。甲。を。鍔。皮。の。針。脛。衣。膚。を。鏢。衫。を。被。さ。る。と。腰。小。跨。る。兩。刀。を。波。小。合。られ。と。吊。緒。を。掛。て。帶。小。係。小。重。草。の。燧。囊。を。各。臍。の。邊。造。小。楚。と。夾。て。水。小。入。り。濡。さ。と。ま。多。既。や。て。の。夜。中。の。左。側。小。下。今。井。より。二。三。十。町。許。る。河。上。小。造。り。と。ら。連。り。暴。河。小。入。る。小。現。奇。茶。の。效。驗。違。今。

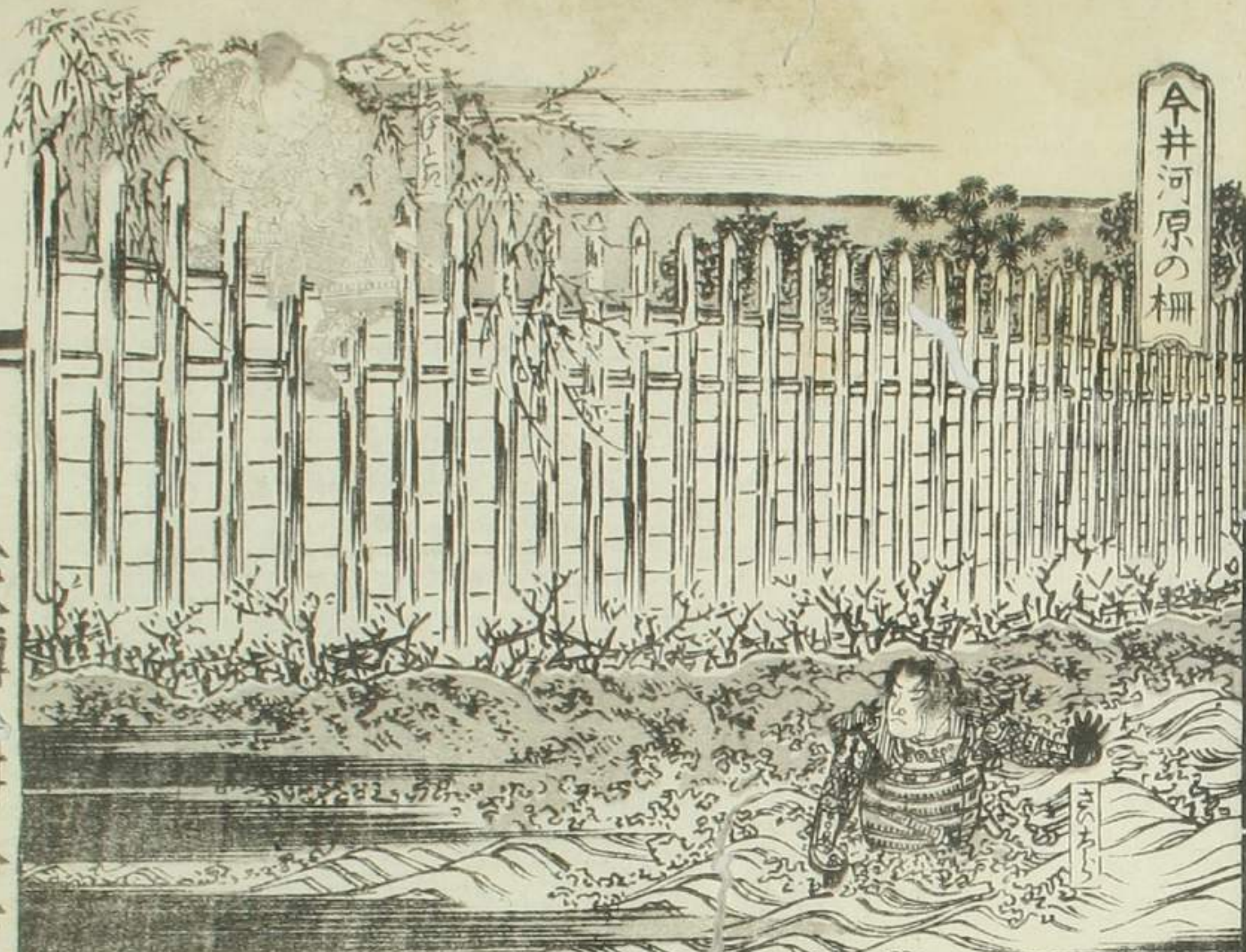
宵の寒風沙と飛。波濤起噪。且流早ければ音不啼く水の勢ひ。水  
海夜圍入る心地。堪かうらんと思ひ。水入りて。倒不其温る。湯  
湯の如く。且暴波を被浴ても。呼吸自在。在地上。異なる。淪れども。あつ  
く。身の浮く。泗易く。再太郎の夏の日。毎。這屋茶河を。洗。推  
流さる。ぐも。あ。重時。亦上。總。海濱。水。孰。甲斐。あ。あ  
亦俱。お。泗。獨。就。尚。未。熟。也。這屋茶河。不堪。ざり。けん。動。も。ま。ま  
流。さ。る。と。重時。再太。相。扶。けて。妙見。嶋。と。西河。原。の。柵。の。間。を。河。中。の。洲。あ。る  
処。不。あ。り。けれ。ば。這。頭。の。都。て。淺。瀬。を。僅。不。足。の。立。て。て。共。侶。一。霎。時。憩。て。  
猶。も。便。宜。と。ゆ。り。欲。ま。る。重時。の。豫。より。就。介。再太郎。不。悄。語。り。て。事。の。あ。ら。を  
ゆ。さ。ま。る。や。妙見。嶋。の。小。敵。へ。西河。原。の。柵。を。焼。く。那。里。の。あ。ら。う。う。乱。れ。走。ん  
再太郎。の。那。邊。不。張。且。一。る。水。中。の。大。鑿。索。と。祈。棄。て。自。家。の。檻。の。去。

向を閉ね。我の。汝。不。先。さ。ら。て。獨。西。の。柵。不。近。つ。て。潛。び。入。る。免。便。り。あ。ら。招  
れ。を。と。俱。不。せ。ん。必。惴。る。ぐ。と。諭。ま。と。就。介。再太郎。の。あ。ら。を。れ。の。切。不。找  
ま。ま。權。且。あ。不。總。ふ。の。う。う。水。ら。上。不。あ。者。の。只。是。三。個。の。乳。ら。上。の。と。仰  
て。天。を。瞻。れ。ば。霜。滿。星。光。め。れ。と。友。吸。不。知。鳥。の。聲。ま。る。の。と。誰。思。ひ。難。く  
妹。許。ゆ。り。河。風。寒。と。冬。の。夜。の。闇。を。目。不。見。る。の。も。る。一。倦。而。在。る。免。不。あ。ら  
され。再太郎。の。又。悄。や。不。妙。見。嶋。の。う。う。泗。に。お。果。して。柵。を。去。る。と。遠。く。水  
中。の。張。且。一。る。大。鑿。索。兩。三。條。あ。り。けれ。ば。躬。て。腰。を。比。首。と。脱。ゆ。と。是。を。祈  
る。不。奇。茶。の。效。神。妙。る。か。宛。草。蔓。を。共。又。る。像。く。力。を。入。れ。ぞ。て。断。れ。け。り。  
有。悠。り。一。程。不。重。時。の。就。介。と。洲。不。留。り。て。身。單。又。急。流。を。凌。浴。て。西。の。柵。不。近  
つ。か。あ。も。亦。水。中。の。張。且。一。る。大。鑿。索。あ。り。腰。刀。を。も。と。是。を。断。ゆ。比。首。其。刃。不  
隨。て。斫。ら。れ。て。水。底。不。沈。と。一。る。重。時。深。く。心。不。感。り。て。人。魚。の。膏。油。の。大。奇。大

效用する所一も違ふ惜哉是より自家の士卒配分せられたる我の事  
 後竟お世の人知る由る所へと思ひ々猶近づいて水門より柵内へ潜ひ入る  
 程七八間あり一時思ひ行る柵内より控と發せ大砲の憐む  
 重時ハ半身赤粉ハ打碎れ水激音殺伐の音共侶ハ波の底ハ淪  
 果て水屑ハ做らニ魂早く天ハ歸り六魄既ハ地ハ入る矣幸常迅速今  
 らる就ハ吐嗟とむりふち教驚々透ハ見果して小父ハ打碎れ  
 波の寄る人ハ何ぞ思摩何れ命運薄也恁も量り今宵の先  
 駈五十歩百歩の間ハ至り杖ハ憑りて来一甲斐也世ハ何れハ死  
 人の終りの果敢る悲しむといハ余音ハ立ね較人の淚珠成と歎  
 去てせん術知る在り程満呂再太郎信重ハ妙見嶋の柵近ハ水中ハ大鐵索  
 皆折捨る水音ハ波ハ起せ引返も方寸委る孝順義勇ハ  
 親の俵ら思ハ心の急れて就ハ總ハ居舊の洲ハ復泗ハ事  
 凶変と就ハ告ると聴て胸淡れ勢ハ折せ俱ハ哀も堪され返らぬと云  
 と悔且ち歎くと思へ計の劣所と知る進退ハ谷りて愀然と  
 半响許儘世を任す不慮と知る也且云の鐘聲幽ハ有恁  
 程ハ大川大田二隊の戦艦數十艘昨夜の苦業人建艦五六艘  
 先而分れて件の二柵ハ悄々ハ来ると再太郎ハ就ハ俱ハ逆ハ透  
 見ハ他那艘响ハ自家の艦の既ハ潜ハ来り我大人空々ハ我  
 們ハ在るが放火の約束違ハ戦ハ竟ハ合期世自家敗軍及  
 ん歎是も亦知る然ハ是大事ハ祈我門ハ罪免れ幸ハ  
 結さるも其折向を面目ハ我兩將ハ見ハ左ても右ても死ハ身ハ先  
 ヤ柵内ハ潜ハ入折も火ハ放敵ハ用心堅固也其事倘做ハ一人ハ

親の俵ら思ハ心の急れて就ハ總ハ居舊の洲ハ復泗ハ事  
 凶変と就ハ告ると聴て胸淡れ勢ハ折せ俱ハ哀も堪され返らぬと云  
 と悔且ち歎くと思へ計の劣所と知る進退ハ谷りて愀然と  
 半响許儘世を任す不慮と知る也且云の鐘聲幽ハ有恁  
 程ハ大川大田二隊の戦艦數十艘昨夜の苦業人建艦五六艘  
 先而分れて件の二柵ハ悄々ハ来ると再太郎ハ就ハ俱ハ逆ハ透  
 見ハ他那艘响ハ自家の艦の既ハ潜ハ来り我大人空々ハ我  
 們ハ在るが放火の約束違ハ戦ハ竟ハ合期世自家敗軍及  
 ん歎是も亦知る然ハ是大事ハ祈我門ハ罪免れ幸ハ  
 結さるも其折向を面目ハ我兩將ハ見ハ左ても右ても死ハ身ハ先  
 ヤ柵内ハ潜ハ入折も火ハ放敵ハ用心堅固也其事倘做ハ一人ハ

今井河原の柵



此の出像の本文の上下共第百八十三回在り後板出る不及て詳るべし

八代傳九郎卷三十五

九

大坂

うさ世

小文吾

アノ

アノ

みらくと

八代傳九郎卷三十五

大坂

敵と殺して共侶に戦殺せし今も躊躇ふと性起る武勇の獎も就  
 以有理と感激して開の勿論の意を那水の内中衛の敵兵に  
 小父の矢場を敷き置然と猶徳の又那里も入る欲せし前車は  
 思ぬ不似るの甚甚と談され再太郎も亦領けて然も愚按も其頭も過  
 因て意不他那西多波稍盡処より右の都て柵の助氣守兵必稀  
 矧亦那柵内より水上無る老柳一株われ開と樹傳て潜び入る期は後れ氣  
 背隊にも敵の用心那里も届て由断るを誘ふといふを就に建議  
 従て敢又尋思不及心術一對武勇の少年傳はる中波も浮沈  
 立廻りて柵の背隊不近死けり畢竟這而少年が怨不堪ね死を極め  
 孝義の先驗果せるや否や開又下回解分るを聴ねが。

南總里見八犬傳第九輯卷之三十五終

南總里見八犬傳第九輯下帙下乙號中畫工筆耕彫匠名號目次

出像畫工 玉蘭齋貞秀 

淨書筆工 谷 金 次 郎 川

卷三十三 澤 金 次 郎

卷三十四 常 盤 次 郎

彫工 三十四下 澤 金 次 郎

卷三十五 常 盤 次 郎

三十五下 澤 金 次 郎

南總里見八犬傳第九輯下帙下乙號下編五冊大團圓

本傳第九輯下帙の亦きたて甲乙二号とを其乙號尤長らるるを亦復さてこの上乙の中乙の下乙  
 乙号則十五冊にて結局に至りこの中編既刊の 註は乙の下編もも續けて全備せられたる

お花新書 中本第一集三冊 玉蘭齋貞秀画 来子の年出版  
 翁の中本の作文化以来より本房を以て未だ僅一作者の

開卷驚奇俠客傳第五輯 此の二書を年々八犬傳刊刻の故を以て同出  
 延引せり今茲八犬傳局を結ぶを以て又本傳を  
 刊行せ發販遠くを以て 五冊近刊



# 近世説美少年録第四集五卷

この一書も中絶右の俠客傳と同く八犬傳結局皆板の後必出さる近刻

## 著作堂一夕話

翁の隨筆なる物な是と一席話と録し又享雜の記と雜交記とありて世の言と備訓を附ける甚くは誤り。初集大本三卷近刻

右曲亭翁の新編本房近刻の者と畧記を 江戸書林 文溪堂正鋪藏板

曲亭翁精編八犬傳の一書を全本九十有二冊百七十回として結局大團圓に至ると云ふの内中第六十二回以下所云第九輯下帙の下乙號の下編五冊も陸續刊行しての全壁とるべきを翁二十六七年の腹稿大筆和漢との外は所見

所最勉むるといふ一刻板全部本房藏弄佳紙良刷製本之美甚甚賜顧の君子全備既小遠く及後板の如るを俟たか

書林文溪堂敬白

○家傳神女湯 一包代百銅 ○熊胆黑丸子 一包代五下

婦人必患妙藥 一包代五下 ○精製奇應丸 大包代五下 小包代五下

御茶わらぬ仙女香 一包四十八文 黒油美香 一包四十八文 江戸京橋南橋町三丁目程坂本氏

金匱救命丸 江戸本郷林氏製 弘野 彦

後板五冊推つて出版全部相揃ひ年々初輯より皆揃出候

# 天保十一庚子年春正月吉日發行

京都三條通東洞院東へ入

大文字屋得五郎

大阪心齋橋筋博勞町

河内屋茂兵衛

京都寺町通佛寺寺角

河内屋藤四郎

江戸大傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛板

# 發行 書行

